

あり、人類生活に貢献すると云ふよりはむしろ害毒を流す結果となるのではなからうか。

獨立せる法學、獨立せる經濟學、社會學、倫理學等々は要するに研究の便宜上假に理念界に於て分析抽象して考へられたものを對象としてゐるに過ぎない。之等は何れも此假にといふ前提の下に其研究を進めるものであり、従つて正當には之等は箇々に獨立し得るものではない。例へば近時我醫學界に綜合醫學が提唱せられてゐる。これは從來各獨立してゐるかの觀を呈した眼科、内科、外科等々の各専門醫學は、實は獨立しては其完全なる任務が達成し得られぬことが識られて、之等の専門醫學を綜合し、その綜合醫學の下にのみ各、其任務が達成せらるゝことが瞭らになつた爲である。而も更に進歩せる醫學者は醫學は醫學として獨立に其任務が達成し得るものではなく、之と心理學、更に宗教をさえも包括した所謂醫學以上の醫學の建設の必要をさえ提唱せんとする傾向にある。之は如上の消息を物語るよき一例である。又從來マルキストの一派等が夫々獨立してゐるかの觀を呈する各科學及哲學を綜合する所謂「社會科學」、——箇々の學を綜合する一體たる「社會科學」なるもの、確立に努力したのは此意義に於ては正しい。併し彼等が哲學を蔑視し、之を全部彼等の科學の中に解消し得るものと考へたのは依然として又誤斷たるをまぬかれぬ。蓋し彼等の對象の中に哲學と同じものを採り入れたの

が彼等の「社會科學」であるからとて共同の對象を究はめんとするのに必ずしも一つの方法が許さるゝとは斷定出來ないからである。我々の認識からすれば斯かる「社會科學」と「哲學」とは同じ對象を取扱ひ得るものではあるが、其方法に於て全く相異するものである。而も彼等の謂ふ「科學的方法」丈では、畢竟文化の現段階に於ては、複雑微妙の實人生を正しくあるが儘には摺み得ないこと上述の如くである。茲に新しき哲學的方法・全體的方法が必要となる。故に正しき學は「科學的方法」と斯くの如き「哲學的方法」とを包括統一したるヨリ高次の地位に立つ方法によつてのみ得らるゝものではなからうか。

要するに所謂獨立したる科學と考へられてゐる政治學、經濟學等々は實は窮極に於ては、獨立し得るものではない。それは個人が獨立してゐると考へられたと同様に重大なる誤りである。斯くの如く本來獨立し得ない科學を獨立し得るものと考へ、又同様に前述の如く從來の心理學が本來一體なるべき精神を智情意に分割し得るものと考へたところに、從來の科學に共通する根本的な誤謬があつた。即ちそれは凡べて近代ヨーロッパの個人主義社會に於ける原子論的世界觀に淵源する思想傾向なのである。

併し乍ら眞に存在する世界は斯くの如き原子論的世界ではなく、更に複雑なる世界、筆者が

第四編に於て稍々詳細に指摘するが如く、「具體的全體者」としての不可分なる多様、無限の流轉と差別とを含みながら、然も統一あり歸一するところある世界である。<sup>(註)</sup> 惟ふに全く機械的な原子の離合集散は、或は所謂形式論理の方法を以てしても、なほこれを把握し得るであらう。併し乍ら茲に所謂「具體的全體者」の世界の如きは、固より形式論理の認識能力を遙に超越した複雑極まりなき世界である。然るに從來の科學はこの複雑極まりなき具體的全體者の世界を對象としながら、それを恰も原子論的世界なるかの如く誤斷し、随つてその認識方法としても全く機械的なる形式論理にのみ依頼してゐたのである。これ從來の科學が、遂に世界の實相を把握することに失敗し、結局は現實を全く遊離した假空の觀念を描き出し、夫々に孤立した智情意、各々が獨立した政治、經濟、法律等々を空想するに至つた所以である。

註 本書第四編第一章第一節第二項參照

この故に、所謂「科學」が從來の科學の段階に止まる限り、論者の謂ふ如く日本精神の理論的把握は固より不可能である。併し乍ら科學は決して斯くの如き科學のみであるのではなく、又あらしむべきではない。即ち筆者は所謂具體的全體者を把握する資格と能力とを具へた科學

が存在し、或は少くとも成立せしめ得らるゝことを確信する。斯くの如き科學の方法が如何なるものであるべきかは固よりこれを簡單に表現することは出来ないけれども、その特徴は第四篇第一章に於て日本戰爭學の方法を論ずることによつて示唆してゐる心算である。だが、尙、これに就いては本書の全篇を通じて觀られ度く、筆者が茲に採用せんとする方法は、所謂形式論理に對して實體論理——生命論理——とも稱せらるべきものである。

ヘーゲルの唯心辨證法及びマルクスの唯物辨證法はなほ幾多の誤謬を含むものではあるが、而かも流轉する現實を流轉する姿に於いて認識せんとするものなる限り、所謂實體論理に近きものである。これ後に説明する如くマルキシズムの戰爭論が從來の戰爭論に較べて見るべき進歩をなし得た所以なのであらう。<sup>(註一)</sup> 併し乍ら實體論理は敢へてヘーゲル及びマルクスを俟つまでもなく、東洋、特に日本に於て、更に完全なるものとして古くより存在してゐたのである。例へば兵學の方面に於ては、これも後述する如く、孫子は夙に而かもヨリ完全なる形に於てこれを展開し、<sup>(註二)</sup> 山鹿素行先生は更に完璧なる姿に於てこれを驅使された。<sup>(註三)</sup> 然らば即ち吾人は何を苦んでか西洋近代の似而非科學に拘泥するを要せんや。

註一 本書第三編第一章第二章參照

註二 同 第三編第二章第四節第二項參照  
註三 同 第三編第二章第四節第三項參照

具體的全體者を把握することを任務とする實體論理は斯くの如く東洋の傳統であり、更に完全には日本の傳統なのである。日本に於てそれが驚くべき發達をなし得た所以は、惟ふに我が「神ながらあるがまゝ」の道が、それを生育するに適したからであらう。且又更に根本的には日本人の「マコト」や「清明心」即ちその素直な心こそ、それを生み出す眞の母胎であつたに違ひない。「あるがまゝ言擧げせぬ」と云ふのも、現實を遊離する概念遊戯を忌み嫌つた日本の心情の發露であると見るべく、随つてその本質に於てはこの實體論理を生み出した心と全く異なるものではない。然らば即ち實體論理を方法とする眞正の科學、換言すれば從來の科學を超越して、眞に世界の實相を究明し得べき最高次の科學は、日本に於て其の生誕が期待される。斯くの如き高次の科學は、所謂日本精神をも亦理論的に究明し得るものだと確信する。この意味に於いて筆者は從來の科學による日本精神の理論的究明の不可能を肯定すると同時に、更に高次の科學によるその闡明の可能を確信し、以つて日本精神の科學的理論體系化の一日も早からんことを熱望して已まないものである。

### 第三章 日本精神の意義

#### 第一節 意義

前節に於て現下の我國に行はれつゝある日本精神論の主要の批判検討を終つた。茲に我々は然らば日本精神とは如何なるものかと云ふ我々の見解を述べる順序となつたのである。

讀者は既に前各節に於ける我々の批判を読んで筆者の日本精神論の輪廓を會得せられたであらうが、我々は現在世上の多くの日本精神論の如くに一面觀を採るものではない。即ち夫れは

(一) 現代の國家日本の經世濟民原理乃至政治……國家の政治……を意味する……の指導精神であると共に又國民道徳でもある。

本項を一言にして盡せば國家日本の新しき精神である。

(二) 過去に於て把握し實踐せられたといふ歴史性から謂へば、日本民族に固有する精神であり、其妥當性、合眞理性から謂へば、之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らざ

る——世界共通の道であり、所謂規範性から謂へば世界普遍の指導精神たるものである。

註 規範なる語は普通の見地からは歴史や現在の事実の上に實在して居るか否かは問題でなく單に人々の頭の中でかくあるべきものとして考へらるゝものでも差支へない。所謂規範と存在とは別個のものである。然るに茲に用ひた意義の規範は道である。即ち社会的存在と所謂規範とを包摂したもの、而して又歴史的實踐の跡を將來踐むべき所謂規範とを包摂したるもの——一言にして謂へば日本人の道と謂ふ道の意義が眞正なる意義の規範であると認める。……(次節参照)

(三) 「現實に於て何處に明確に認識することが出来るか」と云ふことから謂へば第一には我國體、次には我が家族制度等の特殊なるものゝ中に求め得るが、所謂規範性から謂へば凡ての團體、凡ての社會、凡ての國家、更に又世界に限なく妥當し、普遍なる指導精神たるものを謂ふ。

(四) 其採るべき様相は當來時代——當に來りつゝある時代を意味す——に適するものなるも、其本質は我日本並に日本民族に歴史的に一貫して在る不可變なるものである。

(五) 之を其内容から一言にして謂へば「かむながら……自づからある」道……平易に云へば自づからあるの道、何等思想や思惟を越へて考へ出され、人に依つて作り出された所謂規範ではなく又觀念的產物ではない。事實として自づから自づから自身の内に有つ正しき法則であり、それは又我國體事實の中に發見し得らるゝ法則、——道であり、規範である……を謂ふ。

尙之を要約すれば我等の闡明せんとする日本精神とは

(1) 歴史の事實や實踐から遊離した觀念的な規範ではなく、日本國家の肇國、日本民族の發生以來一貫して把握せられ、實踐せられて來た我民族の本質的規範……この意義は項註参照……であつて

(2) 日本國家、日本國民並に日本民族等、凡ての日本の今明日……通釋には當來時代……の指導精神……政治、經濟、軍事、外交、教育、宗教、社會、團體、個人等々凡ての方面を指導する精神となり且之等凡ての綜合的なる指導精神

(3) 而も所謂規範として當來世界の人類に普遍妥當の指導精神たり得るもの更に約言すれば謂ふ所の日本精神とは

日本民族に固有一貫せる精神にして當來世界に普普妥當の指導精神たるものを謂ふ。

尙一言にして謂へば

日本精神とは「自づからあるがまゝの道」を謂ふ。

## 第二節 補遺的説明

我々は屢、次の質問を浴びせらるゝ。即ち「説かるゝ日本精神は實に結構極まるものではあ

るが、我日本の實際の歴史を顧みるに、斯くの如き立派なものゝみはなかつた」と。又他の者は謂ふ、「日本にのみ斯くの如き立派な道が存在して居たと考へるのは誤りではないか。夫れは動もすれば陥る自己陶醉であり、獨尊的態度である」と。

言々皆一應は尤もなことではある。だが併し之等の論者は甚だしい誤謬を冒してゐる。

先づ前者から検討しやう。前にも我々は屢、繰り返したことはあるが、現に我國で「日本精神を把握せよ！」「日本精神に還れ！」と叫ばれるのは何を意圖するのか？ 日本を良き日本たらしめやう。正しき姿、善き姿、美はしき姿の日本、動もすれば此眞善美なる姿が失はれんとするのに對して、より、良き姿を顯現せしめようとして日本精神が提唱せらるゝのである。より、惡き日本に導かんとして日本精神を高唱するものもなければ、之が闡明を爲すものもない筈である。

果して然りとすれば我等の求めんとするものは「規範」(前項の)であり、道であり、則である。

「規範」たり得るものが日本精神であり「道」たるものが謂はるゝ所の日本精神である。

而して我々と雖過去の歴史を顧みてその中に如何程にても非日本精神的、反日本精神的のものを認め得る。例へば彼の道鏡然り、足利尊氏亦然り。だが之等は何れも我等の規範たり得な

いものであつて、斯くの如き反逆者をなからしめんとして「日本精神」が叫ばれるのである。

人生の法則は價值法則であつて批判選擇する所に具現せられ、又具現せられた史的事實の内に最も妥當なる規範法則、價值法則が嚴存する。これ我等の銘記せねばならぬことである。

而も歴史的事實として我等の民族は斷じて道鏡、尊氏の如きものを日本人の範とは考へなかつた。特に歴史的に實踐せられた跡はどうかと云へば之等は反日本的なるもの、日本人の道に合はぬものとして、完全に克服せられ遷善せられて來た。極言すれば人々の觀念はともかくとして、我史的事實としてはこの道が一貫して實踐せられ來つてゐるのである。日本の要請すべき規範は實踐せられて日本人の道となつて來たのである。即ち我々是我歴史の中に嚴存する所謂日本的なる道は何かを探究せんとするのである。嚴たる我國體事實の中に我等の道、日本精神を發見せんとするものである。

從來の形式論的思惟からすれば理想、規範は程度の差異こそあれ現實や實踐からは斷へず或距離をとつて離れて居るものである。現實が進めば其時は既に理想も向上し、規範が實踐せられる時は更に高次の内容を有する規範が生れる。理想と現實、規範と實踐とは追ひつ追はれつ互に相互關係があるものではあるが其間には一致すべからざるある距離があり、冒すべからざ

る間隙溝渠が存する。斯かるものを理想と云ひかゝるものを規範と謂ふ。即ち理想や規範は其程度の差こそあれ、何程かは現實實踐から遊離したものと觀念せらるゝのである。だが併し之を斯く理念的、觀念的にではなく、より事實的に、より現實的に觀察する時如何。我々の行動、一般に實踐せられ來つた事實等は謂ふ所の理想から全く離れた現實でもなく、又現實から離れた理想でもない。今將に踐み行はんとする一步は所謂理想と現實とを包括したものである。「みち」「のり」はこの現實的理想にして而も理想的現實なる一步々々を連ねたものである。我等の踐み行くべき一步々々はこの「みち」以外に求むべきではなく、換言すれば彌榮へ來つた我國體事實、或は一貫する事實として嚴存するものは我等將來の「みち」「のり」たるを失はない。現實の人生に於ける自然、必然の法則こそ最上の規範的價值法則である。神の法則と自然法則とは一つのものである。而して之等と、一致する人爲法こそ眞の正しき人爲法である。之が「かむながら自づからあるがまゝ」の道である。要するに觀念的な從來の歐米流形式論理的な頭では理解しにくいものであるが、それは事實實體を正しく素直に諦観すれば直ちに理解せらるゝものである。我等は形式論理の無用論を叫ぶものではないが、より重要さを實體論理に見出す。又架空の觀念論を排して實在の事實を尊び、従つて我が一貫する歴史的事實の中に

見出し得る規範法則——「みち」を尊んで單に架空なる當爲論を斥けねばならぬ。大學の講義で所謂經驗科學としての社會學、史學、宗教學等々を講ずるのも可なり。但し單に社會は事實事象として如何にあるか、歴史は事實として如何にあつたか等のみを研究する之等の經驗科學よりも更に大事なものは之等と規範學とを綜合包括せるヨリ高次の學ではなからうか。例へば歴史學に於ては過去の史實の中に將來如何にすべきやを究めることが重要であつて、年號を記憶したり誰々が何々をした等といふ事實の究明のみに没頭するのがその窳極の目的ではないのではないか。大學の講義が動もすれば將に如何になすべきか等には關係なく、所謂理想を失つた講義に墮し、或は之とは正反對に現實から遊離した夢の世界……理想論、規範論……を談ずる講義となる等の批難は屢、我々の耳にする所であるが、之は歐米の近代の學なるものゝ傾向に對する最も重大なる警告と見るべきではなからうか。ある一部の人は今尙それが批難されるべきことゝは悟らずに經驗科學に於ては事實があるが儘に説明し理解すれば足り、規範や當爲の領域に飛び込むことは科學の冒瀆であり、之に反して規範學、政策學はあくまで規範を論じ當爲を論じて居ればそれで足り、此兩者は混同すべからず、此兩者は綜合發展せしめらるゝものに非ずと論じ、或は此兩者を綜合發展せしめたる「學」が望ましき最高の學であることを見

落してゐる人々があるのではなからうか。我等は須らく形式論理のみにこだはることなく、之から更に一步を進めて實體論理、辨證法論理に依つて物の正しき實體實相を把握し闡明するの必要あるを確認するものである。

之を要するに「我歴史の中には此日本精神に指摘するが如き斯く立派なものゝみはなかつた」と評論し反對せんとするものに對しては次の反問をなせば足るであらう。即ち反對者の「日本精神」論なるものは從來の經驗科學の意味に於ける歴史學的なるものか、或は明日の日本の指導精神は何かを求め而もそれが日本人の道として過去の日本に實踐せられて來た跡に照し以て兩者の一致するものを日本精神と云ふのかを。

次は第二の疑問たる「日本にのみ斯くの如き立派なる道が存在して居たと考へるのは誤りであり、戒むべき自己陶醉に陥り獨尊的態度に偏したものでないか」の疑問に就いて簡略に検討するであらう。

之に對する我々の答解としては要するに次の數言を以てすれば足るのではなからうか。「日本民族以外の民族に之と全く同じ道が把握實踐せられて來たと假定したら、それは「自づからある道」に合するものであり、日本精神と同じものと認めるのに吝ではない。只我等が日本精

神と呼ぶ所以のものは現在の我々の認識では斯の道は其他の何れの民族にも過去から現在まで一貫して實踐せられてはゐないと認めるが爲である。

而して之が最も明瞭なる實證を挙げれば上に一系の 天皇を戴き皇統連綿彌榮へに榮へて來た我日本の如き國が世界何處にかあらう？ 萬世一系の 皇統を戴くこと、彌榮へに榮へること……これは日本を置いて他にないのではなからうか。而も國をなすものゝ、自づからなる道はこれを離れてはないと認める。人生の眞理、自然の大法則、神の法は此萬世一系の 皇統を戴いて彌榮へに榮へる道を具顯する以外にはない。

以上により我等は、世界は廣く民族は多しと雖未だ以て日本精神ほどの道を道として實踐して來たものはないと認めてゐるものである。

尙將來日本精神が世界に普く光被せられたる曉は日本なる冠語は省いても差支へない。之に就ては先にも掲げたが、本居内遠が倭心三百首に序して謂ふ所甚だ我等の意を得たるものである。

「かのから心……漢意の意なり……といふがあるに分たんとて、ことさらに言はずとも有りぬべき皇國の本心をも、やまと心など云ふなるは、あやしと聞く人もあらむかし。此書の名も眞心と

もあらまされ」(要約)と。

即ち我等は曰ふ。「かのマルキシズムとかフラスシズムとかリベラリズムとか云ふものがあるに分たんとて、附けずともよい日本といふ冠詞をも附けて日本精神と云へるものにして、日本精神なるものを正しく把握してゐる人々からは、日本なる冠詞を附するは、あやしとも謂はれ得るであらう。實は世界の指導精神であり、只真心、まことの道ともいふべきものでもある」と。

再言する。日本精神とは日本に一貫して把握せられ実践せられて來た事實に内在する。而も之が「自づからあるがままの道」大自然の法則と一致する。さればこそ、始めて、此日本は悠久不可知なる古へより、現代に到るまで而して未來天壤無窮に生き々々として生き抜く事實たり得るのである。

この生き々々として生き抜いて來た事實は何を物語るか。

榮枯盛衰常なき世界に斯くも一貫して生き抜く事實は何を物語るか。眞理に即するものは強い。正しきは何ものにも優つて強い。事實眞理に即しない理論は夫れが如何に巧妙幽遠に作られたからとて畢竟それに即するものには勝つ得ない。儒教が如何に理論巧妙に過去の日本に迫

つて來たからとて結局考へられたに過ぎずして大自然が自づからの内に有つ自づからの法則——事實が自づからの内に有つ法則原理——眞理——に反する彼等の「天」の思想、「天帝」なる信仰は畢竟我皇國の事實を動かすべく餘りに微力でしかあり得なかつた。如何に玄妙に考へられた印度佛教も日本に來つては遂に其空漠たる世界主義を放棄し、又當初の「本地垂迹説」から全く反對の「鎮護國家」の現世的宗教となるに至つたのである。日本民族中の一部のもの誤まれたる思想は兎も角として、事實としては何等皇國の生命を中断し、或は敬神崇祖の事實を覆がへし得るほどの力は持ち得なかつたではないか。時代思想とか考へられた理論とかは別として嚴たる我歴史の事實は如何に動いて來たか？ 嚴として一貫する我國體事實は何を物語るか？ 眞理に即するものは強く、正義は強い！

悠遠の過去より現代にまで生き抜く「我國體事實」我國體事實とは人々の考へたる國體觀念ではなく、更に人々の考へたる事實……をいふはそこに、それ文の合理性があり、大自然の法則に適合する處あればこそ、それが事實として續いて來たものであり、生き抜いて來たのである。理論のみを尊ぶ人々は兎角其理論に迷はされて、この正當の事實眞理を解し得ない。最上の理論は合事實的であり、事實は理論の出で來る源泉そのものであり、事實以上に強く正しい理論はないのである。



日本精神は事實として歴史を一貫してゐる。我々は單に頭の中でのみ作られた理論には左程の價値を認め得ない。各國それ／＼に美しい理論も出來やう。併し幾ら立派なものを考へ出し作り出されたとしても、彼等のものは自づから具つて居たものではなく、悠遠なる歴史の事實に即するものではない。要するに今創られたるものである。少くとも歴史の上に一貫してあつたものではなく、今想起せられ考へ創られたるものである。のみならず日本以外に打ち出さるゝ理論は必ず部分的であつて、凡ゆる生活の部面を綜合する一體系の理論とはなり得ない。國家理論と世界理論・政治と宗教とは結局は必ず背馳するに至るであらう。例へば民族全體主義と將來の世界像とは如何に統一思想として聯關せしめ得やうか。然るに我々は我が歴史事實の中に、而も夫等凡てが一に歸するものを發見し得る。成程今迄は所謂「言擧げせぬ」ことが尊ばれて、未だ理論化せられずに放置せられてゐたのではあるが、今日、嚴たる我歴史の事實を言擧げてみれば、其所に偉大にして完全なる一つの理論體系をなすものであることを發見し得るのである。例へば我敬神祭祀の本質は我政治の本質、戦争の本質と一體不可分のものであり、社會生活、國家生活、經濟、外交、宇宙論、世界觀、等々凡てのものゝ渾然一體化せるもの即ち之日本精神である。夫等の間には何等の矛盾撞著なく一なる日本精神に歸し、一なる日本精

神から自から流露するものである。時により消長の差こそあれ、過去の時代より一貫してそれを保持し來つたのが我が日本であり、而かもそれは、現時の如く表面如何にも歐米文化の嵐に吹き荒されたるが如く觀ゆる時代に於てすら、尙我が民族意識の奥底には依然として潜在的に流れ、我々の血の中に深く脈打ち續ける基本性格であり、根本原理であり、根幹たる精神である。一刻も速にそれを表面にまで浮かび上がらしめ、現象形態の末々にまでそれを具顯するとは、我々に課せられた光榮ある責務であり、子々孫々に負ふ重大な我等の責務でもあり、また世界史進展の觀點からも我々以外に擔ふべきものなき緊急逼迫せる大使命である。

第三編  
マルクス主義戦争論と其の批判

## 第一章 マルクス主義と其の戦争論の特徴

マルクス主義とは、これを狭義・厳密にいへば、カール・マルクス及びフリードリッヒ・エンゲルスによつて主張せられた理論並にその実践を指すのであつて、一應はレーニン主義と區別せらるべきものである。マルクス主義者の主張するところによれば、産業資本主義時代——換言すれば、西歐に於ける初期資本主義時代——に生成せられたものが、マルクス主義と稱せらるゝものであり、其後資本主義が高度に發展して所謂獨占的段階——帝國主義の段階——に推移するに及び、この發展推移に伴つて生れたマルクス主義が特にレーニン主義と呼ばれるものである。即ち、厳密なる意味のマルクス主義も、後のレーニン主義も、共に廣い意味に於ては所謂マルクス主義ではあるが、この兩者の間には自ら時代的影響に基づく特異性があると認められる。而して、筆者がこゝで「マルクス主義戦争論」の名によつて呼ぼうとするものは、後者のやうな廣い意味に於て指すのであつて、その中にはレーニン主義戦争論をも含み、従つて現にソ聯の意圖する戦争の理論的根據にも觸れやうとするものである。

凡そマルクス主義にあつては、唯物辯證法・唯物史観など、いふ彼等独自の世界観に基き、他の一切の科学・哲学・宗教などを否定して、彼等に独自の所謂「社会科学」なるものゝ成立を主張することは、一般に知られて居る通りである。殊にその戦争論は、リベラリズム・フラスム・ナチスなどの歐米流の戦争論の何れとも全く異なる相貌と原理とをもつもので、ア・ゲロイ將軍の言葉を借りて謂へば「此の戦争術の神祕は、博學にして而も蘇聯邦の現況に注意深き觀察を向けてゐる人々の眼にも觸れない。特に西歐的な學問の方法に心酔し、之に傾倒する人々には一層不可解なものとして映する」<sup>(註二)</sup>而も、また「蘇聯邦に於て唱導する社会戦争なるものは、今日迄多數の軍事的天才が其の知識と經驗とを傾倒し來つた一般的正規の戦争と大いに其の趣を異にし」更にいへば「モスコに於ては西歐諸國のものと全く反對なる戦争に關する新原則の創造に努力して居る」<sup>(註三)</sup>といふほどのものである。しかも、マルクス主義にあつては彼等が社会變革の根本的意圖をもち、窮極に於て世界革命を企圖するものであるだけに、戦争論の研究は頗る眞剣なるものがある。エンゲルスに例をとつて見るも、彼は「將軍」と綽名されたほどの軍事通<sup>(註三)</sup>であり、幾多の純軍事的著作を遺してゐる。就中「ポーとライン」や七十年戦争を記載し批判した「戦役雜記」などは、その尤たるものであり、殊に前者の如きは最初匿名で發表

せられた爲、「當時ドイツの上級及び最上級軍人方面にさへ(就中カール・フリードリッヒ親王にも)、その書がプロシヤの匿名の將軍によつて書かれたものと見做され」「ドイツ一般に非常なセンセーションを捲き起し」「同じことがウィーンにも起つた」<sup>(註四)</sup>と謂はれてゐる。レーニンも戦争問題を特に重要視して居り、従つてコミンテルンを始め現在のマルクス陣營のものたちの軍事研究・戦争理論の究明には頗る熱心なるものがある。

註一 ア・ゲロイ、レオン・デヴェニン共著「赤軍と社会戦争」參謀本部譯本八頁

註二 同 書

自序 同 一頁

註三 エンゲルスが純軍事的方面に友人以上の觀察眼をもつてゐたことは、その著作を繕けば到る處に立証される。例へば「反デューリング論」の中の純「經濟學」の問題を取扱つた中に於てさへ、次のやうな軍事専門の見るべき所見が開陳されてゐる。

「軍事的領域に於ても、アメリカの獨立運動に端を發したところのものを、フランス革命が完成した。教練の行届いた聯合軍に對して、フランス革命は、教練は行届かないが、多數であるところの大衆軍を差し向けねばならなかつた。全國民の召集がこれである。パリを防衛するため、彼等は平地の戦闘に於て、大衆によつて勝たねばならなかつた。それには、單なる狙撃戦では間に合はなかつた。そこで縱隊が現れた。縱隊々形はあまり教練のない軍隊をも立派な秩序を以て、しかもより大なる行軍速度(一分間百歩またそれ以上)を以て行動させることが出来、この隊形は舊式の横隊々

形の堅固なる隊伍をも撃破することができ、如何なる地形に於ても、従つて横隊には最も不利なる地形に於ても、戦ふことが出来、軍隊を適宜な如何なる形にも、集合させることが出来、かつ散兵による狙撃戦と聯絡をとつて敵の横隊を阻止し、牽制し、疲勞せしめ、そして遂に形勢の決定的瞬間に於て、後方に控置した大衆の豫備を以てこれを撃破することが出来たのである。かくて散兵と縦隊との連絡を基礎とするところの——また軍隊を諸兵連合の獨立師團又は軍團に區分することを基礎とするところの——そしてナポレオンによつて其の戦略的及び戰術的方面を完全に發展せしめられたところの——この新戰闘方法は、それ以來、特にフランス革命に於ける兵卒要員の變化によつて、必要不可欠のものとなつた。けれども、この戰闘方法には、この外になほ二箇の極めて重要な技術的條件があつた。第一はグリボーヴァル(Gribeauval)によつて組立てられた野砲の輕便裝架法であつて、これによつて始めて今日野砲に必要な敏速なる運動が可能となつた。そして第二はフランスで一七七七年に始められたところの、従來は眞直に銃身の長さだけ續いた銃床を獵銃に倣つて彎曲させたことであつて、これによつて、より適確に個々の敵兵を阻撃し得ることゝなつた。この小銃の進歩がなく、舊式のものをしては決して散兵を行ふことは出来なかつたであらう。全國民の武裝といふやうな従來の兵制に對して革命的なこの組織は、間もなく制限せられて一つの強制徵兵制度(資産家は身代金によつてその義務を免かれるといふ制度を伴うところの)となり、大陸の強國は大抵この形態を採用した。たゞプロシアだけは其の擧國皆兵制度によつて大いに國防能力を養はうとした。のみならずプロシアは、その全歩兵に——一八三〇年と一八六〇年との間に

發達した旋條前裝銃が一寸のあひだ用ひられたのち——最新式武器たる旋條後裝銃を採用した最初の國である。プロシアの一八六六年(普墺戰爭)の成功はこの兩制度に負ふところが大である。後略

註四 一八六一年五月七日、マルクスよりエンゲルスへの書簡。

マルクス主義特にレーニン主義の戰爭論は、從來一般の戰爭論に比較して、頗る顯著な特質をもつてゐる。それは、ある觀方からは、寧ろ突飛とも稱し得る一面をさへもつもので、西歐的な頭腦では甚だ理解し難いあるものを含むでゐる。だが、我々が一度東洋的頭腦に立ち遣つてそれを通觀すれば、そこには純西洋的思想から離れて、東洋本來の考へ方・觀方に接近しつゝある一面を見出し得るであらう。ソ聯人の血の中には多分に東洋の血が流れてゐることは事實であり、それがために東洋的なるものと相通するものももち、或は之を把握し理解し得るの素質があるといふべきか。或は彼等の眞摯なる戰爭研究が、より價値ある東洋的なるものへと必然的な接近をなさしめたものといふべきか。兎もあれ、東洋的因子を多分に含んでゐることとは否定出来ないことである。

以下、彼等の戦争論の中、特に顯著なる特質を、順次に東洋的なものから然らざるものへと観察の歩を進め、且之が批判を試みやう。

## 第二章 クラウゼウィッツ流より東洋流への發展

### 第一節 其の具體的戦争論

先づ第一に、マルクス主義に於ては戦争を一般的に是とも非とも断定しない。寧ろ、戦争の「一般」を對象として論議することは、愚かな事であるとして、専ら具體的な個々の戦争、或ひは個々を類別種別した夫々について観察し論議するのが至當であると主張する。

例へば、レーニンはその著「社會主義と戦争」に於て曰ふ。

「従來の社會主義者は國民間の戦争を凡べて野蠻的な默的なものと判斷して來た。しかし、戦争に對する吾人の態度は、かゝる平和主義者や無政府主義者とは原則的に別なものである。——中略——吾々はあらゆる戦争を、その特殊性に於て歴史的に評價する必要を理解してゐる點に於て彼等と根本的に異つてゐる。戦争には残忍や獸行や窮迫や苦惱が附きものであるにも拘らず、しかも進歩的だつた一類の戦争が、云ひかへれば、有害且反動的な制度の撤廢に力を藉す事に依つて人類の發達に貢獻した戦争が歴史上に存在してゐた。それ故に今日の戦争の特殊

性を歴史的に捉へる事が必要である」と。

凡そ、世人が一度歐米流の自由主義思想にとり憑かれると、不思議にもたゞ「平和」といふ美名にのみ捉へられて、その現實の正體を見損ねるに至る。人々は徒らにそれを讚美し、一途にその名に憧れてその實を見忘れる。その名の陰に匿れて、如何程殘虐なる平和裡の殺入行爲がその暴逆窮まる政治的・經濟的・思想的・宗教的凶刃を振つてその身近くに繰り返へされやうとも、人はたゞ「平和」といふ空名に酔ひしれ、「平和」といふ抽象理念の阿片に陶然として、一向に矍然としてそれが現實的・具體的なる實體を見定めやうとはしない。而かも斯くの如き不可思議なる現象が今の世界を蔽つてゐる。此の事態の醸成は、これを少しく尖鋭に觀察すれば、かの歐米既成勢力が、その利己的野望を永續せんがために、全世界殊に東洋の素朴善良なる民族たちに向つて教説するところの偽善的思想謀略の一表現とも觀られぬことはない。この謀略にかゝつた人々は、戦争なるものはたゞ平和に對立するに過ぎない事態と觀るものであつて、隨つて戦争を呪ひ、戦争を怖れ、それを現實の世界から抹殺し去るべく實に悲壯なる苦悶・苦闘を続けるのである。彼等には戦争の一切が罪惡であり、その凡べてが嫌惡せらるべきものであつて、如何なる實相をもつものにもせよ、たゞ平和のみが之に替はるべきものなのである。

然るにマルキシズムの戦争觀は之と異なる。彼等にあつては、戦争と呼べるものゝ中にも、是なるもあれば非なるもあり、人類の繁榮に貢獻するものもあれば然らざるものもあるといふのである。

それは、恰も、古來東洋に於て活人劍と殺人劍とを區別し、又戦争を正戰と邪戰とに類別して考へた如くに、——更に嚴密に謂へば——東洋本來の哲學的態度が、専ら具體的なる個々の事象を對象としてそれを直觀把握するのを特徴としたのにも似てゐるもので、彼等にあつてはすべての戦争を進歩的戦争と反動的戦争との二つに類別してその是非を論じ、——更に又嚴密には——戦争の各個を特殊的・具體的に理解して始めて正しい戦争觀、戦争論が成立し得るのだと主張する。

誤解なからんがために一言附記すれば、茲に東洋と彼等との類似を擧げたのは、單に考へ方の形式——思惟方法——を指して謂ふのであつて、考への内容——思想内容——を類似してゐると謂ふのではない。換言すれば我々の謂ふ活人劍とか聖戰等の意味内容と彼等の所謂進歩的

戦争等の意味内容との間には雲泥も管ならぬ相違が嚴存する。

而も特に茲に類似點を云々する所以は、彼等がその考へ方——方法論——を「辨證法的」と銘打つて、如何にも事新しく獨特なものでもあるかの如く誇張、——（而も我が國の學徒の一部には、この誇張に全く欺瞞せられて、彼等の思想内容まで無批判、天降りのに盲信したものがある）——してゐるが、豈計らんや東洋では數千年以來の、我々の特徴的な考へ方であり、彼等は今に到つて漸く數歩我々に近接して來たに過ぎぬことを示唆せんが爲に外ならぬ。

註 レーニン著佐野文夫譯「帝國主義戦争」四五九—四六〇頁。

次にマルクス主義者は自己の戦ふべき戦争の形態に就いて左の如き観方をなし、それを彼等獨特の見解であると確信してゐる。

## 第二節 敵の設想・選定

彼等の敵は相手國の國民ではなく、單に相手國の統治者乃至支配階級たる一部のみに過ぎぬと云ふ。

茲に、共產主義者が恰も金科玉條の如く屢々、舉示するマルクスの言——普佛戦争の勃發するや間もない時に宣言したもの——を採つて之を例證すれば次の如くである。

「若しルイ・ボナパルトに對するドイツの防衛戰防衛戰に就いての言葉は一般の意味に於いては、後述する處を参照せよ。がフランス國民を敵とする征服戰に墮落するならば、勝利であれ、敗北であれ、同様にドイツの爲には救ひ難き禍根となるであらう。即ちかの解放戦争ナポレオン一世に對する戦争を指す。後にドイツを襲つた一切の苦惱が二倍の激烈さを以て再來するであらう。<sup>(註一)</sup>

而もエンゲルスはマルクスのこの豫言が、事實として文字通りに立證されたと斷言して曰ふ。

ドイツはルイ・ボナパルトを敵とすべき戦争を、フランス全國民を敵とする戦争に墮落せしめて仕舞つた。その結果は、マルクスの豫言——「フランスをロシアの腕に追ひ込むであらう」

「其後『ドイツはロシアの公然の従僕となるか』さもなくば『スラブ人とラテン人との同盟した民族に對する民族戰』といふ新たな戦争の準備をしなければならぬであらう。』——といふことを共に文字通りに事實として立證して仕舞つた。<sup>(註二)</sup>

マルクス及びエンゲルスの言葉は、マルキシズムの古典的宣言に屬するものである。だがしかし我々は現實の彼等の諸動向を觀察する時、この二人の言葉が單に古典的なものに止まる事



なく、今尙彼等の中に生々として躍動する根本的鐵則であることを一目して認め得るであらう。

例へば赤軍の舊野外教令中の一節に「赤軍はその存在の事實に依つて、全世界の×××××民衆の自由解放に對する闘争を支援するものである」と明記したるが如き、或は又コミンテルンより指令する各種のテーゼ、スローガンを一瞥する時、何人も直ちにそれを理解し得るであらう。(尤も、舊野外教令のこの條項は、ソ聯がかの人民戦線戦略を採用して帝國主義國家の巨頭どもとの合従連衡を企圖するに當つて、この戰略の成立の可能性を齎らさんのために、急遽これをそのヴェールの内に隠匿して仕舞つたものではあるが。)

註一 マルクスの國際労働協會總務委員會宣言 マルクス・エンゲルス全集、邦譯改造社版七ノ三卷一六二頁。

註二 フランスに於ける内亂の緒言

同 書

二〇七—二〇八頁參照。

而してこの敵國民を敵として設想しないと云ふ事は、近世の歐米流の思想からは頗る理解し難いことであり、全くその意想外に出ずるものと謂ひ得るであらう。何となれば、悉くの國家

が過去の封建國家から近世の統一國家——換言すれば、所謂國民國家——の形態へと移行するに伴つて、戦争も亦過去の如き封建諸侯や封建君主の私兵の角逐から轉じて、國民を擧つて戦争に奮ひ立たしむる「國民戦争」の形態を採るに到つたのが近世に於ける嚴たる事實であつて、而もこの國民自らが一體となつて戦ふといふ戦争形態は時代の進むに従つて益々顯著なるその姿相を現はすものと觀られるからである。斯くの如く國民戦争がいよいよその國民戦争としての特質を發揮し、最近に於ては全體戦争・國家總力戦として顯はれると考へられるのであつて斯かる考へのみからすれば、敵國民を敵としない戦争などいふことは、全く天涯に於ける奇想とも見えるであらう。従つてマルクス戦争論に於けるこの觀方は、かのクラウゼウッツの戦争論に於ける觀方に比較すれば、その間に黑白程の差異があるのである。クラウゼウッツに依れば、戦争に於て打倒すべき目標は相手國の抵抗力であり、而してこの抵抗力は戦闘力、國土、及意志の三者よりなり、その中、戦闘力及意志の二者は何れも敵國民に發すると觀る。然らば敵國民を敵とすべからずといふマルクスの考へとは恰も雲泥も霄ならざる差異があるとも云ひ得るのではあるまいか。而もこのクラウゼウッツの觀方こそは彼の戦争論を一貫する根本的基調である。尙之に關しては更に説く處と併せ考察され度い。

### 第三節 味方の豫想・設定

マルクス陣營にあつては、武力戦争に於て自己の側の軍隊を單に自國の正規兵のみとは観ない。即ち特に著しいその一面を挙げれば、彼等は敵國民をも武装せしめて自己の側の軍に編成し得ると考へ、更に敵國の軍隊にも策動してそれを舉げて味方側に引き入れ、以て自己の有力なる一部に改編し得ると胸算してゐる。

その例證にはコミンテルンが戦争を内亂に轉化する如く指令し、而も他國共產黨員にさへ、「我等の祖國ソツ、ート・ロシヤを護れ」と叫ばしむる等の一面を以てするも瞭らかであらう。特に現在世界各國に共通する農民の徹底的なる困窮、中小商工業者の無産者への没落、更に無産者の失業苦、生活苦の倍加等々の現實を考へ、且之をソ聯の掲言する前掲の「赤軍の根本的任務」に照應してその政治工作の結果を考察すれば、相手國民竝に國軍の素質如何によつては、彼等が敵國の軍隊をも自己の側に立たしめ得ると胸算するのも、強ち夢想とのみ斷定出來ないであらう。

之に就いてエンゲルスは謂ふ。「軍國主義はヨーロッパを支配し吞噬しつゝある。けれども此の軍國主義はまた自分みづからの没落の萌芽をも宿してゐる。各國相互間の競争は彼等を驅つて、一方においては年々ますます多くの貨幣を軍隊・艦隊・銃砲その他に消費せしめ、従つて財政的破綻を一層速めると共に、他方に於ては一般的兵役義務を一層重からしめ、かくて遂には全國民をして武器の使用に習熟せしめ、従つてある一定の瞬間には全國民をしてその意志を指揮者の軍事的榮光に逆つて遂行することを可能ならしめるのである。しかもかかる瞬間は、國民の大衆が——田園ならびに都市の労働者および農民が——一個の意志を持つや否や到來する。この瞬間に到るや、機械はその作業を拒み、軍國主義は自分自らの發展の辨證法によつて没落する。労働大衆にその階級状態に應ずるの内容ある一の意志を興へること——、これ社會主義の間違ひなく成就するところであらう。そしてこれこそ、軍國主義と並にあらゆる現存軍隊との内部よりの爆破を意味する。」<sup>(註)</sup>エンゲルスは斯くの如く、近世の歐羅巴的軍隊はその生育發展に伴つて、必然的にその内部より崩壊すべき運命にあると豫想し、従つて、ゾルゲ宛の手紙に次の觀察を述べるのである。「一切は愛國排外主義の滔々たる流れに没されるであらう。何となればそれは生存のための戦争であらうから。ドイツは五百萬人、即ち人口の一〇%を武

装せしめるであらう。これに對して他國は約四%か五%で、ロシアは比較的にもつと少いであらう。だが、戦闘員の數は一千萬乃至一千五百萬に上らう。如何に彼等を養つてゆくか見たいものである。三十年戦争の時のやうな甚しい荒廢が生ずるであらう。そして、兵力の尨大なるにも拘らず、時局は容易に速くは終結しないであらう。「従つて戦争は長引くであらう。正にそれと同じくロシアを一撃の下に仆すことは不可能である。人民の上には、彼等がかつて出會つたことのないほどの重荷が課せられるであらう。そして決戦の遷延と部分的な敗北のために、國內に急變が惹き起される可能性が充分にある。」「よし戦争が内部の運動なしに最後まで戦ひ抜かれても、ヨーロッパが二百年この方経験しない様な、疲弊が起るであらう。」と。而して、ソヴェート・ロシア現代の戦争理論家エス・エヌ・モウチンは「現實に於て、戦争の擴大は各國參謀本部の意表に出で、戦局の進展中、經濟に於て、かなりの準備替へを必要とするに至る。實在的現實は、ブルジョア兵學の主張する速戦速決の理論を辛辣に笑殺し去る。」と前提して、前述のエンゲルスのゾルゲ宛の書簡を引用して彼の豫言が歐洲大戰に於て美事に適中したことを述べ、且「戦局の進展につれて次第に經濟的要因と軍事的要因との相互關係——その性質と規模とはブルジョアの軍事思想を以ては到底思ひ及ばぬところである——が顯はれた」と結論してゐる。

以上によれば、マルクス陣營に於ては、近代の戦争は必然的に既往の經濟生活に根本的な重壓を賦課し、これに伴つて起る大衆の不滿の爆發はまた制御し得るものではないと觀るのであつて、この觀察に基きそこに敵國內部に自己の友軍を編成し、自己に有利に協力する戦闘行為を展開せしめ得るものとの確信をもつのである。

従つて、スミルノフが著述した、赤軍士官學校の教程には「敵軍の撃滅は單にその肉體を亡ぼし、或は俘虜とする以外に、敵軍内の勞農大衆及び戦場に於ける勤勞民をしてプロレタリア革命を起させることによつて達成し得る」ことを示し、またデー・ザクトヌイはこの原則の妥當性を高調し、且「赤軍のみがブルジョア國內のプロレタリア及農民の同情と援助とにより、敵の正面と背後とに對し同時に攻撃を加ふる絶好の條件を具備してゐる」と高言する。これこそ正にこの間の思想を最も明確に表現したものと謂ふべきであらう。この考へは、全ソ聯・戦争學者の一貫せる主張であり思想であつて、更にエル・エス・アマラゴフに依れば、「將來に於ける我が國兵力の第二の源泉は外國のプロレタリアートであつて、資本主義國が、ソ聯邦と戦争をなす場合、其の國の勤勞者特に階級意識を有するものは、必ず起つて内部から敵國を崩壊させるであらう」と謂ひ、且、「レーニンが『一九二〇年戦争に吾人が勝利を占めたのは、吾人が

一致團結し敵國の兵卒を味方としたからであり、敵國が敗れたのは彼等の間に團結がなかつたからである。將來とても彼等の團結は有り得ない」と述べた」ことを指摘しつゝ、この論法を以てソ聯の戦争理念とその準備實施の方策を説く。<sup>(註四)</sup>

斯くの如く、敵國の國軍の内部に味方の軍隊を編成し、更にまた、敵國の國民中にも武装せる自己陣營の軍隊を組織し擴大して、これ等を打つて一丸とせるものを以て、自國內部の正規軍と共に協力提携せしめ、一旦有事の日に敵國をその前方と背後との兩方面から攻撃しやうとする。これが、マルクス主義乃至レーニン主義の軍制思想・戰略理念の重大なる一特質である。

註一 エンゲルス「反デューリング論」邦譯、マルクス・エンゲルス全集十二卷、三四三—三四四頁。

註二 (1) 一八八八年一月七日エンゲルスよりゾルゲ宛の書簡、邦譯全集二十四卷二五八—二五九頁。

(2) ボチヤロフ監修・橋本弘毅譯「最新科學的軍備・作戰・戦争」所載、エヌ・エヌ・モウチン著「戦争と經濟」四—五頁。

註三 「戦争と革命」誌一九三四年九月十月號所載デー・ザクトトマイ執筆「『スミルノフ』著『藝術』に就いて」。

註四 同誌 エル・エヌ・アマラゴフ執筆「將來戦の性質に就いて」。

之を要するに、第二、第三節共に純西歐的考へ方からすれば如何にも突飛なるかの如く見える。併し乍ら、我々が一度東洋的考へ方特に日本精神に立ち還つて之を觀察すれば、その考への形式は何等突飛でもなく、また新しい彼等獨特のものでもない事を識るであらう。些か之に就いて觸れやう。

孫子は曰ふ。

「夫用兵之法、全國爲上、破國次之、全軍爲上、破軍次之、全旅爲上、破旅次之……云々」<sup>(註一)</sup>  
と。即ち、敵國を破り敵軍を撃破することも時としては用兵の一法であるが、常に至上の原則ではない。敵の國を全うして己れに歸せしめ、敵の軍……或は師團、旅團、等々……を擧げて自己の側に味方たらしむる如く謀るのが更に上なる原則である。敵の國を全うして而も戦争に勝つことを上々の戰略とする以上は、かのクラウゼウィツに於けるが如く、敵國を打倒し屈服せしめ、敵國民の凡てを敵としてその抵抗力を潰滅せしめ、敵の軍旅を撃破殲滅することのみを至上の目標たらしむべからざるは、自ら瞭らかであらう。即ち、クラウゼウィツの思想

——近世歐米兵學思想——からは、この孫子も亦全く超脱して居るもので、その内容は兎も角

として、それが目指す形式に於ては、マルキシズム戦争のそれに頗る近似せるものであると謂はねばならぬ。

加之、孫子は更に曰ふ。

「車戦得車十乗以上、賞其先得者、而更其旌旗、車雜而乘之、卒善而養之、是謂勝敵而益（註一）強」

即ち、車戦に於ては、敵の戦車を破壊殲滅するのが、最上の戦略・戦術目標ではなく、之を捕獲し、之を生擒とすることが更に奨励せらるべきであり、之が爲には、敵の戦車十乗（一乗は十五人を附す）以上を全うして捕獲せる場合には、その戦闘に於ける先陣の殊勳者は、之を用て厚く賞する。然る後該戦車は味方のものとして我が戦車の中に雜へてこれに乗り、その兵卒は之を善しめ、これを懐柔して、味方と化し、以て我が用に充つる。斯くして、戦に勝つことに益、我が戦闘力を増すべきであると教へる。而かも、この思想は他の交戦分野にも一貫して現はれて、或は「取用於國、因糧於敵、故軍食可足也」（註三）となり、或は「智將務食於敵、食敵一鐘、當吾二十鐘、慧釋一石當吾二十石」（註四）といふ原則ともなるのである。

斯くの如く、東洋古兵學の主流として孫子の中には、今マルキシズムが凡ゆる既往の歐米兵

學を乗り越えて、恰も嶄新にして卓越、而かも彼等独自の獨創的なる戰略理念なるかの如く自負高言するものを、既に數千年以前から明確なる原則として、より完全に、掲げてゐるのである。

註一 「孫子」謀攻篇 岩波文庫版 四二頁。

註二 「孫子」作戰篇 同 右 三九頁。

註三 「孫子」作戰篇 同 右 三二頁。

註四 「孫子」作戰篇 同 右 三七頁。

特に、右の事は、日本精神に立ち上つて之を考察すれば更に明瞭である。抑、我が日本民族は神武の軍、破邪顯正の戦を以て我々の戦争の本質としてゐる。果して然らば、我等の膺懲すべきは敵國の邪であつて、敵國民の全部ではない。寧ろ我々の軍は敵國民の味方として彼等を塗炭の苦に陥れる一部の黨派乃至一支配者を絶ち、以て敵國に樂土を建設するのを本來の使命とするものである。蓋しこれこそ「アキツミカミ」の軍——皇軍——神武の軍——と呼べるに適はしい我が軍、我が戦争の特質であるべきだからである。かゝる日本精神が一面具體的事實

として眼前に立證せられ、他面その思想が能く他民族にも理解せられ得るやうに理論体系的に闡明せられ、以て正しく普及宣傳せられた際には、何んぞ、敵國を破り、敵の軍、師、旅團を殲滅することのみを第一義的なる原則とするを要せんや。

即ち、日本精神に徹する限り敵の軍、師を擧げて、味方側に改編する事は斷じて夢想ではな

い。

日本古兵學の巨星山鹿素行先生曰く、

「人ヲソコナワズ、土地ヲアラサズバ、彼自ラ屈服シテ、干戈自止、其民莫不簞食壺漿以迎、吾師也」

之が日本古兵學の第一原則であつた。

更にまた素行先生は、その「兵法神武雄備集」の中に於て、「敵國の地下を味方に通用するが如く内談あるべきこと」とて次の如く教へてゐる。「味方は未だ敵方へ出馬致さずとも、地下の百姓町人豫て此方へ内通をいたし、味方の御大將出馬ある如くにと、諸百姓悉く、したしむ時は、はたらき入て弓矢を取り易し。たとひ、剛敵たりとも其の地下此の如く背くときは、其弓矢長久ならざると古人も是を論ぜり」と。

「勝兵は先づ勝つて後に戦を求める。之に反して、敗兵は先づ戦つて然る後に勝を求める。即ち、戦勝を獲んとするものは、いよく最後の武力に訴ふる決戦々争に入る前に、豫め先づ、敵國々民をして、簞食壺漿——歡び進んで——吾が軍を迎ふるの素地を蘊醸せしめ、敵國の言論・教育・實業界、官界、政界、學界、中小商工業・漁農村民、労働者等々、所謂諸百姓の悉くをして、その國の爲政者から離反し、遂には當方の軍隊のその國への出師をさへ、心私に翼求するといふが如き情勢を副致する。乃ち、彼の已に敗るゝに勝つもので、所謂「落葉は微風を俟つて以て隕つ。而して、風の力蓋し寡し。木は必ず蠶して後虫生じ、醴は必ず酸して後蟄聚まる。物自ら壞れざれば則亦之を壞る莫し」と謂ふに等しい。これこそ東洋兵學・日本兵法に於て古來教へられて來た明らけき法則である。而も日本古兵法は、之を可能ならしむる唯一の要因として「道を以て無道を誅し、正を以て邪を絶つ」ことの必要を教へ、「奇道を以て他を難に陥れ、詐謀を以て事を成せば、其の功たとへ成ると雖子孫には及び難し」と嚴訓するのである。是れに依つて察するにマルキシズムの戦争理念と東洋・日本の戦理とはその形式に於て同じかの如き觀を呈するとはいへ、實はその意義内容に於ては黑白の差異があるのである。尙之に關しては更に詳しく後に述べやう。

註一 山鹿素行「兵法神武雄備集、武備の巻、内習、弓箭内習拾三ヶ條之事、山鹿兵學全集、第三輯……九七—九八頁

註二 「孫子」軍形篇岩波文庫版六四頁参照。

註三 山鹿素行「兵法典義、創築篇」山鹿兵學全集第一輯 一三四頁。

註四 同 書

一三五頁。

#### 第四節 交戦手段と交戦対象

##### 一 マルクス主義に於ける交戦手段と交戦対象

マルクス主義戦争論にあつては武力のみを戦争の手段乃至対象とは考へない。思想、政治、経済、武力等を戦争と云ふ一つの鎖の異なる環として観察する。

仰、クラウゼヴィッツの戦争論を通して看取し得ることは、武力——彼の言葉を以てすれば「相手の屈服を強制する爲の暴力」——のみを戦争の唯一の手段であり、対象と観てゐることである。

このことは、例へば嚮にも既に掲げたところの戦争に就いての彼の定義——(Der Krieg hat

ein Akt der Gewalt, um den Gegner zur Erfüllung unseres Willens zu zwingen.)——のみを以てするも能く諾けるであらう。又かの歐洲大戦後の國家總動員の思想と雖、それは如何にして膨大なる武力戦の要求に應じ得る如くに國家の全態勢を整へるかゞ主であり、之がために思想、経済、政治等の各部分を總動員せんとするのに止まる。換言すれば思想、政治、経済、社會等の各面の活力を、窮極目的としての武力戦の下に統合しやうとするのが、この思想の特徴であり、随つて、こゝに於ては武力戦線と併行して行ふ、各面それぞれ自身の獨立なる交戦と云ふまでの意義は含まれて居らなかつたと観るのが至當であらう。

然るにマルクス主義にあつては之等と大に所見を異にし、現に我々の眼前に觀察し得るが如く、之等の各種の分野に於て攻勢を採つてゐる。而して之等の分野中彼等が根幹的、基底的なるものと観てゐるのは経済——生産、分配、金融、貨幣、貿易等の各分野に亘る——である。これは彼等の唯物史観からもその然る所以を瞭らかに立證し得る。又更に之等の各分野に於ける闘争の中、終極的、最後のものとして武力を重大視することも、彼等が暴力革命を社會變革の最後の唯一の手段と観てゐる事からも推定し得る事であらう。而して、経済戦・武力戦等を集中的に表現するものを政治闘争と観、更にこれが表現を社會戦争・精神戦・思想戦と見做





攻防戦を指向しつゝあるのである。思想戦線の攻防に於て、如何に彼等が策動し續けてゐるかは、茲に多言するまでもなく、我が國識者の既に充分熟知せられあるところであらう。従つて茲には主として軍事の分野に於けるその稍、具體的な一二の例を掲げやう。

ヴェ・ヴェ・フリピンは、その著「空軍の戦闘行動」に於て、飛行機の特別任務として第一に「煽動的」政治的勤務」を掲げて、次の如く曰ふ。

「友軍、敵軍、戰場住民及敵國內の上空に於ける煽動ビラの撒布は、戦闘機及び偵察機の基本動作の最も重要な一任務である。

煽動任務とその他の戦闘任務とを同時に遂行し得る場合には、各種の飛行機（他の諸任務と同時に煽動ビラをも搭載すべき重飛行機以外に）を混成編合し、煽動ビラ撒布のために特別の飛行機を任命せねばならない。

煽動任務兼用の軽飛行機の文書搭載量は一六乃至一八キログラム、特別飛行においては八〇乃至一二〇キログラムを超えてはならない。

ビラの撒布は手により、又は特別装置によつて行はれる。

特別装置によるビラ爆弾は地上で爆發するものであるが、それは高空から精確に、目指す地

區に向つて、必要な密度を以て撒布することを可能ならしむる。<sup>(註四)</sup>

右の事情に鑑みれば、一國が戦時のための準備として熱誠なる防空演習を実施するのは、誠に結構であるが、國民一般が戦争の舊き本質形態の夢の中にのみ住んで、只「空襲」の叫びに爆弾や焼夷弾の對策のみに氣を奪はれてゐるならば、現實に新しき戦争が捲き起つた場合、その第一日から既に全くその虚を衝かれ、そのことだけでも士氣大いに沮喪するに至るに違ひない。之に反して、豫めかゝる思想攻撃を豫期するならば、防空演習の對策には學者・教育家・社會運動家・言論文筆家・詩人・漫畫家・音楽家・實業家等々が相會して、敵國の思想攻撃の内容判斷、之に對する防禦手段の研究、防禦計畫の立案並に之が豫習など、なすべき多くの重要なことがあるのである。而も敵機は更に斯くの如き思想や武力の手段による攻撃のみを限つて實施するものではない。この點は、特に重要なものであるが、各種の事情からこの一言の示唆に止めて只識者各位の研究を念願して止まぬ。（尙これに就ては第四編所説、戦争形態、戦争指導の章節を併せ参照せられたい。）

更に俘虜の取扱ひに就いての自由主義的思想と異なる點を簡單に述べる。マルクス主義戦争論に於ては、俘虜は自己の思想戦手段の重要な一要素として甚だ重視せらるゝ。これに就いて戦

史的事實に省み、且最も確實なるが如くマルクス陣營内のものゝ言ふことに聞かう。

イー・ペー・パシニカーニスは、その著「國際法概論」に曰ふ。

「一九二九年東支鐵道に端を發した蘇支紛争の際に捕へられた支那兵に對する取扱の實際は完全<sup>にこの原則</sup>——即ち、將來マルクス陣營に於ける政治的・意識的闘士たらしめんとする原則——に適合し、且支那の兵士及び勤勞者の同情をソヴェート聯邦及び赤軍の側に惹きつけるといふ任務に従つたのである。捕虜は到着すると直ちに頭髮を角刈に刈り込まれ、然る後湯に入られた。俘虜のための特別醫療救助が組織された。彼等は一日二回は温い食物が與へられ、赤軍の食需定量の七五％だけが與へられた。俘虜の取扱は物質的關係に於ても他の戦争に於ても他の何如なる國に於て爲されたよりも、無條件に好遇せられた。

俘虜に對する政治的教育はソ聯及赤軍に關する既往の偽腐的觀念の打破(註、然らずして、反對に俘虜に對する偽腐的教育——孫子の所謂「死國」の要訣に於ていふべし)紛争の眞因(註?)、支那軍閥の帝國主義的役割の説明、捕虜大衆中への階級的區分の實施に向けられた。政治的教育のためには、會合、自由行動の夕、壁新聞等の手段が利用せられた。その結果、滿洲の暴君張學良は共產主義的宣傳の防遏に關する特別命令を發せねばならなくなつた。この共產主義の宣傳はソヴェートの俘虜から歸還せしめられた支那兵士がも

ち來つたものであつた(註五)と。

西歐流殲滅戰略思想を基調とする戦争、自由主義思想を實踐する軍隊に於ける敵國俘虜の取扱ひとこれとは雲泥の差がある。併し乍ら、之を東洋就中日本戦争論の立場から觀れば、その意義目的にこそ黑白程の差はあれ、その型に於いては、前者が後者のものを學び採らんとする顯著なるものがある。それに就いては後に續いて述べる。

更に、パシニカーニスは軍占領地に於ける住民の取扱ひに就いて、次の如く述べる。

「赤軍の野外勤務令は、赤軍によつて占領せられたる土地の住民と赤軍との相互關係に就いて多くの規定を有つてゐる。その中の最も重要なものを挙げれば、「赤軍は地方的風俗及び慣習に對して、鋭敏なる態度を持たなければならない。赤軍は住民に對して、その民族生活の特性、風俗、慣習、宗教の理解、及びそれに就いての鋭敏にして慎重なる態度の下に、相互關係の一切が組織せられなければならない。」(勞農赤軍野外勤務令八十四條)

その地に設くべき政治機關に對しては、その住民の身體及び財産の不可侵性の擁護に關する特別なる配慮が拂はれるやう義務づけられる。即ち「政治機關及び政治職員は住民の身體及び財産上の權利を侵害せる者及び機關に對する懲罰制度を組織化すべく凡ゆる努力を拂ふと共に

箇々の事實の最も急速なる審理に努め、且つ違犯者に課せられる刑罰に關しては先づ住民に正しき報道を傳達しなければならぬ』(八十四條)。これと同時に、『住民中の階級の敵、反革命及び間諜に對しては最も精密熱心なる克服のための力が傾倒せられねばならぬ』(九十二條)。「各層の住民に負擔せしむべき割當率の決定に際しては、その基本的・指導的の原則として階級的差別の原則が適用せられねばならぬ。即ち、負擔の最も重いものは非労働分子、最も軽いものは農村及び都市の無産者でなければならぬ』(第八十五條)。赤軍野外勤務令は、『政治機關に對して軍の前進するに伴つて迅速に上級行政單位、地區單位より下級單位に至るまでの軍事革命委員會網の擴充方策を講ずべきこと』を規定する。(第八十八條)「敵軍の掃蕩せられたる地方に於ける政權の組織は、其の建設事業に労働者、小作人及び貧農等に参加せしむるといふ條件の下に行はれなければならない』(二百五十三條)」と。

註一 ア・スウェーデン著「戰略」一九二七年版第二編第二章第一節より。

註二 スウェーデンは従来の戰略・政略なる術語の外に新たに軍略なる語を創設しあり、その意義概ね左の如し。

(イ) 戰略 *Военная стратегия* 戰略と軍略とを含みて更に高次なるもの 英人の最近謂ふ "Great strategy"。

註三 大戰略にも類似するもの。

(ロ) 戰略 *Стратегия* 政治・經濟等の分野に於ける方略にして、従来の政略に類似のもの

(ハ) 軍略 *Военная тактика* 戰略 *Операция* 武力戰の分野に於ける方略にして、概ね従来の戰略に類似のもの

註三 ア・スウェーデン著「戰略」一九二七年第二編第二章第二、四、五節より採萃。

註四 ボチャロフ監修「軍備・作戰・戰爭」中の第五篇、ヴェ・ヴェ・フリピン著「空軍の戰闘行動」第七章採萃、邦譯あり、橋本弘毅譯(白揚社發行)二二二頁。

註五 Панкратис, Е. Очерки по международному праву, Коммунистическая Академия, Институт советского строительства и права, Государственное издательство, Советское законодательство, 1935. (邦譯、山之内一郎譯「ソヴェート國際法概論」あり、その四六一—四六二頁に相當するも、欠字のため意味不明)。

兎も角彼等の戰爭は、武力以外に思想、政治、經濟等の各種分野に於て戰はれる。従つて、世に所謂平和の時と所謂戰爭の時とはその間に何等本質的な相異がないと斷定する。(この斷定に就いては更に述べる。)

## 二 東洋的見地(孫子)に於ける交戰手段と交戰對象

右の戦争形態は如何にも彼等が発見した崭新なるものゝ様にも見える。だが、それは東洋的見地から観れば決して崭新なものとは云ひ得ないであらう。孫子は曰ふ。

「百戰百勝、非善之善者也、不戰而屈人之兵、善之善者也。」と。

即ち、敵の未だ發せざる企圖、現れざる意思に對して、機先を制して未然に之を壓する。之を「謀を伐つ」と稱し、「上兵」、即ち上々なる戦争指導と教へる。その方法手段は時に應じて變化すべく、孫子は敢てそれを明示することはないが、今この目的から見れば、それが直接の武力行使に非ざることには明らかである。或は軍備の充實そのもの——所謂「未發の武威」——を以てする場合もあらうし、或は我が經濟實力の暗黙なる威嚇により、またはその直接の發動によつて敵國を威服せしむることもあらう。更にまた、如上の威力と更に我が正しき思想・信念を以てする積極的なる施策——即ち、正しき思想攻勢——とを統合する國家總力を以てする攻撃によつて、遂に彼を屈服（屈服に非ず）せしめ、「戰はずして勝つ」の方途に出するを得るならば更に上々であらう。兎もあれ、斯かる手段方法は、時に隨ひ、國に應じて千變萬化すべく、それを妥當に發見するは、兵學者といはんより、寧ろその時々實際家の責務である。従つて孫子はそれまでは觸れなかつたとも見られるであらう。

然るに斯くの如く「謀を伐つ」の上兵に出づるを得なかつた場合、その次等の戦争指導方策は「交を伐つ」にあると教へる。交とは親交國の意である。相手國の與國を伐つか、或は兩者の離間の策を講ずる。或は利によつて相手國とその與國との相剋を醸成し、所謂漁夫の利を收めんとするの戦略もあり得る。要するに「謀を伐ち」「交を伐つ」爲には、その手段・方法も亦多かるべく、そこには經濟戰——貿易戰・爲替戰・生産戰・ダンピング戰略・不買戰略等々——も重視せられれば、また思想・宣傳・宣撫戰・外交・政略・政治戰なども活潑なる活動が要請せらるゝであらう。

斯くの如く、「上兵は謀を伐つ」「其の次は交を伐つ」もので、是等兩者の成功せぬ場合に「其の次は兵を伐ち」「其の下は城を攻むる」こととなる。而も兵を伐つときも、城を攻むるときも、單なる武力のみに依るものでない。蓋し、所謂平時の施策が戦時に到つたからとて、一時に廢止棄却せらるゝことのないのは、現實の勢、現實の事態に眼を注げば、餘りにも當然過ぎる程のことであつて、このことから考へれば何人も直ちに背けるであらう。

要するに、戦争を以て單に武力と武力との角逐のみと觀たのは、近世に於ける歐米の戦争思想就中その最も優れた代表者たるクラウゼウッツである。けれども、近世人の戦争に就いての

斯かる理念思想に拘泥なく、戦争の事實は——程度こそ異れ、近世のものに於てさへも、何程かは——然らざるを教へるのである。殊に、辭少なではあるが、その教義は最も明確に、亦最も適切に、東洋の戦争論に表現せられてゐると謂はねばならない。

### 三 日本的見地(山鹿)に於ける交戦手段と交戦対象

以上述べた戦争形態は、日本古兵法に於て、更にまた古の我が日本の戦争事實に於て、その最も正しい姿を顯現してゐる。即ち、山鹿素行先生は明確簡明に思想戰、政治戰を喝破強調して曰ふ。

「我ニ道義ヲ立テ、義旗ヲフルイ、天應ジ人順、上下能ク一志ニシテ、其道義ヲ以テカレガ心ヲ感ゼシムル時ハ、彼自ラ屈ス、タトヘ彼ガ主將ヲツクト云ドモ、其國ノ人民、皆ホコヲ倒ニシテ、自ラノ主ニ敵シテ味方ニ降参スベシ、古來聖賢兵ヲ用フルノ實理、マコトニ神武ニシテ不殺人人ノ道也」と。

凡そ、政略戰に於ても、思想戰に於ても、言ふことよりも行ふこと、言語・文章・繪畫・音楽・樽俎折衝の何れよりも、亦それらの包括的・一體的なる活動よりも、更に一つの事實の方がよ

り精銳なる攻撃手段である。ソ聯がその相手に如何に巧妙なる煽動戰術を指向しやうとも、またその自國民に對して如何程僞瞞と強壓とによつてその目的を達成しやうと焦つても、若し彼の國の事實がその言辭行動の表現と一致しなければ極めて弱力でしかあり得ない。その効果の永續性なきは勿論、却つて更にそれが何時かは反動を呼び、復讐ふべからざる逆効果をさへ齎らすものである。例へば、滿洲國統治の實績が瞭らかに滔々として進展するのに反して、ソ領が事實に於て暗黒陰慘なる凄愴の氣に充されてゐる。この兩者の落差が——此方に政治戰・思想戰施策の見るべきものなく、而も相手方は死物狂ひのこれらの策謀があるにも拘らず——大將ル・シコフをして温き日滿の懷に跳び込ませしめその領内に走らしめ、更にまた續々として……のである。山鹿素行先生は、それを最も簡潔明確に「我に道義を立て」と表現する。「立つる」ことは「振ふ」ことでもなければ、「借る」ことでもない。之に就いて詳しくは後に掲げるであらうが、先生の「立つる」といふ語は、其の事の成就し終りてまでも變ぜざるの意を表現する。即ち「我ニ道義ヲ立テ」とは、私の事實そのものが道義に立脚する——道義そのものを根柢に含むことを表現し意味する。事實は無言無爲にしても尙相手を教化する。これが故に第一は「立つる」ことである。だが、さらばとて、不言實行のみを教説するのではない。道義に立ちたる

後は、「義旗ヲ振フ」べきことが説かれる。これこそ、第二義に於ける思想戦・經濟戦・政略戦である。換言すれば、スポーツスマンの聲明もあらうし、議會に於ける各種各般に亘るゼスチャーもあらう。また、言論機關、演藝・映畫・文學・ラヂオ等から、更に外交使節、國民外交、其他官民文武各種機關とその成員等の活動に俟つ各般の思想戦・經濟戦・政略戦の正奇妙用、多種多彩、千變萬化する略と策とがそれである。第一義たる事實を以てする無言無爲の政・經・思・武の戰爭實施に對する第二義のものがそれである。即ち、それこそ、俚言を借りて謂へば、「話せば解る」と「問答無用」を止揚せる更に高次の方策・略術と謂ふことが出來やう。斯かる高次の戰爭指導にして始めて人順ひ（屈服・強制に非ず）悦服するのみか、天亦之に應じて所謂天祐が許される。天とは素行先生の世界觀によれば——同時にまた、我が日本に一貫する世界觀によれば——易姓革命や禪讓放伐を然らしむる如き天命觀に於ける天ではなく、現人神、アマツミカミに於て具顯せさせ給ふ我が「カミ」と「カミガミ」——多にして一、一にして多なる神——そのものである。それは別天つ神であり、天つ神であるところの「天」である。即ち「心だに誠の道にかなひなば、いのらすとても神や守らむ」の歌によつて表現せらるゝが如く、「我ニ道義ヲ立テ、義旗ヲ振フ」皇御戰には、「天應ジ」てそこに天祐神助が下り、「人順ジ」て敵

國人も心から悦び勇んで味方に悦服する。上下能くこの「かんながら」なる皇御戰に志を集め、之に歸一隨順しまつれば、向ふところ自ら敵なく、顧らすして言趣け和すことが出來ること火を踏るよりも明らかであらう。縱へ若し頑迷なる君主・主領・將軍ありて、然らざる場合ありと假定するも、「其ノ國ノ人民、皆ホコヲ倒ニシテ自ラノ主ニ敵シテ降參スベシ。」これこそ正に「用兵ノ實理」であり「神武ニシテ人ヲ殺サマル道」であり、神武天皇御東征の事蹟として、日本紀・古事記に明らかに表現せられてゐる所でもある。

道義と云ひ、道といふも、斯く呼ぶものゝ世界觀によつては種々様々に内容づけられる。人々の言葉や名辭・概念が、その人々の史觀・世界觀によつて千差萬別なるものあることは既に前にも述べた通りで、従つて縱へ同じく道といひ道義といふも、人により、民族により多種多様である。然らば我等の道義——我が日本精神の指し示す道とは何ぞ。それは我が國體の示す道である。

抑、我が國體に淵源する道——我が國體の精神たる日本精神は之を古今に通じて、謬らす之を中外に施して悖らざる普遍原理である。普遍原理といふも、抽象的普遍性に於ける普遍原理ではない。それが具象的普遍・具體的普遍の意味に於ける普遍原理であることは、前に説いた所

からも推し測られるであらう。それこそ、「天下億兆ヲシテ一人モ其ノ處ヲ得サルナカラムル皇道」であり萬の人、諸々の民族・國家、更に廣くは天地萬有をして、各、その處を得せしめ不斷にして無窮なる生成化育を實現せしむる道である。素行先生の「所謂道者、人之所本、天理自然之道也」<sup>(註三)</sup>で、天地の公道・人倫の常徑とも表現せらるゝものである。以上に鑑みれば、それがこの具體的普遍原理であり、體は一なるも、その現はるゝや時により所に従つて千變萬化し、各の個性に於て各異各様に變化する道である。決して、形式的一律の死せる道ではない。さればこそ天壤と共に窮りなかるべしといふ大確信も生れ、而もそれが過去を一貫した事實を以て立證せられて來たものである。此普遍原理たる國體の精神、日本精神が現代の他民族にも理解せられ得るが如くに理論體系的に闡明せられ、皇國の實踐する事實と相俟つて宣布せらるゝならば、「タトへ彼ガ主將クテフツクトモ皆ホコヲ倒ニシテ」皇軍の向ふ處敵なく、舉つて皇國の恢弘に馳せ參すると云ふも亦徒らなる誇張でもなく、單なる空想でもない。之こそ、我が國體を眞實に體認し信奉しあるものにとつては、當然過ぎる程、當然なる大確信である筈である。

註一 「孫子」第三謀攻篇、岩波文庫版 四三頁。

註二 同 右

四四頁。

註三 山鹿素行「兵法真義」卷第三創編篇、山鹿兵學全集版 二七頁。

然るにマルクス主義レーニン主義は、後にも説くが如く、歪められたる認識に發するものであり、それは普遍原理でもなく正しき道義でもない。随つて不戦而屈人之兵といふ東洋戦略の形式を眞似るも畢竟するに「自己の素質内容を顧みずして單に鷄の形のみを眞似る鳥」の失敗に歸するであらう。(尙之に關しては彼等の戰爭の内  
容を觀察する時に詳しく述べる)だが、只彼等が純クラウゼウツ流の思想から離れた戦略形式を採用せんとしつゝあること又は否み得ないことである。

## 第五節 勝利の意義

マルキシズム戰爭論に於ける「勝利の意義」は西歐流一般の意義を超越してゐる。彼等は僅かに十年や二十年といふ短小期間の敵の屈服——我が意志の貫徹——を以て彼等の戰勝とは観ない。況んや單に敵の一郡縣の領有や、若干の賠償金の強制的獲得に於ておや。

抑、クラウゼウツ流の思想からすれば、ナポレオン一世の戰果は勿論のこと、普佛戰爭に於けるプロシヤの戰果も、歐洲戰爭に於けるフランス側の戰果も、共に堂々たる戰勝であると

認められ、何れも戦争目的を達成し得たものと観られる。だが併し、マルクス主義に於ける勝利の概念は、之に比較すると時間と空間、質と量に於て餘りにも雄大であるのを認めざるを得ない。

マルクス主義にあつては、一郡縣や些細な利権・賠償金を要求しないが、その代りに敵國を擧げて己れの掌中に歸せしめやうとする。又、敵に十年や二十年間の屈服を強制する代りに、永久的に自發的に彼等の軍門に降らしめなければ、眞に戦争の目的を達成し得たとは認めない。換言すれば對手國の全部を共產主義化し、以てそれを彼等の所謂ソヴエト・インターナショナルの一部に包含し、所謂ソ聯邦中の一邦として自己掌中に歸せしめ得て始めて、マルキシズムの意味に於ける勝利なのである。

乃ち、我々は識る。彼等のかゝる戦勝の意義とクラウゼウヰツ流の戦争の勝利の意義とは、その考へに於て天地の距り・雲泥の差が存するもので、兩者は決して同一基準に立つて戦勝の意義如何を論争する種類のものではないことを。

然らば、日本精神は本來何を以て戦勝と認めて來たか？ 西洋思想、クラウゼウヰツ流の考へ方が支配する以前の日本民族の本來的なる、純乎たる戦勝の意義如何？ これは頗る興味あ

り、又意義多き論題である。だが、之に關しては詳しく後篇に於て述べるであらう。只茲では簡略に次のこと文を附記するに止めやう。「まつろはぬものどもを、まつろはしむる」のが我が御軍の本來の目的であつた。「まつろはしむる」とは、政り合はしむであり、又祭り合はしむでもある。蓋し「まつり」とは政でもあり祭でもあつて、「まつろはしむ」とは「まつりあはしむ」の意味に他ならぬからである。

而も我が古代の政が經濟と政治との分科したものであるに鑑みれば、畢竟「まつろはしむる」とは之を現代語を以て表現すれば、凡ゆる分野に於て對立し抗争する立場にあるものを、經濟的に一體不可分の状態に導き、政治的にも同様なる不可分關係を成立せしめ、更に窮極に於ては思想、血液までもが一體的に統合せられ、以て天照大神を共同祖先として齋き「祭り合ふ」状態にまで進展することを意味する。この意味に於て「まつろはしめ」得た場合が御軍に於ける眞の勝利である。而もこの戦勝の意義は單に右の如き言語や或は單なる思想的・哲學的なる存在文に止まつたものでもなく、實に嚴乎たる事實的存在でもあつた。而して、この事實的立證、茲に、この「まつろはしむる」戦勝の意義が所謂帝國主義や侵略主義の範疇に入らぬものであること等の論證等は、明確に述べべきことではあるが、後に詳述することであるか



ら茲では割愛する。

## 第六節 本章の小结

之を要するに、本章の冒頭より述べ来たことを通観すれば、戦争論・兵學論上の基本問題に於て、マルクス主義の考への形式<sup>思想内容を圖</sup>が東洋的、日本的なるものへと發展しつゝあることは否み得ないことであらう。勿論仔細に検討すれば、彼等は未だ我々と相距ること甚だ遠いものではあるが、しかも従來の純西洋的思惟、クラウゼウッツ流の考への型を破つて、一步それから超脱してゐること丈は何人と雖否定出來ないことである。

斯くの如くマルクス主義戦争論は西歐従來の觀方に比すれば誠に劃期的なるものがある。寧ろ、正に數段の飛躍的發展を遂げ得てゐるものと評するも過言ではあるまい。このことは、彼等自らも自負してゐるものと見える。例へばソ聯國立軍事圖書出版局は、一九三二年、クラウゼウッツの戦争論のロシア語譯刊行に際し、之に序したる一節に曰ふ。

「クラウゼウッツの戦争論は永久的な戰略理論を造り上げてゐるものではない。彼自らも言ふ如く、『夫々の時代にはその独自の戦争がある』ものである。時代が歴史的に發展するに應

じて戦争も亦それ自身、必然に、その本質形態を變化發展するものである。」

と。即ち、彼等に従へば、クラウゼウッツの戦争論は既に頗る時代後れの骨董的戦争理論であり、随つて西歐に於て戦の神と仰がれるナポレオンの權威も、現代に關する限り、彼等の前には何等の光をも持たぬ譯である。現代には現代の戦争理論があり、それはクラウゼウッツやナポレオンから離れた現代独自のものであらねばならない。獨占資本主義時代、金融資本主義時代、特に彼等の盲信する共產主義世界出現の前夜たる現在の時代には、この時代の特異性に應ずる特異の戦争觀、戦争論がなければならぬ。これが彼等の見解である。

特に彼等が奈翁の赫々たる戦績に關して次の如き見解を持つるのは、強く我々の注意を牽く。ナポレオン・ボナパルトが脅威的神速さと震駭的徹底さを以て、彼の諸隣邦を撃破し得たる所以のものは、只前者が時代の飛躍的轉換に應ずる戦争をもち得たのに對し、後者はこの時代の必然的轉換を識らず徒らに舊時代の舊殼の中に居眠り舊時代の戦争しか持ち合はさなかつた故に他ならぬ。而もナポレオンをして逸早く新時代の戦争を持ち得しめたものは、彼自身の俊敏さ以上に、フランスの社會、政治、經濟、が隣邦に先んじて古い封建制より、新しい市民制へと飛躍發展したことに基くものである。蓋し、戦争なるものは、社會、政治、經濟の諸地盤を

離れては成立し得ないものだからである。と。我々は彼等のかゝる見解を現實の時代、社會に照應して省みる時、種々の意味から大いなる示唆を受けると信じて疑はぬものである。

以上を以て、マルクス主義戰爭論の形式的方面の觀察を終ることとする。次には、彼等が描くこの戰爭形式が彼等の意圖即ちその戰爭内容から觀て、果して彼等に可能なる形式であるか否かの觀察に移らう。更に端的に言へば、筆者は次の章に於て、彼等がその信奉するマルキシズム——共產主義——を捨て、日本精神に同化せられ、これに歸一するのでなければ、畢竟する所、單に東洋日本の形式のみを真似て而も自己の素質内容を省みざる「鵜を真似る鳥」と同類なることを論破しやうと試みるものである。

### 第三章 マルクス主義戰爭論の内容と其の批判

#### 第一節 無産階級主義

マルクス主義は、他の觀點から謂へば、無産階級主義と呼ぶことが出来る。

無産階級主義とは「無産階級」なるものに第一義的、窮極的なる價值を認めるものである。随つて「無産階級」以外の一切のものは凡て之に附隨して考へられ、唯無産階級の利益の爲の手段として役立つ場合にのみ、その價值が認めらるゝに過ぎない。個人も家族も、民族や國家も、又學問藝術其他一切の文化も、それ自體としては何等の價值あるものではなく、唯それが無産階級の目的に沿ふや否やによつてのみ價值付けられ、謂はば此等は第二義的なる價值をもつに過ぎぬ。

マルクス主義者にあつては、無産階級の勝利——換言すれば有産階級の打倒覆滅——が最大にして且最後の目的であり、各個人々々はたゞ之が手段として生存し存在する以上の價值を與へられぬ。又かゝる目的のためには、親を捨て、子を省みず、民族を賣り、國家を亡し、其他如

何なる權威をも弊屢の如く捨て、省みない。否、彼等によれば、かゝる行爲こそ、彼等の正義であり、彼等の「道德」であると主張せらるゝのである。實にこの主義に於ては、「無産階級」なるものがその他の一切のものを壓し除けて、獨り價値の王座に登り、唯一最高の權威の地位を獲得する。

而して、彼等のかゝる價値觀は彼等に特有なる社會觀に依つて根據づけられ、又それによつて補強せらるゝ。彼等の見解に従へば、現實にある凡ての社會・團體は何れも對立する二つの階級を基礎として構成せられてゐるもので、階級を離れた國家もなく、階級を超越する民族も認めない。凡ての會社工場は云ふまでもなく、大は世界より小は家族團體まで、其他如何なる社會も如何なる團體も凡て皆之れ階級を以てその基底的・根幹的構成要因として成立してゐると主張する。隨つて個々々の社會・團體は何れも夫々に階級意識を根本契機として構成せられ運営せらるゝと觀るのであつて、この觀方から、大膽にも階級意識は國民意識、民族意識、世界意識等凡ゆる同族意識、社會意識に超越し、そのみが獨自性をもつ唯一の意識たるべきものと主張せらるゝ。マルクス主義者によれば、「在來一切の社會の歴史は階級闘争の歴史である」といふ。而して、「歴史上の古い諸時代に於ては、殆んど到る處に於て、社會は種々なる

階級に分かれてゐた」が、「封建社會の滅亡によつて發生した近代市民社會の時代となるや複雑な階級對立が漸次單純化せられて、全社會は次第々々に相互に敵視し合ふ二大陣營、直接相互に對立する二大階級に分裂しつゝある。ブルジョアジーとプロレタリアとがそれである」と云ふのである。

この見解は、マルクス主義者にとつては謂はゞ「公式」となり、凡ゆる文化事象の觀察に、また凡ての實踐理論の展開に、何れもその根柢となり、従つて、この法則だけは、恰も彼等の辨證理論の妥當範圍外にもあるかの如く、時代の變遷の如何に拘はらず、また民族の異同如何を問はず、常に普遍妥當性をもつて來たものなるかの如く主張せらるゝ（こゝに大きな自己矛盾があるのだが――）。之がために、彼等の目からは、世界無比なる超階級的存在者があり得ること、否嚴乎としてあることも見落され、また、階級意識に超越する我々の民族意識、家族意識、或は從來一部に於て獨自性をもつと認められて來た個我意識等も凡て彼等は億面容捨もなく否定し去るのである。

之を要するに無産階級主義とは對立する階級を以て現實の社會の基底的、根幹的なる構成要因であると觀て、自己の所屬する「無産階級」なるものに第一義的、窮極的なる價値を認める

一つ思想體系であると謂ひ得るであらう。

この主義に於ては戦争を觀察するに右の如き思想内容を以てする爲に、その戦争觀の内容は必然的に以下順次述ぶるが如くなるものである。

## 第二節 進歩的戦争と反動的戦争の意味

戦争の意義、功罪等を考察するに當つて、彼等は戦争一般を對象とすることなく、その凡てを「進歩的戦争」と「反動的戦争」とに二大類別する。然らば何をか進歩的戦争と呼び、或は反動的戦争と斷定する？

この兩者を類別する標準は、只徹底せる彼等の無産階級主義そのものである。無産階級が有産階級に對して挑む戦争（國內戦争）弱小民族が強大なる民族と戦ふ戦争、本國に對する植民地並に半植民地（勢力範圍）の戦争、無産階級の國家（即ち、現實的にはソ聯に他ならない）が他國と角逐する戦争——これらが彼等の謂ふ「進歩的戦争」の範疇に入るものであり、之に反するものが所謂「反動的戦争」と呼ばれるものである。

更に内容的に、彼等のこの標準を探究すれば、畢竟するに、「資本主義世界に續いて來るべき

ものは社會主義の世界特に所謂共產世界である」といふ彼等のみの獨斷（この獨斷こそ最も大なる彼等の誤謬であり、而もこれが最も多く人々を誑らかすものである）から、かゝる次代の世界を實現せんとする方向に沿ふて戦はれるものが「進歩的戦争」と呼ばれ、之以外のものが凡て反動的戦争と名付けらるゝに過ぎない。

例へば、マルクス主義の本尊たる「マルクス」は、ドイツ側から觀た普佛戦争を進歩的戦争の範疇に入れ、且つドイツ側の勝利を望んで止まなかつた。併しそれは、彼がドイツ民族を以て人類全般の繁榮のためにより多く貢獻し得る民族と認めたが爲でもなく、又、ドイツ國家の統一に窮極の價値を認めた爲でもない。ただ、世界プロレタリアートの利益の爲にその方便としてドイツの勝利が必要であると觀たによるものであり、ナポレオン三世を倒すことが社會主義世界を建設するためにより近道であると云ふ見解からのみ、ドイツ側の戦争に「進歩的」の名を與へたに過ぎぬ。この詳細は彼の政治的著作たる「フランスの内亂」並に彼とエンゲルスとの往復書簡集の中に明確に述べてゐる。その一例を挙げれば、マルクスは一八七〇年七月二十日エンゲルス宛の書簡に於て、「もし、（普佛戦争に於て）プロシヤが捷利を得るならば、やがて國家の權力集中を行ふが、それは、獨逸労働階級の集中に役立つこととなる。獨逸の優越は、

更に西部ヨーロッパの労働運動の重心をフランスから獨逸へ移す。そして、世人はたゞ獨逸労働階級が合理的にも、組織的にも、フランスのそれに優越であるといふことを見るために、一八六六年から今までの兩國に於ける運動を比較した。世界の舞臺に於ける獨逸労働階級の、フランス労働階級への優越は、同様に僕等の理論が、ブルードン其の他の上に優越であつたのである……云々……」<sup>(註)</sup>といつてゐる。

之を要するに、ある戦争の是非、善悪、功罪を定め、その進歩的たるか、反動的たるかを判定する彼等の窮極的標準は、理論的にはプロレタリアートの利害であり、現實的にはソ聯邦の利害以外の何ものでもないこととなる。

註 マルクス・エンゲルス全集(改造社版)、第二十卷、三四三頁。

### 第三節 戦争と階級闘争との關聯

次にマルクス主義者は、凡ての戦争を階級闘争との因果的連關に於て觀る。如何なる戦争と階級的利害を超越して起るものではなく、又その結果が兩階級に相反する利害を與へぬものはないと主張する。随つて、階級から離れて民族的・全體的なる情熱から勃發する戦争、又階級

を超越する正義・人道の止むに止まれぬ慾求から起る正義の戦争等に就いては、何れもその存在を否認する。又その結果が兩階級に普き繁榮を齎らし、或は一樣なる利害を及ぼすが如き所謂國民戦争や、或は階級の利害を超越し自國の立場のみに拘泥せず、専ら大乘的立場に於て破邪顯正、以て人類永遠の福祉を實現するが如き東洋的なる所謂「活人の戦争」等——之等の戦争の存在の可能性に就いては、悉く之を否定し去るのである。

彼等は大膽にも——否、寧ろ無法・盲目的にも——ソ聯邦、竝にソ聯邦に一脈相通するもの、戦争以外の凡ての戦争は、何れも皆有産階級のみ目的動機より起り、且その利益の擴充強化を齎す以外の何ものでもなく、無産階級は之に反して戦争のために窮迫と犠牲とを強制せらるゝに過ぎぬものであると主張する。随つて、ソ聯邦以外の凡ての國の無産者がかゝる戦争に處する唯一の道は、階級闘争の全面的、徹底的展開に求むるの外なく、畢竟「ソ聯を擁護し、自國を敗北に導くべきである」と強調する。

茲に於てか、彼等は所謂平和主義を極度に排斥否定しつゝあるにも拘らず、所謂平和主義者以上に深刻果敢なる反戦闘争を捲き起すのである。

#### 第四節 所謂「帝國主義戰爭」と其の不可避性との意味

250

マルクス主義者は謂ふ。「資本主義はその發展の最終段階に於て、全産業部門をカルテル化し、トラスト化し、シンジケート化して、所謂獨占形態に入つた。而して全産業部門に亘るかゝる獨占化は必然に金融資本と結ぶことを餘儀なからしめらるゝ。茲に寡頭少數なる金融資本家が制覇する金融資本主義の時代を實現するに到つた。この獨占・金融資本主義の時代が即ち現下の時代であり、それを特に「帝國主義時代」と謂ふ。」と。

而して、「この獨占・金融資本主義時代、換言すれば、帝國主義の時代にあつては、地球の殆ど全部は或は植民地、勢力範圍といふ形態に於て、或は財政的搾取の無数の絲を以て、かゝる獨占資本家・金融資本家の間に分配し盡されてゐる。茲に世界的に一種の勢力平衡の状態が現出する。」

「處が、資本主義なるものはその本質上支配を欲して飽くことなきものである。故に一國に於ける獨占・金融資本家は己れの絶えざる膨脹發展を庶幾畫策して、常に世界のこの平衡状態を打破すべく努力して止まない。換言すれば、自己の爲に新たなる分割を企圖して止まぬのが之出する。」

資本主義・帝國主義の特質である。」而して「世界の重新分割を決定するものは、只武力のみである。茲に於てか、この時代にあつては、世界再分割の爲の戰爭——即ち帝國主義戰爭は不可避であり、必然であると謂ふべきである。」と。

註 レーニン著「社會主義と戰爭」(一九一五年八月)よりの要約。

以上が彼等の所謂「帝國主義戰爭」の意義の概要と、その「不可避性の理論」の要約である。

翻つて、虚心坦懐に現下世界の政治經濟情勢を觀察する時、我々は必ずしも、かゝる意義の戰爭の存在する可能性を否定し得ない。のみならず、その不可避なることさへ認めるのに敢て吝なるものではない。だが、之に就いて特に看過すべからざる一事は、果して彼等の謂ふが如く、社會主義國以外の凡ての國の戰爭が何れも皆かゝる意味の帝國主義戰爭であると斷定し得るや否やの問題である。

更に具體的に謂へば、ソ聯邦以外の凡ての國の戰爭が何れも皆その國の獨占資本、金融財閥の繰る絲によつて畫策指導せられ、且それらの利益と繁榮——反言すれば、大衆の犠牲と窮迫

251

——以外に何等の結果をも招来せぬと断定し得るであらうか？ 階級を超越して嚴乎として輝く存在者が一國の最高權威の地位にあり、又、その權威によつてのみ統率せらるゝ超階級的軍隊が嚴存する場合、かゝる國、かゝる軍隊の行ふ戦争なるものは、彼等と雖それをしも彼等の所謂「帝國主義戦争」の範疇には入れ得ぬ理である。若し、強ひてかゝる國、かゝる軍隊の戦争をまで「帝國主義戦争」と呼ぶの暴舉を敢てするならば、それは彼等自身の理論的自殺以外の何ものでもないこと、極めて瞭らかである。而も彼等は如何なる理論的・科學的根據を以てかゝる特殊獨自の一國の存在の可能性を否定し得る？

若しそれが、豫め準備せられた唯物史觀・階級主義社會觀といふある形式を以て、強ひて凡てのものに適用して得た結果であるならば、それは餘りにも誤れる公式主義であり、俗にも云ふ「色眼鏡を通して萬物の色を見る」の過誤を犯すものたるを失はない。のみならず、それは特に彼等自ら排斥して止まぬ所謂「形式主義」であり、就中彼等の「守り本尊」とも謂ふべき辨證法論理にさへ悖るものである。蓋し、それは社會一般を時代的個別・特殊相に於て觀るのみであつて、更に地域的社會を地域的なる個別性・特殊性に於て把握理解するものではなく、随つて亦一つの抽象的・觀念的論理たることを失はないからである。即ち彼等が論理に忠實な

る限り、右述の如き特殊・獨自の國家の在り得ることを否定し得るものではない。随つてソ聯以外の凡ての國の戦争を強ひて一律に「帝國主義戦争」と呼ぶことは論理的にも甚だしい誤謬であると謂はねばならぬ。茲には唯以上を附言するに止めて詳細は別項批判の部に譲らう。

### 第五節 豫想する將來戰の規模と内容

マルクス主義者は謂ふ。「現段階の資本主義は世界的規模にまで發展してゐる。個々の國民經濟はその一環に過ぎない。故に何れの國に生起する政治的變化も只世界資本主義との連關に於てのみ變化する。」と。

右の見地の下に次の如く推論する。一國或は一地方の戦争も、來るべき時代に於ては必ず凡ての民族を戰場に呼び出す大戦争と化すであらう。而も、この大戦争は當然階級戦争として顯著なる姿を現はし、結局に於て資本主義を維持しやうとする階級と社會主義の建設を要求する階級との決戦を意味するであらう、と。

即ち、彼等はかくの如き世界的大戦争の勃發のために、待機しつゝあり、且それが世界的規模の階級闘争に轉化するものなりとの確信の下に、あらゆる準備と努力とを重ねつゝあるので

ある。ソ聯邦が全産業部門を根本的に建て直すのも、軍備の徹底的なる強化再組織を念ぐのも、畢竟するにかゝる時機のための準備・待機であり、かゝる決戦を豫期してそこに彼等の最後の、決定的勝利を獲んとするの魂膽に外ならぬと観て差支へない。支那事變に於ける執拗なる對蔣援助も、その根本動機に於て、畢竟するにこれ以外にはないのである。

だが、資本主義時代に續いて社會主義・共產主義の時代が來るといふ彼等の見解は、何等實證を経ざる彼等のみの斷定である。我々の見解を以てすれば、現に生育しつつあるフロンシズムの社會は、それを哲學・世界觀的に觀察するも、將又、政治經濟其他の文化の各部分から觀るも、所謂資本主義の社會でもなければ、又彼等の謂ふ社會主義・共產主義の社會でもない。

蓋しこの新しき社會に於ては資本主義の中核的要因たる個人主義・自由主義から離れ、又共產主義・社會主義の基調たる階級主義を超越して、専ら國民主義乃至は民族全體主義を信奉し、之を政治・經濟・思想等の文化の各部分に顯現せんとしつゝあるのである。随つて、それを尙資本主義の變形とか、その一形態に過ぎぬと誣ふるのは、只マルクス・レーニン主義者のみの盲目的・獨斷に過ぎない。

特に、以上何れの主義にもこだはらず、而も更に望ましく正しき國家、世界の存在の可能性

は、形式理論のみに支配せらるゝ人に非ざる限り、何人と雖否認し得ぬことであらう。換言すれば、所謂個人主義・自由主義を基調とするに非ず、さらばとてそれと對立的なる階級主義・全體主義・権力主義を根幹とするにもあらず、之等よりも更に高次の立場に立つ普遍原理をもつ眞正なる國家・世界なるものがあり得るものである。寧ろそれは論理的に存在の可能性を認め得るといふに止まらず、人類文化史上、將に出現すべき必然性をさへもつとは認め得られぬであらうか？

翻つて人若し我が國體を公正に體認する時——偏見に捉はれず、我執にも泥まず、ひたすらに清明なる心境に於て、我が一貫する國體の眞姿を體認する時、そこには果して如何なる原理乃至精神を見出し得るであらう。所謂「道」として我が國を一貫して來たもの、之を「古今に通じて謬らず、之れを中外に施して悖らざる」我が國體の「道」、これこそ、實に絛上の普遍原理に外ならない。尙之に關しては他の章に於て詳しく述べるところであるが、我々は次の時代、次の世界の文化を決定すべき、望ましくして且必然的なる根本原理こそ、斯の道、この普遍原理であり、而もそれは我國に關する限り單なる希望や論理的可能の問題ではなく、實にその國體の事實の中核として嚴乎として一貫不變に實在し續けて來たものである。滿洲事變も支那事



變も、更に邁つては日清・日露の兩役も、悉くこの道この原理より進り出たものと確信する。

要するに、「資本主義に續いて社會主義の時代が来る」といふ彼等の見解は、論理的にも、現實的にも、彼等のみの獨斷であり、謬見である。隨つて來るべき戦争に就いての彼等の豫想は、「その規模が世界的たるべし」と云ふことは兎も角として、「その内容が資本主義と社會主義との決戦である」と謂ひ、又「世界的規模に於ける無産階級と有産階級との決定的・最終的闘争に轉化する」と觀るが如きは、何れも現實に盲目なる獨斷であり、論理を謬る狂へる偏見に過ぎない。現實に生育しつゝあるフランズム社會の本質と實相、更にまた我が日本國體の歴史と事實、若し之等の客觀的事實を偏見に捉はれず、冷靜を失はず、正しく觀察し理解する限り——尙又一つの型に鑄込まれた推論の形式から離れて、更に自由な眞實な論理に従つて考察する限り、彼等は當然に別な結論に導かれざるを得ぬであらう。

## 第六節 攻撃戦争と防衛戦争

マルクス主義者は凡ゆる戦争を「攻撃戦争」と「防衛戦争」とに類別して、その是非を判定する。だが、之を類別する彼等の標準は一般のものとは大いに異なるものがある。彼等にあつて

は「何れの側が先に宣戦したか?」「何れが先立つて攻勢を採つたか?」等といふことは、その類別のための標準とはなり得ない。之に就いて、ジノヴィエフの言を引用して例證しやう。彼はその著「戦争と社會主義の危機」に於て謂ふ。

「ある戦争が攻撃戦争であるか、防衛戦争であるかを決定するものは、外交的標準でもなければ、軍略的標準でもない。決定的なものは全歴史的発展の立場よりの判断である。兩陣營の何れが歴史的進歩のために戦つたか? 只これに依つてのみこの問題は決定せらるゝ。

資本主義は封建主義に比すれば一つの歴史的進歩であつた。資本主義に比すれば、社會主義のみが歴史的進歩と認めらる。（傍註は無論、前項の標準参照）故に國民的戦争の時代に於ては、封建的、若しくは半封建的分裂に對して、統一的な國民的資本主義的國家を防衛した場合のみが防衛戦争であつた。資本主義が最後の發達段階に到達したる今日の帝國主義の時代に於ては、防衛戦争は只社會主義國が資本主義的、帝國主義的國家に對して勝利を得、それを防衛し得る場合にのみ可能である。」と。

右の見解に隨へば、當然にも次の如き驚くべき暴論が平然として躍り出るであらう。即ち、ソ聯邦が戦備の擴充全くなり、而も客觀的状態漸く熟せりと觀るとき、將に好機到れりとなし

て、俄かに立ちあがつて攻勢を以て隣邦に挑戦し、自ら進んでそれを侵略するの舉に出たと假定する。その場合、この見解に従ふ限り、この戦争はソ聯邦側の攻撃戦争でもなく、又侵略戦争でもない。寧ろ、それこそ實に正しい防衛戦争であり、進歩的戦争であると肯定せらるゝに到るのである。

マルクス・レーニン主義者は頑としてこの論法を絶対に正しいものとして、而も之を以て凡ての國の無産大衆に呼び掛けてゐるのである。而も縱へ暫時的にせよ、諸國の大衆の中には、彼等のこの煽動に訛らかされて、かゝる誤れる論理、狂へる獨斷に引き込まれ、攻撃戦争、防衛戦争のかゝる意味付けを是認支持するものさへあるのである。

この意味付けの謬りなることは既に前項の批判に照應すれば自ら瞭らであらう。而も我々は確信する。彼等がこの論法を固執する限り、彼等の社會主義以上に人類の歴史的発展のために貢献する他の國家原理・世界原理があると認められた場合、それを把握する甲國が進んで社會主義國を侵略し、自ら立つて攻勢によつてその國に挑戦するとしても、甲國側の戦争は決して侵略戦争でもなく、攻撃戦争でもない。それは眞に正しい防衛戦争であり、進歩的戦争であつてマルクス、レーニン主義者自身それを肯定せざるを得ぬ理である、と。

### 第七節 平和に就いての見解

マルクス、レーニン主義者は所謂「平和主義」を否定する。だが、彼等是我々こそ眞の平和の懇求者であり、そのためにのみ闘争するものである、といふ。例へばレーニンは曰ふ。

「労働階級を欺瞞する形態の一つは『平和主義』の抽象的な『平和』の合言葉である。現代に於て大衆を戰闘的行動に鼓舞しないやうな平和の宣傳は、幻想を弘布して無産階級を去勢するものに他ならない。」(戦争と社會主義)と。

之に續いてマルクス主義者は曰ふ。

「ブルジョアの平和主義に對立するものこそ、眞の平和主義即ち無産階級の平和主義である。眞の平和は無産階級が有産階級を克服した後に於て、始めて客觀的な社會的、經濟的根據をもち得るのであるから、眞の平和への道は階級闘争そのものに他ならない。」と。

マルクス、レーニン主義者の平和に就いてのかゝる見解を識る限り、ソ聯邦局の口演や外交辭令の中に「平和」といふ言辭が如何程多く用ひられるやうになつたからとて、又彼等との接渉に當つて如何に熱烈に平和希求の願望が開陳せられたからとて、それを以て「マルキシズム

以外の思想に於ける平和」の希求と混同するものはない筈である。同じく「平和」といふもその意味内容は黑白の如き差異があるからである。だが、それにも拘らず、——彼等のかゝる思想的榮屋裏を識つてか、或はそれに就ての無知無識からか——ある一部の識者、有力者の中には、不思議にもソ聯邦外交方針の平和主義への轉向等と、さも物識り顔に吹聴して歩くものがあつたやに記憶する。怖るべきは無知であり、危険極まるものは言葉の背後に嚴存する世界観、思想體系を無視する單なる言語翻譯者である。然らば眞の平和とは如何なるものなるべきであらう。これに就ても、戦勝と共に、次節に於て答へるであらう。

以上を以て無産階級主義——マルクス、レーニン主義——戦争論の内容に就いて比較的重要なるものを一瞥した心算である。而してこの戦争観の内容をなすものが徹底せる無産階級主義を以て一貫してゐることも、述べるに随つて明瞭となつたと信ずる。

## 第四章 マルクス主義戦争論の總括的批判

### 第一節 特殊と普遍形式と内容

先づ第一に、無産階級主義はその名も示すが如く、無産階級の立場のみに捉れた主義である。従つて、縦ひその主張が無産階級には妥當するものであると假定するも、有産者には妥當する筈のないものである。のみならず、この主義を信奉するもの達が、無産階級の立場に於て展開する自己の理論、行動を正しいものと確信すればする程、彼等は又反面に於て當然に、彼等と相反する有産階級の立場から導かれる全く反對の理論、行動にも同様の正當性を認めねばならぬ理である。

例へば、彼等の主張するが如く、無産者は只自己の所屬する「無産階級」なるもののみ至上の價値を認むべきものであるとするならば、それは反言すれば、有産者は自己の所屬する「有産階級」のみを唯一・至上の價値と認むべしといふのと同様であつて、彼等自身と雖「有産者に關する限りそれは正當である」と認めざるを得ぬ筈である。又、無産者が無産階級の利益

と繁榮のみを追つて爲す凡ての行動、——特にその目的の爲にのみ有産者を打倒覆滅せんとする、かの階級闘争なるもの——が、若し彼等の謂ふ如く正義であるならば、他面又有産者が自己の階級の利益・繁榮のみの爲めにする凡ゆる行動——就中その爲に無産者を徹底的に搾取し××することにさへ——も同様の意味の「正義」の名が許されぬばならぬであらう。尙又、無産者の立場に偏倚して認識せられた彼等の理論が、果して彼等の名付くるが如く「科學的眞理」であるならば、有産者の立場から認識せらるゝ、それと全く矛盾對立する内容の他の理論も亦有産者のためには同様に「科學的眞理」たることを彼等自身に於て承認せざるを得ぬ筈である。斯くの如くこの主義は普遍性を缺くものである。この主義を把持するものが、自己の理論、行動、感情の妥當性を確信して、縦しそれに「眞理」「正義」「善」等の名を冠するも、實はその名に適はしい普遍性・窮極性をもつものではなく、少くとも特殊個別の殻の中にのみ閉じ籠るか、或は分裂して統一なき似而非なるそれ等に過ぎぬと評せざるを得ない。このことは彼等自身の言ふ「科學の階級性」「階級正義」「階級道德」「プロレタリア藝術」等の言葉そのものが之を明確に表現してゐる。

尙、之に就いては、エンゲルスの言葉を引例すれば更に判然たるものがある。彼はその著

「反デューリング論」の「道德と法、永恒の眞理」の篇に於て曰ふ。

「我々は、道德界に於て、歴史と民族の差別を超越した恒久的な原理があるといふ口實の下に、何等かの道德論を永久的な、窮極的な、進んでは不變な道德律として、我々に強ひやうとする全ての要求を拒否する。

之に反して、我々は斯く主張する。凡ての道德理論は結局に於て當時の社會の經濟的所産である、と。然かも社會が從來階級對立を爲してゐたやうに、道德も亦常に階級道德である。……中略……階級對立及び階級對立への回想を超越した、眞實の人間の道德は、階級の對立が克服された許りでなく、生活の實際上階級對立の記憶がなくなつた社會段階に於て始めて可能である。」と。

彼は更に眞理、正義に關しても、略同様の見解を披瀝し、而も次の意味を強調する。

「人間の思惟・認識は誤謬をおかすことを免れない。從來一度と雖、永久不變の眞理や正義が確立せられた例はない。全て過去に於ける恒久的眞理の構成者は、多かれ少なかれ、馬鹿であり、法螺吹きである。眞理や正義なるものも、時代や社會の變化に従つて變化するものである。」と。

之を要するに無産階級主義に謂ふ「眞理」「正義」「道德」等は何れも、階級を超えて普く安當するものでもなく、又時代や時間を通じて膠りなく適用し得る性質のものでもない。少くとも、社會・團體の一半たる有産者を除外し、社會主義・共產主義の社會以外の全ての社會を埒外におし除けた所のみ安當せしめんとするものが彼等の「眞理」と呼び「正義」と名付け「道德」と稱するものである。それらは「之を古今に通じて膠らす之を中外に施して悖らす」といふ普遍安當、至上眞正なるものではなく、専ら特殊個別の殻中のみ閉ぢ籠つて一般・普遍性を缺いてゐるものである。

註一 エンゲルス「反デューリング論」第一編哲學、道德と法・永恒の眞理。マルクス・エンゲルン全集第十二卷、二七五—二七六頁。

註二 同 二六七、二七一頁。

凡そ、眞正なる眞理・正義・道德は、千態萬様、個別特殊なるものゝ中に一貫不變の「一」に歸するものがあり、この歸一する普遍一般なるものが顯はれては千變萬化の個別特殊なるものとなる。「多にして一、一にして而も多」、之が眞實至上の眞理・正義・道德の實相である。この

我々の確信から觀れば、無産階級主義者が大膽にもそれらの歸一性普遍性を否認し去つて、徒らに個別性、特殊相のみに拘泥するのは如何にも皮相の短見であると評せざるを得ない。

之に就いて稍、詳しくは後に觸れることゝして、兎にも角にも、彼等の認識する理論、彼等の抱懐する感情、彼等の實踐する行動、更にいへば、彼等の價值觀なるものは、何れも普遍性なきものである。それは決して我々の爲にせんための牽強附會や、歪曲偏見に基く斷定ではなく、彼等が昂然として肯定し強調するところであること前掲エンゲルスの言に依つても瞭らかである。

然らば、この主義が、少くとも斯くの如く普遍性を缺くといふ事それ自身は、この主義を信奉するもの達が豫想し期待しつゝある戦争の形態、戦略の形式に如何なる影響を及ぼすであらうか？ 再言すれば、無産階級主義をその戦争、戦略の内容とする限り、果して彼等は、庶幾するが如くに、舊い西歐流戦争形態から離脱し、クラウゼウッツ流の過去の戦略形式から超越して、更に高次に發展した戦争、戦略の形態、形式を實現し得らるゝであらうか？

既述の如くマルクスは彼等のために名詞を遣した。「ドイツの獨佛戦争をして、フランス國民を敵とするドイツの戦争にまで墮落せしむる勿れ」と。この名詞も彼等の信奉する普遍性なき

無産階級主義を内容とする限りは單なる野狐禪に終ることなきや？

又、彼等はその戦争の形態、戦略の形式を斯く豫想してゐる。「來るべき戦争に於ては敵國を破摧することよりも、敵國を全うしてそれを自己のソヴェート社會主義聯邦中の一邦として歸屬せしむることが、更に上々の策である。又、敵の軍・師・旅團等を殲滅すること以上に、それらを擧つて味方の陣營内に於て自己の軍隊の一翼たらしむる如く改編することが、更に上の上なる戦略の形式である。」と。換言すれば、從來の西歐的戦争形態から離れ、クラウゼウッツ流の過去の殲滅戦略を超えたるところの、更に高次に發展せる新形態・新形式——東洋古來の戦法「全國爲上破國次之、全軍爲上破軍次之、全旅爲上破旅次之、云々」をそのままに採つて以つて自己の戦争、戦闘の第一法式たらしめんとしてゐる。だが彼等のかゝる企圖は、その戦争、戦闘の内容を一貫して決定する無産階級主義——普遍性なきこの主義——を以てして、果して能く庶幾の如くに實現し得るものであらうか

尙更に、彼等は東洋流の「戦ハズシテ敵ヲ自ラ降ラシムル」戦略の形式、——而して又、「暫時的、強制的にして、而も不徹底なる戦勝に醉ふのではなく、永久的、自發的にして徹底せる勝利」——「マツロハヌモノドモヲ、マツロハシムル」御軍の勝利——を以て眞の戦勝となす戦

争目的觀の實現を庶幾してゐるやうである。(以上何れも本篇第二章参照)

だが、彼等のこの希望、彼等のこの模倣は、普遍性なき主義を信奉する彼等である限りは、畢竟するに一夜の夢、或は鶴を眞似る鳥の失態に歸するのではなからうか？

右の諸項に就いて精確なる解答を得んが爲、先づ茲に、敵と味方との關係——我と他者との關係——一國と他國との關係に就いて稍、精密に分析して考察しやう。

## 第二節 自と他、敵と味方の關係の

### 具體的把握

抑、彼我の相互關係は、兩者の間に横はるところの、利害と目的、思惟と感情、竝に力の相對關係如何によつて種々に變化するものである。

彼我の間に、利害、目的を異にするものあり、夫々の思惟、感情に於て互に相對立するものあるときは、そこに「敵對意識」なるものが發生する。この敵對意識は「力」の支援を俟つて敵對行爲として顯はれる。即ち、兩者の間に敵對意識がある場合に、若し相互の力——武力——が相拮抗し得るか、或は少くとも拮抗するに足ると考へらるゝときに、この意識は行爲にま

で發展し遂に力の角逐——武力闘争——を惹起する。之が所謂彼我「交戦の状態」である。

然るに、兩者の間に敵對意識は存在するも、夫々の力が著しく不均衡にして、一方は他方に對し相拮抗するに足らぬときは、その敵對意識は、顯はなる敵對行爲たり得ずして専ら陰然たる姿に於て匿さるゝ。即ちこの状態に於ては、力の角逐——武力闘争——なるものは生起せざるも、その反面に於て弱者の胸奥には根強き敵對意識が藏せられて他日の敵對行爲の機を待つてゐるに過ぎない。換言すれば現在の弱者が時を得て、力を獲得するか、或は利害、目的等を同じうする第三者の協力を得て、その力が相手に拮抗し得るに到れば、秘められてゐた敵對意識は忽然として顯はなる行爲を伴ひ、茲に相互の「力の角逐」「武力闘争」と化する必然性をもつものである。歐米流の植民地や屬國等がその本國に對する關係——更に詳しく謂へば、少數の本國官吏と莫大なる投下資本とに依つて専ら本國の利益のために搾取せられ、唯本國の目的のみのために壓迫せらるゝのが伴らざる現實である彼等植民地民族が、その本國に對する關係——は即ちこれに他ならぬものである。謂はば、「強制從屬の状態」である。

尙又、彼我が既に武力に依る闘争の状態にある場合、一方がその優越せる武力を以て他方の武力を破摧壓伏し得たるときは、茲に彼我の武力に依る角逐は一時終息して、所謂媾和の状態

が成立する。かゝる媾和に於ける彼我の相互關係は、從來の歐米一般の戦勝者と戦敗者との關係が之であつて、クラウゼウィツの言葉を以て表現すれば、「戦争の唯一の目標 (Ziel) たる敵の抵抗力を奪ひ得て、茲に戦争の窮極の目的 (Zweck) たる我々の意志を敵に強制し得るに到り、以て媾和 (Frieden) が實現せらるゝ状態」に他ならぬものである。之は謂はば、「強制屈服の状態」である。

註 クラウゼウィツ「戦争論」、上巻・第一篇・第一章の二の後段、同章四、第二章の前半、参照。

Clausewitz: Vom Kriege 1835 Leipzig S. 35, S. 37, S. 53—56.

而して、從來の一般の見解に従へば、かゝる媾和成立の状態——即ち強制屈服の状態——に於て、彼我の敵對状態は全く解消せられ、兩者の間に平和が復活せりと認められて來たもので之に就いて大なる疑念を挿むものはなかつた。だが、今精細至當にこの状態に就いて検討するとき、我々はこの状態を以て果して彼我の敵對状態が解消し、眞の平和が確立せられたりと認め得るであらうか？

この際、誤り易き俗見を避けて妥當なる見解を得んが爲には、嚮に兩者を驅つて交戦状態にまで導いた相互の敵對意識なるものは、かゝる媾和の状態に於て、その發生の諸要因が艾除せ

られ、或は滅殺せられたるや否やの觀察を怠つてはならない。武力に依る角逐を熄めて、所謂媾和を成立せしめたる唯一の動機は戦敗者の武力が戦勝者の優越せる武力に依つて破挫せられ、壓伏せられたることにある。

換言すれば戦敗者は戦勝者の武力の威歴に依つて不本意ながらもその矛を收めざるを得なかつたものであり、決して彼我の利害目的に一致點が見出され、或は相互の思惟感情に於てある融合點一點を認め得たが爲の媾和ではない、寧ろ、多くの場合、媾和に當つて戦敗者が戦勝者に依つて強要せらるる賠償、重課せらるる苛酷なる犠牲と負擔等は、兩者の間の利害、目的の背反、思惟、感惟の乖離を戦争直前にも倍して激化深刻ならしむるが常である。之が爲に戦敗者が戦勝者に對してもつ敵對意識は従前にも増して更に々々昂揚せらるべき必然性がある。

唯斯くの如くに益、昂揚激化せらるる一方側の敵對意識は他方側の武力の威歴下に於て、止むなく陰然たる姿に於て戦敗者の胸奥に秘められ、復讐の機を待つて暫時離伏するに過ぎないものである。即ち、皮相なる俗見を去つて、本質的なる觀察を行ふ限り、この状態は何等相互の敵對状態を解消し得たものでもなく、隨つて眞の意味に於ける媾和が成立し、或は眞の平和が確立したものと稱し得ないのである。

要するに、我と他者との關係、一國と他國との關係に於て、相互に「敵」たるの状態とは、常に武力に依る「交戦状態」にある彼我の状態である計りではなく、實質的には右述の「強制從屬の状態」も、又「強制屈服の状態」も共にこの範疇内に入るべきものである。それは徒らに皮相なる形式的見解のみに捉はれず、又單なる暫時の靜止的状态の觀察のみに拘らず、能く表裏に徹する實質的・具體の見解を以てする限り、又永續する時間に於ける可動的状態の觀察を以てする限りは、何人と雖理解し易く直ちに肯定し得るところのものである。

我々は確認する。單に「強力」のみに依つて對手を屈服せしむるも、對手の「敵」たることを解消し得るものでもなく、況んや對手を「味方」たらしめ得るものでは斷じてあり得ない。従來の如き歐米流の戦争を以てする限り、換言すれば、クラウゼウッツ的戦争論をその基本理念とする限りは、如何に赫々たる戦勝を以てするも敵は依然として敵たるに止まるものである。殊に、歐洲各國の過去の戦争史が物語るやうに、單に自國の繁榮と利益のためにのみ、如何に強力を以て弱小民族をその植民地、勢力範圍の内に包含しやうとも、畢竟するにその状態は永續し得るものではなく、況んや相互に密接不離、一體不可分の關係を結び得るものではない。それは本質的には、分離對立の必然性をもつものであり、實質的には相互間に於ける敵對



關係の助長たるに他ならない。

然らば、かゝる「敵」を變じて「味方」たらしむるの要件如何？ この要件を適確に探究せんが爲には、「味方」なるものに就いて再び精細なる分析的考察をなすのが便である。

同じく「味方」と呼び得る彼我の相互關係も、兩者を結合する緊密度の異なるに従ひ、又その結合の關係・状態を異にするに伴ひ種々なるものがあり得るものである。我々は今本論の理解に便せんが爲、之等を二個の段階に區分して考察しやう。その一つは「共同一致の状態」であり、其二は「歸依一體の状態」である。

「共同一致の状態」とは國際社會に於て見る通常の「同盟」乃至「協商」等の状態が之である。この状態に於ける彼我双方は互に純然たる獨立の關係に在るものであるが、唯兩者は利害、目的に於て一致するあるものを持ち、又相互の思惟、感情に於て必ずしも乖離せざるものあるとき、特に兩者に對抗すべき第三者を豫想して結成せらるゝものである。この状態は相互の間に發生する共同意識を紐帶として結合せらるゝのであるが、この共同意識は兩者に對する第三者の力が比較的に強大なるに従つて益、昂揚せらるゝのが通常である。

然るにこの第三者の力が比較的に衰微するか、或は第三者の兩者に對する對抗状態が漸次薄

らぐ傾向を採るに到れば、双方の間の共同意識も遂に漸次消磨してゆく。のみならず、兩者の利害と目的、思惟と感情の一致融合以上に、更に新たなる第三者とのそれ等の關係が歸一調和すべき何等かの事情が發生するに到れば、從來同盟・協商等の關係に於て結ばれた一方はその對手との關係を捨て、新たに第三者と結んで同盟・協商等の状態に入ること屢である。これは双方の共同意識を發生せしめた要因に鑑みれば、蓋し不可避のこととさへあると謂はねばならぬ。

即ち、共同一致の状態に於ける彼我の相互關係は互に「味方」ではあるが、一體不可分と稱すべき程の緊密度を有せず、又その關係は暫時的のもの、不安定のものにして、永續的一體性を具有してゐるとは認め得ない。畢竟するに離合集散常なき世俗的社會状態に於ける一時的なる一致たるを免れぬものである。

然るに、「歸依一體の状態」は、之とは大いに趣きを異にするもので、現に恰も日滿兩國の庶幾しつゝある状態がその適例である。兩者は互に獨立の關係に在るも、その獨立たるや所謂獨立以上の意味をもち、相互に不可分一體たる關係に立つものである。

茲に兩者の獨立と一體不可分といふ二つの關係は、形式論理乃至自由主義的世界觀から觀れ

ば、一見互に矛盾するもので兩立し得ないやうに考へらるゝものであるが、かゝる論理、かゝる世界観から離れて観する限り、何等矛盾對立する概念ではない。寧ろ、正しき論理、正しき世界観に従ふ限り、自然意志、宇宙必然の法則から獨立し、それから自由なるものは、森羅萬象中一物とでもあり得ない。従つて、この自然意志、宇宙必然の法則——それを宗教的に表現すれば、神の法則……神ながらの道……に他ならないものであるが——それを體認し、それに據つて凡ての實踐を律しつゝあるものにとつては、彼と我とは一見個々別々であり外形的には獨立なるものではあるが、而も兩者は所謂獨立自由なるものではなく、本然の相に於て一體たるものであり、實質的に不可分離の關係に於て結ばれてゐるものである。再言する。「柳は緑に、花は紅に、蝶は飛び、鳥は囀る。」森羅萬象悉く千差萬別、個々別々に獨立して生存するが如きも、實はこの千差萬別の内に宇宙生命の調和があり、個々別々なるものは互に因となり果となつて相互不可分の關係に結ばれてその生命を保続し發展せしめてゐる。これが、具體的普遍者の實相である。

要するに、宇宙萬象の生命は、草も木も、個人も家族、民族其他如何なる國家をも打つて一丸とせる一大生命に歸し、この一大生命が顯はれて個々別々千變萬化する森羅萬象となる。

「多にして一、一にして多」之が宇宙生命の具體的なる實相である。即ち、この宇宙生命の實相を體認し、それに基づいて實踐行爲が展開せらるゝとき、そこに萬有は各、其處を得せしめられて、相互に不可分にして一體なる繁榮が具顯せらるゝものである。かゝる生命觀、かゝる世界觀を體する限り、又、この世界觀に於ける眞正なる論理を理解する限りは、彼我の相互關係、兩國の相對關係が、各、獨立にして而も一體不可分なりといふことは何等の矛盾なき論理であるのみならず、これこそ現世界に普く實現すべき我と他者との眞實の關係に他ならぬものたるを識るのである。

要するに「歸依一體の状態」とは彼我兩者が獨立にして而も一體不可分に結ばれたるものであり、それは右述の生命觀・世界觀を體認せるが爲に、兩者の利害、目的が完全に一致し、それぞれの思惟、感情亦全く融合歸一する場合に生ずるものである。而してこの状態に於ける兩者のもつ力の相對關係はその結合の緊密度には何等の影響を及ぼさざるものであつて、唯一方の力が他方に優越する場合は兩者は恰も親子的關係に於て立つものであり、兩者の力が略、均等なる場合は恰も兄弟の關係に於て結ばれるものである。

この状態に於ては既述の共同一致の状態と異り、兩者の結合は永續的・恒久的であり、單に

當面の利害や目的、思惟や感情の一致のみに依つて結ばれるものではない。兩者は、更に窮極的なるそれらに於ても歸一するものであり、而も隨意々思以上の必然的な情誼を結合の紐帯とするものである。更にいへば、前者の結合は偶然的・隨意的であるに對し、これは本然的・必然的である。而してこの原理の普及、この状態の具顯こそ、實に我が民族本來の世界觀たる「八紘一字」の理想の宣布であり、我が皇道の翼賛實現、更に換言すれば現在「東亞共同體」の名がその第一階梯として示す我等の世界新秩序創造の理念に他ならぬものである。

共同一致の状態も、歸依一體の状態も、共に彼我兩者が互に味方としての結合状態である。而して敵を變じて味方たらしむるとは畢竟後者の状態を實現することを目標とすべきは茲に驚説する迄もあるまい。

以上に於て我々は敵と味方との關係、我と他者との關係、一國と他國との關係を稍、精細に分析考察した。茲で我々は敵を味方たらしむるの要件を探究し、次いで本節の主たる論題たる普遍性なき無産階級主義がこの要件に適ふや否やを考察すべき順序となつたのである。

### 第三節 マルクス主義戦争論と日本戦争論

敵を變じて味方たらしむるの要件は右述の諸項を通觀すれば何人も直ちに理解把握し得るであらう。即ちそれは他なし。彼我の間に横はる利害と目的の背反、思惟と感情の乖離を解消するにある。更に望ましくは一體不可分——八紘一字——の世界觀に隨順する状態を馴致するにある。

單なる暴力に依る鬭争や、或は個別特殊の殻中にのみ閉ぢ籠る似而非なる眞理・正義・感情等を以てする對手への強要は、畢竟するに敵を味方たらしめ得るものではない。智情意一體不可分の「たゞかひ」——思想戰、經濟戰、情操戰、武力戰の一體不可分なる全體的戰爭——而もその内容が之を「古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らざる」といふ時間的にも空間的にも普遍妥當の道——規範——より發するものにして、始めて、敵を變じて永遠に不可分離なる味方たらしめ得るものである。

山鹿素行も説く。「敵ノ人民ヲシテ簞食盡瘡シテ我が軍ヲ迎ヘシメ、又、「敵軍ヲシテ縦ヘソノ主將我が言ヲ容レズトモ、ソノ部下擧ツテ矛ヲ後ニ向ケ、自ラノ主ヲ敵トシテ我ト相携ヘテ我が聖戰ニ從ハシムベキ。」を。だが、素行先生はこの戦争形態、戰略形式を採用すべき根本的大前提として我が戦争の内容、我が戰略の實質が終始一貫して「道義ニ立ツベキコト」を強調

し、「人ヲ害ナハズ、土地ヲ荒サザルコト」を眼目とし、且「義旗ヲフルヒ」て我が戦争目的の普遍妥當性を對手に宣傳理解せしむることを必須の條件としてゐる。而も「道」も「義」も斷じて個別特殊の内におみ泥む偏狭なるものではない。それは明確に普遍性をもつものを意味する。

之に就いて、「兵法奥義」に曰ふ。「道ハ人ノ本ヅク所、天理自然ノ道ナリ。主ニ私ノ私心ナク、天下中ノ諸民ノ耳目心ヲ以テ主將ノ耳目心トスルトキハ、道自然ニ行ハル。」と。(註一)又、曰く、「上ハ國君主將ヨリ、下ハ庶民ニ至ルマデ、道ハ同一ノ道ニシテ、人ノ行ヒ守ルベキ所ナリ。然レドモ元ハ一ナレドモ、其職ニヨツテ少シク異ルニ似タル品アリ。一トイフハ根源ニシテ、其ノ之ヲ行フニ至リ其高下輕重ノ異アルガ故ナリ。君ニ君タル所ノ道アリ。臣ニ臣タル所ノ道アリ、農ニ農タル所ノ道アリ。工ニ工タル所ノ道アリ、商ニ商タル所ノ道アリ、一ト云フトキハ道ノ理ヲ云ヒ、其體業ヲ云フトキハ、其高下大小輕重ノ分限職分ニ從ヒ夫々ニ守リ行フ品アリ、世ノ學者ノ説ク所、此所ニ違アルニ似タル所アリ。」と。(註二)又曰く、「草業ヲ成サントセバ、我レ道ヲ守リテ安住スル所ニ止リ、道ノ道タル所ヨリ發シテ惡逆無道ヲ討チ、惡逆無道ノ下ニ苦シム士民ヲ助ケ、一夫ヲ誅シテ萬人ヲ安カラシムル。……中略……是レ明主良將ノ遵法

スル所ナリ。……中略……我レ正ニ止リ居テ邪ヲ絶ツ如クシテ草業ノ基ヲ建ツル時ハ、天意之ニ應ジ、人心之ニ順フニ至ル可ク、隨ツテ子孫守文ノ業(政教の治)モ長久ニ續クコトヲ得ベシ。」と。(註三)

註一 山鹿素行、「兵法奥義講録」創業篇。山鹿兵學全集、第一輯、一二八頁。

註二 同 陰陽兵源論。 九九頁。

註三 同 創業篇。 同 一三四—一三五頁。

之を要するに、「敵國民をして我が敵たらしめざる」戦争形態も、「敵國、敵軍を擧つて味方側の一翼たらしむる」上々の戦略の形式も、更に又、「戦はずして敵を自ら降らしむる」戦法、「勝利を永恆ならしむる」戦争目的の達成も、何れも共に普遍妥當なる道義に立脚する戦争・戦闘の内容を以てして、始めてその實現が可能となる。階級の對立を超え民族の距てを越えて萬民の上に普く妥當する道義。この道義<sub>（普遍的、正當、正義、）</sub>に發し、この道義を以て一貫する戦争にして始めて階級や民族の區別なく凡てのものを普く納得・自服・悦服せしめ得る。必然の法則・人の道を踐み誤る悉くの敵を擧げて翻然として改悟せしめ、一様に自ら降つて我が味方の一翼

に馳せ参ぜしめ得るものである。

又その戦争・戦略の内容實質が、古今に通じ夫々の時代社會に普きところの道義に依つて一貫するものにして、そこに始めて永恆の名に價する永續なる神聖の勝利が贏ち得らるゝ。政治・經濟・社會の形態・機構の幾變遷に拘らず、その上に超然たる各種族・諸々の民の「マツロヒ」——經濟的一體化・政治的社會的一體化・窮極に於て共同祖先を齋き祭り合ふ祭祀的一體化——の神聖の勝利が勝ち得らるゝものである。それは我が國體の嚴たる事實が之を立證してゐるのであつて、これに就いては改めて詳述しやう。

之に反して、自己の階級のみに至上・第一義的なる價値を認める、かの階級主義や、或は自己の民族の利益と繁榮とのみを第一義とする所謂民族主義等の普遍性を缺いた主義信條を以て、その戦争戦略の實質内容とするものである限りは、かゝる戦争を以て敵の全國民を擧げて味方たらしめ、各民族・萬民を擧つて納得自服せしめんことは、縦しそれを願ふとも單なる夢想に終るのが當然である。

對手をして納得せしめ、自ら降つて我が味方たらしめ得ざる以上、その戦争は依然從來の西歐流・過去のクラウゼウッツ的なる暴力(Coercion)を以て對手の暴力を壓倒するといふ舊戦争の

形態を一步も超脱し得るものではない。暴力と暴力との角逐に過ぎぬ闘争は永久に敵を解消せしめ得るものでもなく、況んやそれを變じて歸依一體の味方たらしめ得るものでもない。それは既に第二節に分析考察せるが如く極めて當然のことである。

茲に於てか我々は識る。かの無産階級主義を信奉するマルクス主義者達が、東洋流・日本的なる戦争形態、戦法の形式の望ましき姿に憧れて、かゝる形態、形式のみを模倣して自己の戦争に適用せんとしつゝあるも、反面その戦争の内容が一貫して無産階級主義といふ普遍性なき偏頗のものである限りは、彼等は所詮「鶴の水に潛る姿のみに憧れて、自身の素質を顧みざる鳥が、鶴を真似て水に潛らんとする失態」を演ずると同然であると。

彼等にして若し日本的戦争形態を自己の戦争にも實現せんと望むなら、彼等は宜しく無産階級主義、随つてマルクス・レーニン主義を捨て、古今東西に普遍する道——日本精神——に隨順すべきであり、又若し後者を欲せざるならば、彼等は戦争の舊形態に甘んじて「敵は依然として永遠に敵」「勝利は依然として泡沫の如く永續性なき勝利」を以て満足すべきであらう。

我々は更に一步を進めて、無産階級主義・マルクス・レーニン主義の根本的誤謬に想到する時、特にこの感を深うする。この主義は一見無産者の利益と繁榮との爲に闘ふが如くにして、

而も實はそれと相反する結果にしか到達し得ない。無産階級、被壓迫民族丈には妥當するが如くにして、而も眞實にはそれにさへ妥當するものではない。

彼等の根本的信條たる唯物史觀は西歐中世紀を通じて彼地を支配した唯心史觀に對する單なる反動にして、それは後者と共に極端なる一面觀である。随つてそれは人類のためには中世紀の暗黒と同様なる墮落の不幸を齎らすところの結果しか生むものではない。また彼等の革命理論を指導するかの唯物辨證法は畢竟するに社會の死滅的變轉をもたらすものたる以外の何ものでもない。蓋し、互に矛盾對立する二つの階級の暴力闘争は、畢竟、更に新たなる矛盾を生起して再び暴力の闘争を生む。革命に次いで起るものは必然に反革命の脅威であり、かくして暴力の革命は更に新たなる暴力革命を生み、それは再び第三次、第四次の暴力革命を呼ぶ。かくして永遠に止むことなき流血の革命の打ち續くべきことは、彼等の永い歴史に鑑るも、又現在のソ聯邦に於て不斷に反革命の諸事實がそのスターリン政權の脅威的である嚴たる事實によつて觀察するも、充分に立證して餘すところなきものである。

之に反して、對等の地位の社會的對立をその中に含みつゝも、更にその上に超然たるところの永遠の存在者を戴き、この超然たる存在者が時々刻々に生起する社會的對立を不斷に克服して行く所のみ、永遠の發展があり、かゝる發展の辨證法こそ我が一貫する國體の事實が最も明快に立證してゐる辨證法である。兎もあれ無産階級主義の革命理論、階級闘争の實踐は、庶民をして永遠に流血の革命と反革命との連續に苦しましむる理論實踐であり、畢竟死滅への方向の辨證法である。

尙之に關しては更に敷衍し立論すべき多くのものを残すのであるが、茲では只以上の大綱のみを掲げ、以て無産階級主義を内容とする限り、決してその戰爭形態、戰略形式は彼等の庶幾するが如き東洋流のものたるを得ざることを示唆するに止め度い。

第四編 世界的歸趨たる日本戰爭論

## 第一章 戦争に就いての具體論、抽象論と

### 其の批判

#### 第一節 戦争に就いての抽象論と具體論

##### 一 抽象的戦争論より具體的戦争論へ

政治も經濟も社會、思想其他如何なる文化も、苟くも時の流れや地域の相異に伴ふ制約の外に超然たり得るものはない。何れも時代と共に變遷し、民族や社會の異なるに隨つて、夫々に特異の内容と形式とをもつものである。このことは、同じく文化の一部面であり、或はその一現象である戦争に就いても同様に語られねばならない。

即ち、封建時代、資本主義時代、或は何々時代等と名付けらるるが如くに、時代が逐次に一から他へ推移し變遷してゆくことは、そこに發生する戦争にもそれに相應する變遷推移を必然ならしむるものである。換言すれば、各々の時代はそれに相應する特殊独自の戦争をもつものである。



又、フッシズムの社會、マルキシズムの社會等異なる社會には、夫々異なる内容と形式とをもつ各異の戦争があり、日本民族の戦ふべき戦争とソ聯邦の戦はんとする戦争との間にも、混同すべからざる差異のあることも看過してはならぬ。

要するに戦争にも各々異なる類別があり、更に數多の種別もあり得るものである。ただ、人々が、戦争なるものを時代と地域を超越して理念する時にのみ、戦争のかゝる類別、種別が抹殺せられて、そこに抽象的な單に「戦争」と呼ばれる一般的概念が生れる。之に反して、人々が若しかゝる抽象架空の一般的概念から離れて、現實的・具體的に實在する戦争へと想ひを馳せる時——換言すれば、時代と地域とを超越する一般的概念の代りに、幾分にもこの兩者を加味して、一步實在的なものへと近づく時——そこには劃然として夫々の特殊性、差別相が浮んでくる。故に、戦争を類別種別して、その間の特殊性を明確に認識把握することこそ、單なる架空の理論から眞實に實在するものに即する理論への接近であり、謂はば觀念的遊戯から實在的なる所論への前進と稱さねばならぬ。

のみならず、更に數歩を進めて、より、具體的なもの、より、實在的なものへと想到する時は如何？ 所謂同一種類の戦争——例へば、ソ聯の將來戦、或はフッシズム社會の現代戦争等

等と呼ばれるが如き、時代を同うし、同種の社會に戦はれる同一種類の戦争——の夫々と雖、果して一律に論断せられ、一樣にその見解を定め得べきものであらうか？ 嚴密に觀察すれば、現實にある個々の戦争はそれ自身に獨自性をもつものである。戦争の個々一々は、その間に夫々に何等かの差異があるものであり、各個は所謂獨自の個性をもつものである。甲の戦争をして甲たらしむるもの、それをして乙其他と區別せしめて甲を甲たらしむるものは、その獨自性であり、個性であり、各個の間に嚴として存する特殊性に他ならぬ。即ち、一々は千態萬様、個々は千差萬別であつて、何れの二箇の戦争を採つて觀るも、その意義・内容から謂ふも、或はその形態・形式から論ずるも何等かの差異の存在しないものとはあり得ないものである。この戦争の各個の間に存する差別相を識る限りは、それを無視して一律に論ずる如何なる戦争理論も、又それを度外視して一樣なる見解を與へんとする如何なる戦争觀も、悉く皆現實から遊離したものと認めざるを得ない。

然るに現代戦と云ひ、將來戦と云ふ。又、ソ聯邦の戦争と呼び、フッシズム戦争と呼ぶ。個々の戦争を區分して、その間に、或は種を立て或は類に別つて觀念する。凡そこれらのことは如何なる意味をもつであらう？ フッシズム戦争と呼ばれるものの中には、苟くもフッシズ

ム社會に於て戰はるゝ凡ての戰爭を含んで居るのであるが、只この戰爭を抽象的に把握する限りは、その戰爭の凡ての個別差は含まれてはゐない。その社會の戰爭の個々の凡てに共通なるものを抽象して理念せられたもの、千差萬別なる個々の個性を捨象して理念せられたものが所謂フュシズム戰爭なるもの、抽象的なる概念の内容である。其他の類別種別に就いても同様である。然るに、凡そ具體的なるもの、實在的なるものは、かゝる共通性の一面をもつのみではなく、それと共に更に獨自性、特異性の他の一面をも併せもつものである。斯の如く、共通相と特異相との兩面を併せもつ全體のみが、具體的・實在的なるものの實相である。故にかゝる全體を把握確認するときのみ、實在的なる所論が生れ、正しく事實に即する所見が導かれ得る。換言すれば現實を指導するために役立つ、正しき指導法則は、よく一面觀を去つて、上述の如くに全體的に——更に言へば事象の共通性と特殊性とを綜合的に——把握確認するときのみ發見せらるゝものである。

果して然らば、種を立て、類を別ち、それを對象として定める戰爭の所見所論も、それを一律にして矛盾なき理論で論じやうとする限りは、それは現實から觀れば依然として一面觀、部分的論議であり、事實から何程か遊離したる觀察・理論と謂はねばならぬ。即ち、茲に於てか

正しき戰爭觀、戰爭論は戰爭の各個を對象としてのみ立てらるゝと謂ふ一つの見解が生まれるであらう。只茲に看過すべからざることは、フュシズム戰爭、ソ聯の將來戰爭等といふ如く戰爭に就いてある種を對象として論議することはたとへそれを抽象的に論ずるとしても、より上級の概念、若しくは最上級の概念たる「戰爭一般」を對象として抽象的一律的に論ずるものに比して、現實に實在する戰爭により、近い論議であるといふこと又は認め得るのである。

以上の見地に立つ限り、——(尤もこの見地に就いても更に嚴密なる批判は後にゆづるのであるが、一應の意味に於てこの論議を進むれば)——次の結論が生れるであらう。即ち、戰爭に就いての正しき見解・理論を立てんが爲には、單に「戰爭一般」を對象とするに止まらず、更に戰爭の各個を類別、種別した夫々をも對象とすべきであり、尙一層嚴密には戰爭の各個もつ特異性をも併せ考察すべきである。かゝる考へ方の傾向に於て、戰爭に就いての見解を決し、戰爭の理論を組織せんとするものが、茲に具體論的戰爭觀と名付けやうとするものである。而して、それは西歐從來の戰爭論・戰爭學、戰爭觀が専ら抽象的なる「戰爭一般」を對象としてのみ論議せんとする強い傾向を否定するものである。

## 二 所謂具體論的戰爭論と唯名論的戰爭論との批判

この具體論的戰爭論は、西歐近世の多くの考へ方が、専ら極端に抽象的なる概念を對象としてのみ事象を考察し、又、かゝる方法を探る學（概念學と云ふべきか）のみが眞の學問たるかの如く考へられ易い傾向の虚を衝いて、力強い新たなる第一歩を踏み出したものである。而して、凡そ現實に在るところのものは、抽象せられたもの・一面的なものではなく、具體的なるもの・全體的なものであり、換言すれば、實在するものは、他と共通する一面をもつと共に、更にそれ獨自なる他面をも併有するものであることに想到する時、確かにこの考へ方は從來のものに比較して、人類思惟の一大進歩と謂ふべきであらう。而も、このことは單に戰爭に就いての理論や學問に限つたものではない。それは科學の全般に亘る問題である。嚮にマルキシズムの陣營から科學の階級性が主張せられ、從來の抽象的一般的なる科學——形式論理の意味に於ける普遍安當性を求める既往の科學・哲學——を強く否定し拒否して、プロレタリアートはたゞ自己の階級のみを妥當するプロレタリア科學を持つべきであり、既往のものは一切ブルジョア階級にのみ妥當するブルジョア科學であると叫ばれたのも、畢竟するに抽象的一般の空虚なる觀方・考

へ方から離れて、更に具體的・現實的なる理論・見解を確立しやうとする努力の顯れと謂ふべきである。更に今また、フランスやナチスの陣營並にその亞流から科學の國民性・民族性が主張せられ、一々の國民生活や民族生活にあつては、それ／＼に成立する國民科學・民族科學のみがその生活を適切に指導すると叫ばれるのも、大局的に觀れば、これと異なるものではない。兩者はたゞ階級と國民乃至民族との何れをより基礎的なる社會存在と觀るかの點に於てのみ差異があるのであつて、一般を排して特殊に眞理を見出し、抽象的なるものよりも具體的のものにより現實性を認め、それに即してこそ始めてより妥當なる見解・理論を發見し得るとなすところは、全くその軌を一とすると謂ふべきであらう。

戰爭を、努めて、その個々に就いて具體的・全體的に觀察しやうとするこの具體論的戰爭論は、右の如く、西歐近世の思想からいへば確かに新しい傾向であり、進歩的な觀方・考へ方たるを失はない。だが、之を東洋的考へ方・觀方或は日本本來のものに比較して、果して新しく進歩的のものと謂ひ得るであらうか？ 抑々我々の本來の考へ方・觀方は多くの人も認める如く、「あるところのものを、素直に、あるが儘に直觀把握」せんとするところに、その特色があ

つた。あるが儘とは、分析せず、抽象せず、あるが儘の全體であり、あるが儘の具體である。然らば具體論的戰爭觀なるものは、西歐の近世流のものに對してこそ新しいものであり、人類思惟の一大進歩とも稱し得れ、我々に於ては毫も然らざるものであると謂ひ得やう。寧ろ、彼等が我々の方向に一步一步接近しつゝあるに過ぎないのである。この一步一步の接近に過ぎぬといふことは、更に次の觀察に進むとき一層明瞭となるのであらう。

以上の所論に於て、假に、具體的なるもの・實在的なるものは、一般ではなく個々であり、一々の戰爭のみが具體的・實在的のものとして論じ來た。しかし、更に嚴密周到に斯くいふ一々の戰爭に就いて觀察する時は如何であらうか？

日露戰爭、歐洲戰爭等と呼ぶ個々一々の戰爭は、それぞれ、それ自身不斷に變化しつゝあるものであり、所謂流動轉變しつゝあるものである。その形式・形態に於ても、又その實質・内容に於ても、一瞬一刻と雖、同じ姿に停滯するものではない。換言すれば、或る一瞬一刻の姿は、他の凡ての一瞬一刻の姿と異なるものであり、夫々の瞬間は常にその獨自のみがもつ特異性を有する。斯く刻々に千變萬化する種々相の凡てをも、その中に包含し盡して居るものにして始めて一つの戰爭の全體であり・具體である。現實に在る所のものの實相は誠に斯くの如きものである。

然らば一瞬一刻毎に變轉するかゝる實相は人智を以て、能く在るが儘に把握することが出来るであらうか？ 一瞬の中にも、それと異なる次の瞬間の契機が動いて居り、嚴密に謂へば、所謂「そのものであり同時にそのものではない」といふ玄妙なるものゝ連続である。凡ては只流動し變轉するものであつて、随つて然々斯くくと固定して認識し把握し得る以上のもの——それが一つの戰爭の眞實相に他ならない。それを老子的に表現すれば、「玄」であり、「玄之又玄」<sup>(註)</sup>、「衆妙の門」なるものである。

註 「老子」の上篇第一章に曰く。

道可道、非常道、名可名、非常名。

無名、天地之始、有名、萬物之母。

故常無欲、以觀其妙、常有欲、以觀其徵。

此兩者同、出而異、名、同謂玄、玄之又玄、衆妙之門。

この意味に於て實在するものゝ眞實相は、本來理智を以て把握し得ざるものであり、又言語を以て表現し得る以上のものである。我々の祖先が古くから「言擧げせぬ」ことを以て至上の態

度として尙び來つたことも、又更に我等の先哲が「天地の始は無名也」と斷言したことも、共に實在のかゝる眞實相を看破してのことと理解し得るであらう。試みに人類の理念の世界に言擧げせられ組織せらるゝ凡ての理論は、現實の世界の如何なる實在をもそのままに表現するものではなく、何程かはそれから遊離せざるを得ぬものである。又、天地宇宙間の森羅萬象の悉くは、何れも皆、人が一定の名を與へるのに適はしく、その眞實相が固定して流轉せぬものではなく、萬象は實は本來固定の名を與ふることの出來ぬものである。

而も、「言擧げせぬものを、言擧げざる」と稱せられ、又「有名は萬物の母」とも喝破せられた。

凡そ、萬物に名が與へられず、凡てが言擧げせられず、唯あるが儘に放置せられて居るときは、人類の理念の世界は混沌であり、暗黒である。人の理念は光明を欲し、秩序を懇求する。混沌暗黒を去つて、光明秩序が與へらるゝ所にのみ、燦然たる文化が創造せられてゆく。そこに名が必要となり、言擧げ・理論的體系の組織の必要が生れてくる。各種の抽象的概念を定立することも必要となつて來るのである。即ち「有名は萬物の母」であり、概念の定立も言擧げや理論の組織も、共に人類の文化創造の母である譯である。

我々が斯かる見地に立つて、斯くの如く考へ及ぶときは、そこには當然にも次の如き見解が生まれ出するであらう。即ち、如何なる「名」も、何れの「概念」も、又凡ての「言擧げ」、悉くの「理論」も、共に皆之れ假の便宜のために設けられたるものであり、眞實に實在するものからは何程か遊離したものであることを。天地間の萬物は本來無名であり、人々の概念や理論は眞實には架空のものであることを。

即ち、この見地に於ては、日露戦争といふ名、歐洲戦争といふ名辭、それらは何れも一つの戦争の全體を通じて共通するもの——それを通じて不變なるある一面——を捉へて、それに與へられたるものであり、又、フロンズム戦争、日本の戦争等と呼び、更に帝國主義戦争、或は活人の戦争等と謂ふ、それ／＼の種概念、類概念は何れも皆それらの各々の全體・具體を指すのではなく、各々の中に共通するものを抽象して、假の便宜のために、作爲せられたものに過ぎない。

その時の便宜のために、分析抽象の方法を用ひて各異の種概念を立て、類概念を定め、場合に依つては更に一般概念をも設想し、以て種々の論議をなす。このことは、それが實在の凡てではなく、單なる一面觀であり、従つて眞實の事實からは、程度の差こそあれ、何程かは遊離

して居るものであり、何程かは異なるものであることを忘れぬ限りは、許さるべきことであり、又人類の思惟に秩序あらしむるためには、蓋し止むを得ぬことでもあらう。<sup>(註)</sup>

註 本書第二編第二章第三節一六九頁以下参照

こゝまで考へ來るとき、我々は一應想を轉じて普遍と特殊との問題、名と實との問題に就いて、更に一步を進めての考察を試みる必要に迫られる。それは所謂「唯名論」・「名目論」(Nominalismus) と實念論・實在論 (Realismus) との問題に關係するものであつて、この二種の立場の對立は中世スコラ哲學以來の問題である。而して、我々がこゝまで論議を進めて來た立場なるものは、そのみを以てすれば、全く唯名論そのまゝの見地から脱け出ぬものと觀られる。

抑々唯名論は「個物」のみを實在とし、「普遍」或は「類」なるものは個物より抽象せられた共通の名であり、單に「物の後にある名」nomina post res「聲として發する風」fatus vocis であるとして、その實在性を拒否する。而して我々の今までの論議に於ては、先づ同様に、具體的なものは個々の戦争であり、一々の戦争のみが實在するものと、假に定めて考察の歩を進めて來たもので、従つてフシズム戦争とか、現代の戦争・將來の戦争などいふ「類」も、更にまた

「普遍」としての「戦争一般」も共に架空なるものであり、悉く實際には存在しないものであるといふ立場を以て論じ來つたのである。これは一種の唯名論に外ならない。けれども一應は斯く論じ來つたものゝ、今、更に深く考へれば、共通なる一般性普遍性はそのまゝにては實在せぬとはいへ、それは個々から抽象せらるゝものであり、その限りは、個々の構成要素として個々の内にあるものに外ならぬ。換言すれば、普遍は「個物の内」、in rebus に在るものであり、従つてそのまゝには實在しないが、個々一々の一面としてその内に實在すると謂ふことも出来る。この意味に於て、名も概念も共に個物の内にその「實體的形相」(forma substantialis)として内在する恒常なるものに即するものであつて、従つて假の便宜以上の眞實なるものと謂はねばならぬ。茲に於て、アウレオルスやオッカム流の唯名論が否定せられて、アリストテレス風なるトウマス・アクイナスの見地に到達する。だが、更に之を批判すれば、かゝる普遍・かゝる類——戦争一般——類別種別せられた戦争——なるものは實在するとはいへ、その全體ではなく、具體なものでもなく、飽くまで一面的なるもの抽象的なるものに他ならぬ。それは飽くまで忘れてはならぬことである。

## 第二節 日本戦争論の立場と方法

### 一 具體的全體者——日本戦争論の立場

然らば、凡そ、普遍なるもの・類なるもので、一面的ではなくして具體的・全體的に實在するものはないであらうか。求めらるべき眞の普遍、究明せらるべき類の實相は、一面的・抽象的なものよりも全體的・具體的なものでなければならぬ。

斯くの如き意味の具體的普遍・具體的類とは如何。それはその内に個々の特異性・刻々に變化しゆく特殊をも含んだものである。例へば現代の戦争として過去の時代の戦争と類別せらるゝこの戦争の「類」の中には、現代と呼ばれる或る繼續せる期間内に、ソ聯も自由主義國家も所謂全體主義陣營もその他東西に普ねく存在する國家團體などの行ふ戦争の悉くを含んだものであり、この點から考察すれば、この類の内には互に矛盾し對立し合ふ多種多様なもの、千變萬化する悉くのものを含む。それが類の具體なるものであり、類なるものゝ眞實相である。普遍に就いても同様であつて、斯くの如き矛盾對立をその中に含みつゝも尙一體なるものとして成立してゐるものが、所謂具體的普遍者である。此の意味に於ける普遍・この意味に於て把握せ

らるゝ類や個別が、眞實なる實在であり、それ以外には眞の實在はない。而して斯くの如き意味の普遍・類・個別を概念し、それらに名を與ふるときは、これ名實相即・事理一如の眞實在に他ならぬものとなるのである。更に一例を以て理解を補へば、「花」なる概念を定立するに當つて、若し梅の花・櫻の花・杉の花等々の何れにも共通する屬性を抽象して、そこに「花」なるものを概念し、その内容を究めんとすれば、それは抽象的普遍者の究明であり、従つて唯名論の立場からその空漠性も攻撃せらるゝであらうし、少くともアケイナス流の内在的實在論以上に脱け出ることとは出来ぬであらう。これに反して「花」と呼んでその中に、悉くの花を含ませしめ、隨つて櫻花の如く美しきものも、また杉の花の如く然らざるものも、或は馥郁として香ばしきものも、胸をつくが如く香ばしからざる香をもつ花も、蕾から花と呼ばれ得る状態にまで生育したもののから、瞬時の後には果實とさへ呼ばるべき花ならざるものへ移るといふ花までも、それらの悉くを、而もそのまゝに、包括する「花」——この「花」なる概念——は抽象的なものではなく具體的なものである。抽象的普遍者ではなく具體的普遍者と呼ぶべきものである。かゝる具體的普遍としての「花」は、従つて美と醜、有用と無用、芳香と惡臭等々價値の矛盾をそのまゝにその中に含むものであり、また、所謂赤なるもあり、白なるもあり、各種各様千

差萬別なる色をもち、その姿態もまた一樣一律に論じ去られない多種多様なものである。かゝる「花」、かゝる普遍は眞に實在するものであり、それは既往の唯名論的立場と所謂實念論的立場とを止揚したものに外ならぬ。唯名論・實念論の何れでもなく、而も何れをも満足せしむるものに外ならない。

殊に我々は、所謂個物なるもの・個別個體なるもの、更に眞實なる實相を適確に把握しなければならぬ。感覺的にはそのみが實在するかの如く觀られ易い個々一々なるものは、實はそれ獨自に孤立して存在するものではなく、必ず他者との不可分なる聯關に於てのみ實在するものである。例へば、滿洲事變といひ、支那事變など、呼ぶところの個々一々なる戦争は、他者から全く分離孤立し、それ獨自にあるものではなく、それらをも含む更に大いなる世界變革戦争といふ時間的に聯關する全體に於ける個々としてのそれであり、またエチオピア事件、獨逸合邦、チエッコ事變等々と地域的に一聯の關係を保ち、不可分なる聯關を有つ謂はゞ有機的一體なるものゝ中に存在するものである。斯くの如く、全體との聯關、相互的な他者との不可分なる聯關——換言すればそれ自身と全體とそれ自身と他者との聯關を認めてのみ、その意義も、本質も、その姿相も、正しく理解し認識することが出来るのである。前にも觸れたことではあ

るが、個人々々と考へらるゝ所謂個我なるものも、全くこれと同様であつて、生命の眞實を反省すれば、畢竟、祖先——我——子孫を連ぬる大我の中に於て存在する我が個々の我であることを識る。随つて、眞實なる我とは、個我即ち、大我に對立する、小我でもなく、さらばとて小我・個我に對立する大我の我でもない。斯かる大我小我は共に抽象的なものである、従つて全き意味に於ける眞實なる存在者ではない。眞實なる我——實在する我——とは大我と小我との一體一如の我であり、これら兩者をその中に含む我である。而して斯かる眞の我を識る限りは、個我の中に大我が見出され、また大我の中に小我が生きたる眞實をも理解出来るであらう。古武士が「死を見ること歸するが如し」といつたのは、この意味に於て正しく理解せられ、寧ろそれは「歸するが如し」にはあらずして「歸することそのものであり、更に生きたること」である。個我は、その正しき死所を得ることに依つて、個我それ自身の生命の根源を彌、強く生かすことが出来、個我それ自身の生命の延長たる子々孫々の生命を益、彌榮へしめ、生き足らしめる。換言すば、個我と不可分一體なる眞の生命は個我の正しき死によつて眞に生あらしめられ、茲に眞の我が生くるを得しめらるゝのである。重ねて謂へば、外國流の考への如く「死して竹帛の上に生き」「生命を犠牲として彼岸に生くる」のではなく、小我の正しき死は、實はそのま



眞の我といふ現實の生命に於て生きることであり、小我の延長・小我と不可分一體なる我そのものゝ生きることには他ならない。我が皇軍の教育令に「欣然トシテ死地ニ赴カシムルモノ是レ軍隊教育ノ精華ナリ」といふ輝ける教へが示されてゐるが、この教へこそは、斯くして、かの古武士の死生觀を超えたる更に眞實なる光りとして我が軍人たちの前に示されるであらう。殊に、祖先——我——子孫を一體とする眞の我の發見は、必然にも家族の我、民族の我の實在をも見出し得しむるもので、この點に鑑みれば、君國の御爲欣然として死地に赴き、七度生れ八世に互つて眞の我を現實に生かしむる吾が大道が、素直に理解出来る筈である。彼岸に生き、竹帛に生きよと教へられれば、大いなる悟道？も必要かも知れぬが、この眞實の我を識る限りは、かくの如き六ツカしい思辨も必要なく、難業苦行の後漸くにして到達する菩提樹下の正覺も要らないであらう。燒野の雉・夜の鶴にも見らるゝが如く、生命の本然なる慾求から教へられずとも發露する「おのづからなる」慾求であり、天地自然の内に具はる道である。自づからなる道なるが故に、いとも守り易く行ひ易い。然るに、たゞさかしらなる人間の小智に拘はり捉はれるとき、人々は眞の「我」を見誤り、眞の生命の慾求を曇らしめ歪曲するに至る。眞の我から抽象せる個我やその生命のみを偏重したり、或は個と對立する全體、小我に對する大我

のみを教説し、爲に却つて守り易き道を守り難くし、行ひ易き道を行ひ難からしむる。おのづからなる慾求として踐み行ひ得るものを、故意に不自然なる要求——生命の本然の慾求と相反する實踐——たるかの如く觀せしむるに至る。「かんながら」「おのづからなる」道は、小智に走らず、苦行も要せず、専ら素直な拘泥ない心境に歸らば、容易に人々の心眼に映るものであり、縦し心眼には映り來らざる迄も、尙生命本然の慾求・天地自然の本性がそれを正しく實踐せしむるものである。

大我・小我の一體なる眞の「我」の發見、全體と個々々との一如なる眞の實在の體認、それは總ては、自他の差別を認めつゝ、而もその間に於ける不可分一體なる關聯を識る自他一如の世界觀をも生む。而して之等は何れも本章に謂ふところの具體的普遍者の體認であり、それを古來我が國に於ては「家」「宇」なるものによつて表現して來た。國家も世界も、會社も官廳も、其他あらゆる社會あらゆる團體も、悉く皆この家の原理、具體的普遍者としての原理によつて組織せられ、運営せらるべきものとするのが、古代に於て「八紘一字」といふ言葉によつて表現せられたものと考へられる。日滿關係はこの八紘一字の理想の現段階に於ける國際社會への眞顯であつて、夙に主張せらるゝが如く、兩者は彼我の差別即ち獨自性・獨立性を認めつゝも、

而も尙不可分一體の關係に結ばれる。一體なる以上は、そこには至上唯一の權威が確立せられて、その權威の下に統一的運営々爲が行はれるものであるが、さらばとてその權威はその成員を克することはあり得ない。蓋し、權威は自己の延長としての個々の成員を認めるものであり、従つて彼我の獨自性を意識しつゝも、尙その獨自性は更に一體なる同一生命に歸結するものであり、それは斷じて窮極までの對立・獨自性ではないからである。同様に、個々の成員は夫々獨自性を保ちつゝも、尙更に高次には、自他一如の眞姿を認めるものであり、反言すれば、自他一如といふも、自他の差別・個性を悉く没却無視する抽象的一體一如ではない。筆者は第一編に於て、具體的全體的生命の實相は、「全體といふものを生かして、その中に色々の變化を行はせ乍ら、而も、その中に變らない秩序といふものを法則として取上げ得る程のものである」と指摘して置いた。其は「家」の原理に貫かるゝ「八絃一字」そのまゝの實相に他ならぬではないか、人類的な、否、宇宙間の森羅萬象にさへ通達する原理と實相、心と姿に他ならぬではないか。(註)

註 第一篇第三章第二節。

之を要するに個々一々も、更にまたそれと對立する全體や普遍や類なども、共に眞の實在ではない。個別を含んで立つ全體——全體の中に於て見る個別、特殊を擔つて存在する普遍——普遍と共にある特殊、これらの、謂はゞ「個別即全體」「特殊即普遍」なるものゝみが眞の實在と云ふことが出来るであらう。

我々の以上の見地は、萬物萬象の共通性、共通要素のみに捉はれて、それを抽象し來つて概念の構成をなすことのみを以て能事終れりとなすが如き、既往の所謂「抽象論」に與するものではない。また、さらばとて、個物、個體の特殊性、差別相のみに執着し、個々一々のみが實在するか如き所謂具體論を是とするものでもない。差し當り個別特殊を正しく認める事に於て、既往の所謂具體論の意圖を生かすものであると共に、窮極に於て、一なるもの、個別・特殊を超えた普遍を認めるところは、實は既往の抽象論をして、眞に其の處を得せしむるものである。重ねて謂へば、我々の此の見方、考へ方は、所謂抽象論・所謂具體論の何れにも與するものでもないが、而も、その各々の目ざすところを眞に其の中に生かすものであり、夫々に當然なる制約を附して何れをもその處を得せしむるのである。唯名論と實念論、所謂個別觀と所謂全體觀、また互に對立する特殊論と普遍論、——これらに就いても同様である。東洋古來の表現

を以て、換言すれば「故に常無以てその妙を觀んと欲し、常有以てその微を觀んと欲す」といふ觀方・考へ方が即ち之である。

## 二 生命的直觀——日本戰爭論の方法

既述の如く、凡そ、人智を以て把握し得るところのものは、凡てのものゝ一面にしか過ぎぬ。分析・抽象・演繹・歸納などの理智的操作に依つて扱ひ得るものは、凡て、一面的・部分的なるもののみであつて、事象の具體的・全體的なるものはかゝる人智を以てしては、扱ひ得る以上のものである。随つて萬象をあるが儘に——全體的・具象的に——把握せんとすれば人々の理智のみでは甚だ不充分である。茲に、理智の外に情と意とを併せたる全精神力を以てする把握が必要となり、更に謂へば靈肉一體の全活動即ち全生命力による直觀的把握が、人々の理智的操作の上に立ち、それを助けるものであることを識らねばならぬ。

元來生命力甚だ旺盛なる人類は、若し何物にも捉はれず、随つて何等の偏倚なき素直なる境地に立てば、よく事象の真相を把握出来るものである。一羽の傳書鳩さへ性と住食等の生命的慾求に據つて、數十里距りたる場所から己の墾の方向を誤らずに直觀する。一匹の蛾と雖、生

命必然の要求から、その幼蟲が風雨を避けて食餌を求むるに最も便宜な場所を直觀し、そこに産卵する。然るに生命力旺盛なる人類は、故意に抽象概念的な智インテリジェンス能エナジーのみに捉れて、本來に有つ鋭利なる直觀力を鈍らせて來た。

この意味に於て、キリスト教神話の中にある物語り「人間アダム、イブが執拗なる誘惑に驅られて、禁斷の智慧の木を果を貪り喰つたが爲に、それ以來遂にエデンの花園から人間苦の娑婆に投げ出された」といふ意味も理解せられ得るのではなからうか？ 之に反して、我が日本民族が古來智慧のみに捉はれず、「あるところのもの、あるが儘に、直觀すること」を尙び來つたのは、蓋し偉大なることと謂はねばなるまい。かく素直に、あるが儘に直觀したところに、始めて「神ながら、おのづからなる道」が正しく把握せられ、又人類が彌榮ふる爲には當然に遵守すべく、而して永遠無窮に不易にして古今東西に施して悖らざる國家生活、世界生活の基本的原理——國體の精神——日本精神——が誤りなく把握體得せられ且それが實現せられ來つたものと確信出来るのである。

之を要するに、「言擧げせぬ」を本旨とし、「無名を天地の始め」と觀、更に「素直にあるが儘を直觀すること」を第一義とした東洋・日本の哲學的態度こそ、新しき歐米の科學哲學に對比

して、更に偉大なる光彩を保つものである。眞の生命的直観はフランス現代の哲人、ベルグソンの發見創唱するものでもなく、又正しき直感的理解はマックス・シェラーや其他現象學派の始めて提唱する所のものでもない。科學的には不可知なる悠久の昔——我が肇國のその始めに於て——既に我々の祖先がそれを以て國家經營の萬世不易なる根本原理を把握したものであり、爾來この態度に依つて我が民族が天壤と共に窮り無く彌榮なる國家社會の經綸を行つて來たものでもある。

西洋哲學をも攝取したる現在、それが兎もすれば獨斷なりと非難せらるゝが如きものに非ずして、更に高次なるものであること、本書の所論より推しても瞭らかであり、茲に附言を要しない程であらう。

以上述べたるものこそ日本戰爭學に於ける考へ方・觀方に他ならぬものと確信する。また此の立場と觀方こそが、同時に、世界戰爭學の眞の考へ方、觀方に他ならぬものと確信する。

### 第三節 各種の戰爭論をして其の處を得しむる 日本戰爭學

されば、以上述べ來つた考へ方・觀方に立つてこそ、又妥當にも次の事が確認せられるのである。即ち、マルキシズムの戰爭論・科學論も、ファシズムやナチスの戰爭論・科學觀も、共に個別・特殊のみを強調して普遍者を見落し、之がために抽象的普遍妥當性のみ捉はれる自由主義のそれとは單なる對立に止まり、それを止揚するの道を知らない。またこれらとは全く對蹠的に、自由主義のそれは、マルキシズムやファシズムに正しき處を與へてそれを自己の中に生かすの力がない。これら三者の對立・同次元に立つ角逐は、以上述べたるが如き東洋的、特に日本的なる大乘的見地・高次の立場に於てのみ、各々がその處を得せしめられて共に正しき眞理の開顯に役立つものとなるであらう。

従來の戰爭論・戰爭觀をその原理的立場の相違に隨つて、便宜・整序すれば、その第一は個人主義（乃至自由主義）の立場に據るもの。その第二は階級主義の立場に據るもの。第三には團體主義（乃至全體主義）の立場に據るもの。最後には、更に高次の立場に立ち、凡ての原理を、その中に正しく統合してあるもの。以上の四つの立場が主なものとして擧げらるゝ。

個人主義の立場をとるものは、個人を以て存在竝に價值上の第一義的なるものと觀、この觀點から個々の戰爭乃至各種の戰爭を評價し意義付けやうとする。隨つて、彼等から觀れば、個

人在つての國家乃至民族であり、個人の完成乃至繁榮といふことのみが、戦争を評價し意義付ける第一義的・窮極的の標準たり得る。換言すれば、縦へ國家や民族を破滅の危機から救出するが如き戦争であつても、もしそれが個人の繁榮や完成に相反すると認めらるゝ以上は、その戦争は彼等に依つて否定せられ、害悪としか断定せられぬものである。個人と階級との関係も同然である。然も、かの功利的個人主義の立場から謂へば、兵器製造業者や金融資本家等といふ一部の利益に出發し、且それを結果するが如き戦争と雖、その一部のは、寧ろその理由によつてこそ該戦争を正常化し、善の戦争と觀て敢て疑はぬ譯である。

次に階級主義の立場に立つものは、既述の如く、階級のみが第一義的なる價值を有するもの、階級こそ現實の他の凡てに優先して存在するもの、と觀るもので、この觀點のみから、個々の戦争、乃至ある種の戦争に就いて評價し、その見解を決めやうとする。

第三の團體主義乃至全體主義の立場をとるものは、第一義的に價值あるもの、凡てに先行して存在するものは只團體のみであり、或は全體のみであると觀、この觀點から凡ての戦争を評價する。而して彼等の所謂團體・全體とは、多くの場合、國家團體・民族全體を意味し、且個人々々から分離對立して觀念せらるゝ團體・全體を指すものである。個人主義に對立する概

念としての團體主義であり、又個人主義・階級主義と對蹠的なる全體主義である。——  
長良のみ  
が親自に  
存在し得るを主張し、或は民族意識こそ個體意識、階級意識に優れし、兩者をその  
中に解明して獨自性を保つものである、等と表現せらるゝが如きはその一例である。即ち、彼等からすれば、團體・全體  
あつて後の個人であり、個人は只團體・全體の目的を實現する道具手段たる以上に何等の價  
値もないものである。

随つてこの立場に立つものは、凡ての戦争を只團體・全體に及ぼす意義効果のみによつて評價する。即ち現實的に謂へば、ある戦争が自國（自己の所屬する民族）の榮光を増し、その繁榮利益を齎らす場合には、單にそれ丈の理由からその戦争は是認せられ、正義の戦争・人道（善）の戦争と讃へられる。

この立場に就いての理解を深めるためには、我々は次のことを想起するの要がある。

第一に、この團體・全體主義は一つの形式主義である。如何なる國家（民族）もその實質内容・素質の如何に拘らず、ただそれは團體・全體なるが故に尊ばれる。極端なる例を採れば慘忍なる革命に依つて成立し、而も再び鬱勃たる反革命の氣運に脅かされつゝあるが如き國家、又一黨一派の偏見強慾の下に呻吟しつゝある如き國家、其他如何に好ましからざる内容の國家に於ても、苟くも團體主義に立つものにとつては、その國家も亦團體として第一義的の價值を

認むべきであるといふこととなる。

若し然らずしてある國家の内容と形態——國體——の尊きが故に、その國家は尊ばれるべく、至上絶對の價値を有すると主張するゝならば、それは團體主義にあらず、所謂國家主義にもあらず、それは只その國家の實質内容——國體——の上に成立する主義であり、その實質内容に即して別に名付けらるべき異なりたる主義に他ならぬ。

第二には、この立場に於ては正義の戦争は畢竟その歸屬する所を失ひて宙にさ迷ふ。のみならず思想戦争が全戦争中有力なる一部面として登場せる最近の時代に於て、この立場のみに據るものは畢竟他の立場からの攻撃に堪へ得られぬであらう。その理由は次の如くである。

既述の如くこの立場は現實的には自己所屬の國體（全體）に第一義的價値を認めるものである。従つて今甲乙兩交戦國に於て、若し甲國民がこの立場をとる場合を設想するに、彼等が自國（民族）の繁榮のためにその戦争を正義の戦争と認むる以上、それと全く同様なる妥當性を、乙國民が自己の戦争を正義と観ることに許さざるを得ず。茲に於てか何れの側に果して正義の存するやは神聖と雖決裁し兼ねるに到るであらう。勝てば神軍、負ければ邪戰、強力のみが正義の位に登り、弱肉強食、強慾非道の強盜をも正義化せざるを得ぬに到ることなきか。

又甲國民がかゝる形式的思想のみに捉はれらるる場合——従つて正義は交戦國の何れの側にも存するといふ結論に到達する以上の思想を持たぬ場合——若し乙國の多少にても實質的思想に發する攻勢を蒙らんか、既に防禦すべき何等の思想戦武器をも持たぬ無防禦の状態に陥る。況んや敵國民に對する攻勢武器をや。

次は最後の「更に高次の立場に立ち、その中に凡ての原理を正しく統合してゐるもの」に就いて述べやう。只併し茲にはその骨子のみに止める。

先づ第一に、この立場に於ては、個人も階級も民族も國家も、更に廣くは世界と雖も、何れも、皆同一統體に基く夫々であり、悉く皆一なる宇宙大生命の多様な顯現に他ならぬと認める。随つて、それ等に存在の先後なく、價値の優劣は付せられぬ。この見地から、この立場に於ては、個人主義と同様に個人の嚴乎たる存在に價値は認める。だが彼等の如くに個人のみが國家や民族等に優先して獨自的に存在し、第一義的に價値付けらるゝものとは認めない。又團體主義の如くに民族や國家の價値實在は認めるが、そのみが他に先つて存在し、他に優れて價値付けらるべきものとも認めない。更に又、階級も存在し得るものとは認める。だが階級のみが個人や國家民族等に優先するものとも認めない。

要するに俗言を借りて表現すれば、國家や民族あつての個人であると共に、個人のある所のみ國家も民族もあると謂ひ得る。國家や民族から分離した獨立の個人、個人に先んじてある國家や全體、個人や民族乃至國家に超越する階級、之等の實在を主張するものは、何れも皆、要するに分離すべからざるものを分離し、對立すべからざるものを強ひて對立せしめて觀念する所謂一面觀であり、又分析抽象の思惟方法の缺陷に捉はれたものに外ならぬ。

國家目的も個人の目的も、共に一に歸し、一から發する。假に國家團體と云ふ一面から觀ればその目的は萬民をして各々其處を得せしむるにあり、又萬民と云ふ他の一面から觀れば彼等はかゝる國家の無窮なる彌榮へを夫々の目的とする。兩者の目的は一に歸し一より出するものに外ならぬ。

第二に此立場は形式のみに泥んで、實質内容を疎んずるものではない。後者を尊び、且それが爲に形式をも輕じない。

即ち右に述べた國家といひ民族といふ意味、或は個人なる意味は、抽象的一般的なるものを指していふのでもなければ、又單に自己の屬するもの、己自身をいふのでもない。それ等の目的が宇宙の大生命の目的に歸一するもの、宇宙大生命に自ら統合して毫も背反することなきものを指す。更に具體的に表現すれば萬有の生成化育に隨せ參するもののみ適用せらるゝ。

従つて所謂、個人、階級、民族、國家の中には右の實質内容を持たぬものも現實に在ることを認める。斯くの如きものは天壤と共に窮りなく彌榮ふるものでもなく、又眞の意味に於て進展を續け得るものでもない。永く存続し得ぬ必然性を持つものたるの意義に於て、それ等は眞の存在とは認められぬ。眞の存在と認めぬ以上、それは眞正なる國家、眞の民族、純正なる個人から除外せらるべく、隨つてこゝの所論に於ける個人、民族、國家等の意味中にはそれ等のものを含ませないのが當然であつたのである。

第一第二を綜合して考ふる時、如何なるものを正義の戦争と認め善の戦争、神武の戦と認めるかは自ら瞭らかであらう。

萬民をして各々其處を得せしむるを目的内容とする國家が、その目的實現の爲に戦ふ戦争は正義の戦争である。その國家目的の實現は、内は萬の民の彌榮へを齎し、外は四海萬民——各民族に各々至當の地位を與へることに他ならぬからである。茲に始めて正しき意味の個人主義も含まれ、妥當なる國家主義(全體主義)も除外せられず、善意の階級解放も統合せられてゐるのを認めらるゝのである。

即ち知る。此の第四の立場こそが前三者何れをも其の謬まれるを正し、歪めるを直くし、而も全き意味に於ける此等をして眞に其の處を得しむる立場であつて、此れこそが古今に通じて謬まらず中外に施して悖らざる底のものなることを。

日本戦争論がまさしく此の第四のものなることは今更附言を要しないであらうが、更に其の内容に至つては本編第四章以下に於て稍詳細に基礎づける心算である。

## 第二章 時代と戦争及び戦争理論

### 第一節 時代の進展と戦争との相關性

凡そ戦争なるものに於ては、その時代の全智を盡し、その社會の全能を傾けて、勝敗が争はれる。交戦する彼我の兩者は、共に相手方の追隨を許さざる創意工夫を繰らして、自己の優勢の獲得に努める。茲に於てか、戦争は回を重ねるに従つてその形態を革め、その質を進化すると共に、他方新たに創意工夫せられたる戦争は、その要求を充さしめんがため、時代・社會の文化・諸制度を更新し、之が飛躍的進歩を遂げしむる。即ち、我々は次の結論を肯定せねばならぬ。

「時代の轉換は戦争の變革を必然ならしむる。また逆に、戦争の進化變革が時代を推進し、その轉換更新を餘儀なからしめるものである」と。

換言すれば、時代も戦争も、その他の宇宙間の森羅萬象と同じく、斷え間なく流轉し刻一刻に進化し續けるものではあるが、たゞ特にこの兩者は、直接にそれぞれの因となり果となりあ



ひ、兩々相俟つて共に他方の推移變革を餘儀なくし、各々の變遷進化を速めてゆく。

茲に於てか、當然にも、新しい時代は新しい戦争を生む。また、この新しい戦争が更に時代の變革を迫り、より、新たなる時代の生誕を促す。それらは、一部の人々の懸命必死の阻止妨害を排し除け、既往の勢力が支へる凡ゆる抵抗を突き破つて、歴史的必然の勢を以て進みゆき遷り變つてゆく。茲に謂ふ歴史的必然とは人爲を超えたる進展を指す。所謂自然必然の如くに、差し當り先づ人々の意識や意慾に係はりなく動くと考えられるものではないが、さらばとて人爲を以てそれを押し滞め、人力を以てその方向を換へ、或はそれをもとの状態にまで復歸せしめやうと圖つても所詮は徒勞に終るといふ如きものでもなく、人爲を含み乍らも更にそれを超えたる時の勢を稱して歴史的必然といふのである。政治・經濟・思想・學術など萬般の事象に亘つて、時代は不斷に進展し變革し續ける。時によつてその速度に緩急の差こそあれ、又その處・その國の異なるに隨つて根本的になると、皮相的になると、本質的になると、現象的になると多大の相違があるとは云へ、何れにしてもこれらの進化・變革は正に歴史の必然である。かるが故にこそまた、戦争は人々の意識する与否とを問はず、欲すると欲せざるとに拘らず、その本質・形態・戰略・戰術・兵制・兵學の全般に亘つて不斷なる變遷進化を餘儀なからしめられると共に、

他面亦戦争のこの變遷進化が、更に時代の政・經・文物・思想等を更新し、その變革を必然ならしむる。

まさしくこの時代は變革期と呼ばれ、革新は不可避なりと叫ばるゝのみならず、現に進行中の支那事變、當面しつゝある世界戦争が、逆に又これを具現せずしてはやまぬであらう。若し然りとすれば、中世紀を變革改新して近代へと推し進めし、かのルネッサンス期に於ける時代社會と其の戦争、戦争論との關係の反省を試みることは、極めて豊かなる示唆を得られるであらう。この意味に於て次には以上の所説の一例を此の期に就て見る事にしやう。

## 第二節 ルネッサンス期の社會的事情と伊、佛、普の 軍事・戦争論

かの教權萬能・君主專制などの言葉によつて特徴づけられてゐる中世紀なるものは、何時までもは續かなかつた。教會や僧侶や封建諸侯たちの畢生必死の現状維持的努力にも拘はらず、時の勢が人々の知性を揺り醒まし、自由への叫びに拍車を掛け、物への憧憬に市民を追ひ立てた。歴史の必然が、かのルネッサンスを展開し、それを推し進めていつたのである。勿論その

進展の過程に於て幾多の紆餘曲折はあつた。換言すれば、文藝復興・時代轉換といふこの大浪の内には、數知れぬ千波萬波の小波（さざなみ）が介在した。凡そ、歴史の進展する方向は、いつも直線ではなく電光形（ヒョウゲイ）の線である。否寧ろより正確に謂へば、それはかのユークリッド幾何學に於けるが如き線を想起すべきではなく、多種多様な無数の方向を含みつゝも尙一定の方向に流れゆく大河の流れにも似たやうなものである。これがため、その時の所謂現狀維持勢力が、たゞ表面の一時的なる逆流のみを見て、恰も過ぎ去つた時代・社會の復活なるかの如く安堵し、或はまたそれとは全く對蹠的に、謂はゞ時の革新勢力とも呼ぶべき一群の人々が、動きつゝある時代の底流を見落して、時に悲憤慷慨に驅られ、或は愁恨落膽の極に沈んだことも無いではない。けれども、時代の大流は斯かる悲喜とりどりなる萬感をその上に載せ、無数の方向に岐れる人々の努力をその内に統合しつゝ、一瞬一刻も休むことなく新しい世紀へ！新しい社會へ！と、その國を導き、その市民を誘つていつた。尙詳しくは歴史に就て見られたい。

#### 一 伊太利の事情とマキアヴェリ（マキアヴェリ）の戰爭論

斯くの如きルネッサンスの進展——時代の變遷は、必然に戰爭を變革せしめずにはおかなか

つた。先づその烽火はイタリーに於て擧げられた。ニコロ・マキアヴェリ（Nicolo Machiavelli, 1469—1527）の軍制論（註1）戰爭術（註2）（Art of war, 1521）がこれである。彼は中世紀封建國家・封建諸侯の軍制が専ら傭兵乃至は外國よりの援兵に期待してゐるのを逸早く駁論して、國民皆兵の徵兵制を採用すべきを眞先に主張した。彼は曰ふ。

「君主が國防に供すべき軍隊には、國民軍・傭兵・外國の援兵或は混成軍の三つがある。傭兵と外國の援兵は、不利にして危險である。傭兵を以て自己の政府を保持せんとする君主は極めて不安である。何となれば傭兵は統一を缺き野心多く訓練なく不信實であつて、同僚の間には大膽ではあるが敵に對しては臆病で、神を畏れず人を尊敬しない。傭兵は戰時に於ては君主を見棄てる。これ彼等が戰場に出るのは、忠愛の爲めでもなければ、名譽のためでもなくして、たゞ僅少の給料を望むが故である。」（註3）

「古來の歴史を見るに、自己の軍隊を有する國家及び君主は常に成功するが、傭兵は常に害毒の外何ものをも廣らさない。自己の脚を以て立ち、自己の武勇によつて國を支持する尙武の國は容易に國を奪はることなく、且つその君主は傭兵に信頼する國のやうには容易くその司令官に壓服せられない。古代のスパルタとローマは多年自己の軍隊と武器とによつてそ

の自由を保持したのである。<sup>(註四)</sup>

「君主は外國の援兵を使用してはならない。外國の援兵は傭兵よりも危険で、君主は直ちに滅亡せしめらるゝのである。何となれば外國の援兵は常に一致して一團となり、外國人をその指揮官に仰いでゐるからである。これに反して、傭兵は一團を爲さず、給料を得んが爲に數ヶ國より集つて來たものであるから、戰勝後彼等が君主に害を與ふる迄には、多大の時と機會とを要するのである。」<sup>(註五)</sup>

「約言すれば、傭兵の懼るべきはその怯懦と怠慢であり、外國の援兵の危険なるはその勇氣と活動である。故に賢明なる君主は決して斯る軍隊を用ひずして自己の軍隊に信頼する。彼は他人の力を藉りて勝つよりも寧ろ自己の力によつて敗北するの道を選ぶであらう。」<sup>(註六)</sup>

従つて「君主の考慮すべきは、戦術と訓練と軍紀とである。何となれば、それは君主の本職であつて、世襲の君主をしてその地位を保持せしめるのも、一私人をして君主の位に上らしむるのも、それに因るのである。」<sup>(註七)</sup>

以上によつて理解せらるゝが如く、イタリアをその先鋒として捲き起つた文藝復興といふ時代の大浪は、先づイタリアの人・マキアヴェリを揺り覺まして、封建主義軍制を批判せしめ、

近代國民軍の思想とその兵學・戰爭理念の生育を齎らさしめたのである。その中には、統帥權獨立に關する後世に於ける獨逸流意義づけの萌芽的端緒さへ見出せるのであつて、誠に驚嘆に價するものと謂はねばなるまい。

だが惜むべし！ 斯くの如く先覺的なるマキアヴェリの兵學・戰爭思想も、實はイタリアに於ては直ちにその成果を現實に結ぶことは出来なかつた。それを結ばしむる地盤が整つてゐなかつたからである。現實に於ける時代社會の實際が、それを地についたものとして生育せしめ實現せしめ得るだけの革新を遂げてゐなかつたのである。その頃この國の内情は、エネチア・ミラノ・フィレンツェ・法王領・ナポリなどの對立があり、互に權謀を以て其の内に闘ぎ、剩へ極度に人心の腐敗するあり、それが爲、列國に先んじた文藝分野のルネッサンスも、それを社會政治などの實際部面にまで波及せしめ得なかつた。凡そ如何ほど進歩せる軍制の理論も戰略・戰術・戰爭論の主張も、それを現實に生ひ立たし得るだけの政治的・經濟的・事實の基礎地盤なしには、悉くが單なる理論、徒らなる主張として止まる以上にその實現性は望まれない。重ねて言へば、輝かしい勝利を得しむるほどの劃期的なる軍制論・兵學・戰爭論も、その實際を擔つて立つ社會・經濟・政治・教育・科學など諸々の現實が同様に劃期的なる革新を經るに非ずんば、結

局その實力を發揮し得るの餘地はないものである。要するに、新しい戦争は新しい時代社會の出現に伴つてのみ、現實に颯々の聲を擧げ得るものである。以上に述べたイタリアの史實は、このことを裏から立證してゐるものに外ならない。

註一 マキアヴェッリの軍制論に就いて更に詳細なる研究を遂げられんとする熱心なる讀者は左に掲ぐる邦譯書に先づ一ト通りの目を通されんことをお薦めする。

(イ) マキアヴェッリ著・吉田彌邦・松宮春一郎譯「君主經國策」(興亡史論刊行會發行)。

(ロ) 世界大思想全集・マキアヴェッリ「君主論」——就中四四頁——五三頁(春秋社發行)。

(ハ) フレデリック大王著マキアヴェッリの「君主經國策批判」(邦譯・興亡史論刊行會發行)。

(ニ) 伊太利バスタアレリイ・グルラリ著「マキアヴェッリと君主經國策」(同右發行)。

(ホ) 「マキアヴェッリ論」(マキアヴェッリ傳)(兩者共、興亡史論)。

註二 英譯(Cart of War)——邦譯、マキアヴェッリ著・廣田直三郎譯「兵法論」。

此の書は、マキアヴェッリがイタリア國內は勿論、隣邦チロルよりスイスの國境内に入り、戦法を探り、地形を案じ、古戰場を形ひ、古城塞を研究し、苦心慘愴やうやく立案の編結を得、精勵と苦心と材幹とにより完成したと稱せらるゝものである。

註三 興亡史論——マキアヴェッリ「君主經國策」六九——七〇頁。

註四 同右 七一——七二頁。

註五 同右

七九——八〇頁。

註六 同右

八〇頁。

註七 同右

八四頁。

## 二 フランスの事情とナポレオンの新らしき戦争

この事情は、フランスに於ては全く逆であつた。結論から先に謂へば、此の國に於ては、時代社會の革新が必然的に劃期的なる新軍制を生誕せしめ、これがまた更に必然的に新しい戦術・戰略・統帥・戦争指導の生育發展を餘儀なからしめ、以て隣邦を苦もなく席捲侵略し得るの可能性を附與したのである。

フランスにあつては、イタリアに於けるマキアヴェッリの如く新時代に即する戦争論・軍制論を先見したものではなかつた。ところが此の國に於て始めて大規模なる國民皆兵の強制徴兵令(Ley de en masse……一七九三年八月發布)が施行せられ、直ちに六十萬の新軍が編成せられた。

此の兵制こそ最近に到るまで近世各國兵制の基本理念となつたものである。先にマキアヴェッリが主張してイタリアに實現せられなかつた理論が、欲すると欲せざるとに拘はらず、國家革

新といふ事實によつて、必然的にフランスに實現せられざるを得ぬことになつたのである。封建國家の舊套が打ち破られて、そこに近世統一國家の基礎が定まり、封建諸侯や貴族・僧侶の専恣横暴が打倒せられて、市民は悉く直接にフランス國民たるの地位を獲得すると同時に、封建諸侯の私兵的軍隊が解消せられて、新しい國民軍隊が発生するのは、蓋し當然すぎる程當然である。また、報酬を至上の目的とする私兵には非ずして、自己の義務と名譽とに於て自己の國家を防衛せんとする國民軍の編成が、その運用即ち戰術・戰略の分野に於いて分散・集中・機動を可能にし、容易にし、以て指揮官をして變妙自在・敵の豫期せざる時と處と兵力とを以て、或は中央突破に、或は分進合擊に、また包圍に、迂回に神出鬼没の方策を實施せしむるに到ることは敢へて解説するまでもなからう。ナポレオン・ボナパルトの前半生に於ける幸運は斯くして興へられたのである。この意味に於て彼は世人が恐らくは禮讚しつゝあるほどの英傑であるよりは、寧ろこの事態、この時代が彼にあの幸運を興へたものであり、従つてまた一八一三年或は一八一五年以後の悲運を彼に押し付けたのも、この事態に由因すると謂ふべきであらう。之に就いては更に後に説かう。

要するに封建戰爭の本質形態を揚棄して、近世戰爭のそれを生み出し、それを育成發展せしめたものは、人爲を含んで更にそれを超える時代の方であり、時代の轉換が必然にそれを成就せしめたのである。

### 三 プロシヤの事情とシャルンホルストの軍制改革

プロシヤに於ては、クラウゼウッツの慧眼がよくこの新時代の戰爭——ナポレオンの軍制・戰術・戰略・統帥・戰爭指導——を看破しその觀察的理論の體系を樹立せしめた。けれども、新戰爭の原理を更に逸早く直觀し、これを當時のプロシヤの現實の上に實現したのは、何といつても、シャルンホルスト(1758—1813)をシテ役とし、グナイゼナウをワキ役とせる兩偉材の功績と認めなければならぬ。而して、この國に於ける「時代と戰爭」との關係は前二國の何れとも異なる教訓を我々に教へてゐる。こゝでは先づ新しい戰爭の原理が隣國フランスに生育發展し、現實に於てその偉大性を示しつゝあるに鑑み、先づこの新戰爭の軍制・戰術・戰略・戰爭指導等を採用するの餘儀なきことが痛感せられ、この新戰爭への要求が必然的にその國家の社會・政治等の分野の革新を要請し、遂にそれを實現せしめたのであつた。端的に言へば、新戰爭の要求が現状維持派を押し除けて、その國家革新を速め、その實現を必然ならしめたのである。

殊に、プロシヤは一八〇六年には新戦争原理をもつてするナポレオンの鐵鞭によつて、その深い頹廢と沈淪との中からたゞき起され、民族的熱屬化か國民的更生かといふ歴史的な分岐路の前に立たされるに到つた。若しこの後者の途をとらんとすれば、何よりも先づ舊戦争觀の變革、新しい用兵原理の實現を必須のものたらしめる。是れより先、即ちイエナ戦前の數年間に亘つて偉材シャルンホルスト將軍は、逸早くこのことあるを豫見して、軍制改革の事業に着手し、<sup>(註二)</sup>先づ將校階級の舊套依然たる戦争觀・用兵理論の迷蒙を打破し覺醒せしむべく、斷乎として陸軍大學校の改變を行ひ、また軍事協會の設立等によつて一般識者に警鐘を亂打した。殊に新戦争の採用遂行を可能ならしむるためには、國內諸般の刷新の緊急性が切實に迫り、茲に古きフレデリック的傳統廢棄のために、現状維持派たるユンケル階級の根強い偏見、因襲、頑迷に對して、著しく困難なる抗争を展開せざるを得なかつた。シャルンホルストは、部内に於ても、ロイドやテンベルホーフ流の機械論的兵學の既往の思想に鋭い批判と抗争を必要とし、他面また當時大きな勢望を得てゐたマッセンバッハやビーローウ達の形而上學的兵學とも對立し、それらを克服して、眞にプロシヤを救ふ近代兵學と近代戦争論の樹立に邁進せねばならなかつた。だが、既述の如く異質の社會的・政治的地盤の上に新しい兵學戦争論を移植することは不可能で

あるし、さらばとて斯かる地盤の變革には多大の日子と努力とを要することでもあり、茲に彼のためならぬ苦悶の時代が続いたのである。

シャルンホルストの警鐘の亂打、熱誠なる努力は、未だに尙フリードリッヒ大王時代の自己優越感と、それに基く安價な惰眠、殊に根強い現状維持派ユンケル階級の妨害のために、遂にプロシヤに對して、イエナ敗戦(1806年10月)といふナポレオン・ボナバルトによる餘りにも慘憺たる鐵拳が見舞はれるまでは、その國民を覺醒せしむることは出来なかつた。

イエナの大敗を眼の當りに見せしめられた全國民は、始めて驚愕して、シャルンホルスト年來の主張・努力の對象たる國民戦争に目を見開き、遂にこの新戦争遂行の可能性實現のため、戦争の地盤たる社會的・政治的分野の根本的改革を斷行するの運びとなつた。

メーリングはこの時代の歴史を敘述して曰ふ。「シャルンホルストの生ける天才は、彼が事物の現實の關聯を認め、そして何らの天才をも算入せず、本當とは思へぬほど無學な王に對して、又本當とは思へぬほど私慾を追ふユンケル階級に對して、七年の間全く超人間的に闘ふことによつて、プロイセン軍隊をフランス軍隊との成功的な闘争を可能としたやうな經濟的基礎の上に置くことにより、身を以て證明した。シャルンホルストは彼の友グナイゼナウ、ポイ

エン、グロールマン等と共に、農民の解放を少くともスタイン、シエーン、ハルデンベルヒと同様に熱心に要求した<sup>(註二)</sup>と。

是等の革新的軍人を中心として行はれた軍制改革そのものゝ内容は、將校に對するユンケルの貴族的獨占の撤廢、外人傭兵制の廢止、後備軍制度を伴ふ國民皆兵原則の採用等々であつて、是等の建議案、訓令法律等はカール・リープクネヒトをして「理論的には明らかに正しい。が、實際的には餘りにも時勢に先行してゐる<sup>(註三)</sup>」と批評せしめたほど進歩的のものであつた。

註一 シヤルンホルストの軍制改革を中心とするその業績の詳細に就いては獨ゲウオルヒ・ハイリッヒ・クリッペル著「フォン・シヤルンホルスト將軍傳」——邦譯 日本陸軍省譯・附行社藏版の前篇後篇あり——就いて見られんことを望む。

註二 メーリッング著・土方麻生共譯「レフシング傳記」 二九一頁。

註三 リーブクネヒト著・松下芳男譯「軍國主義論」 四一八頁。

#### 四 小 結

以上只單に此の期に於ける史實に觀るも瞭らかなるが如く、時代は人々の意欲を超えたる歴

史的必然の歩みを以て、一步一步と進展する。この進展に伴つて、各國の政治・經濟・法制・社會・倫理・教育・學問……等々が、逐次にその舊套を棄て、その舊い殻から蟬脱して、新しい時代に即する態様を整へる。而も、この新しい態様が、また必然に、新しい質と形態とをもつ新しい戰爭を生み、そこに舊い軍制・戰術・戰略・統帥・戰爭指導等の萬般を更新し變革する。而して更にまた、この新戰爭へ！ といふ時代的要請が、再び各國の政治・經濟・社會・法制……等々の刷新を必須緊急のものたらしめ、茲に一層時代の進展を急速化してゆく。斯くの如く、時代の進展革新と戰爭の進化變革といふこの兩者が、相應じ相伴つて相互作用を営みつゝ、歴史の齒車を刻み、それを推し進めてゆく。勿論、その速度は、時代の異なるに従つて、必ずしも一律ではない。また、その變革・革新が根本的なものにまで及ぶか、或は比較的皮相の域に止まるかも、時代によつても相違があり、民族や國家の異なるに従つても、千差萬別である。

以上、兩者の關係は、斯くの如くして推進せられた其後の時代——即ち、普通に言はるゝ資本主義時代——に於て、各國の戰爭・軍制・戰略・戰術等が如何に變革せられしやの關係を検すれば、一層適確に理解せらるゝ所であらう。尙それにも増して、古來變革にのぞみし時代・國家と此等との關係を世界史實に就て檢すば、一層適確に理解せらるゝ所であつて、その時代・國家

と戦争、戦争と時代・國家、時代と戦争學、戦争學と時代などの相互關係は、新しい戦争の本質形態を豫見し、來るべき時代を先見するため極めてよき示唆を與ふるものたるを失はない。

然らば、今の時代は如何に特徴づけるべきか。既往の時代に比較して、此の時代の戦争を——その要求する軍制・戦術・戦略・統帥・交戦手段・交戦方法・交戦組織・交戦目標・交戦目的・戦争指揮・戦争指導等々を——如何に豫想し、如何に準備すべであらうか。此の問題は極めて重大である。蓋し、時代の赫々たる勝利は、慧眼を以て時代の進展を先見し、他に先んじて逸早く來るべき戦争の特質を究明し、以てこれを自國の國情に即應せしめ、或は逆にその國情を之に即應せしめ得たもののみ、能く許與せらるゝであらうからである。従つて、この問題に對する關心たるや、實に只今の世界を蔽ふ滔々たる奔流とも稱すべく、各國は何れも、軍民の別なく、朝野を問はず、一國の全能を盡し、萬民の全智を傾けて、來るべき時代の特質を究明し、之に應ずる新戦争の質と形態とを把握せんと努めつゝある。例へば、隣邦ソ聯に於ては、スウエーデン、エル・エイデマン、ヴィクトル・ノヴィキエを始めとしてベール・フェリドマン、エル・エス・アマラゴフ、ウエー・アー・メリコフ、フルンゼ、カー・ボチャロフ……等々が互にこの問題を繞つて論戰の火花を散らすあり、またナチス・ドイツに於ては、逝けるルーデンドルフ將軍を

始めとして、ヘルマン・フランケ將軍、カール・リンネバッハ、フリードリッヒ・コッヘンハウゼン將軍、シュタインメッツ、パウエル・シュミットヘンネル、ベルトカウ、フォン・ハウゼン、フォン・クール、シューマッヘル、フムメル、ヘッセ、ユリウス・ビンデル、アムプロシウス……等々、軍・民・文・武・朝・野を擧つて有機的一體的なる研究によつて劃期的なる成果を收めんとしつゝあるが如くである。その他の國々に於ても、その程度に高低の差こそあれ、何れもこの問題の究明把握には多大の努力が傾注せられつゝある。

要するに、新しい質と形態とをもつ新時代の戦争の究明は、特にこの時代に於て一日も忽にすべからざる重大事である。然らば、それは如何にして可能であらうか。この新戦争の先見は、之が地盤たる新時代の豫察によつても類推せられ得る。來るべき時代の特質を豫察し得れば、従つてそれを地盤として、その上に生育する戦争の特質をも推測することが出来るであらう。それは概略の推測ではあらうが、而もその根幹に於ては誤りなきものが把握せらるゝ。然らば、來るべき時代の特質は如何にして豫見し得るであらうか。此は紛れもなく遠き過去より現在に至る迄に時代が幾變遷せし跡を省み、また、廣く洋の東西に亘る社會事象の趨向に鑑みて、そこに歴史の必然なる歩みを理解し把握することによつてのみ可能である。茲にいふ歴史



の反省と社會事象の觀察は、必ずしも微に入り細を穿つの必要はない。後にも説く如く「あらゆる瑣末事を戦々兢兢として穿鑿する」を以て能事終れりとなすのではなく、「大局を鋭く把握することによつて、各時代の特異性を看破する」(註) (クラウゼウィツ) ことが、より緊要である。

註 クラウゼウィツ「戦争論」・下巻・改造文庫版・四七七頁。

Chausowitz: Vom Kriege 1935 Leipzig S. 593

### 第三章 新らしき戦争の發生

#### 第一節 新らしき戦争への趨向と列強兵學界

時代は將に轉換しつゝある。今や、國際秩序は新たなものを欲し、次々に舊きものを廢棄して、茲に一大轉換を敢行せんとしつゝある。各國の國內秩序は、西歐流近世紀の指導原理から離れて、別に之に代るべき新たなものを欲する。國際政治も國內政治も、また經濟も、思想も、信仰も、更に學問・教育・文藝其他文化の全分野に亘つて、到るところに劃期的なる刷新が要請せられ、亦逐次に之が敢行せられてゆく。世人が意識しあると否とを問はず、また人々が欲すると欲せざるとに拘らず、時代の變革は正に歴史的必然と謂はねばならぬ。而してこの變革を認める限り、人々は當然にもまた戦争の變革、戦争の進化——換言すれば、新らしき戦争の發生を肯定せねばならぬであらう。蓋し、戦争は時代文化を基礎とし、内容として生育し、時代と共に變遷し、變革するものであり、従つて、新たなる時代は當然新たなる戦争を生み出すにはすまぬものだからである。

けれども、我々は一應時代の轉換、變革とは切離して、直接に戰爭を觀察し、その進化生育の状態を把握することも必要であらう。而して、この觀察の結果、若し當面の戰爭が劃期的なる進化をなしつゝあり、飛躍的なる變革を起しつゝありと認め得るならば、逆にまた、時代の轉換、時代の變革も亦必然なりとの豫斷、推論をも爲し得る。蓋し、戰爭に於ては一國・一民族・その時代の全智全能を盡して互にその勝敗を争ふものであつて、従つて、新たなる質と形態をもつ新たなる戰爭の發見は、それに於て勝利を獲得し得んが爲に、當然その時代・その國家を革新せねば止まぬものだからである。

斯かる見地の下に、然らば「今、戰爭は如何に變革し進化しつゝあるか」、「戰爭はその本質と形態とに於て如何なる變革、進化を起しつゝあるか」——この觀察を試みやう。先づ、我々の見解を披瀝する前に、我が國以外の兵學、戰爭理論の専門家達が、これに就いて如何なる所見をもつてゐるか。——これに就いて一瞥する。

露國の退役將官ア・ゲロイはその著「赤軍と其戰略」(社會戰爭)に於て曰ふ。

「ソ聯戰略の指導的思想に關しては今より次のことを擧げて置く。それは「戰の神」たる奈翁の權威がモスクワでは他國程に尊重せられて居ないことであつて、モスクワではナポレオン式戰

爭原則を以て既に時代後れのものとして看做し——(中略)——此の「戰の神」の原則から離れて別に之に代るべき原則を發見せんと努力してゐる。」と。(註一)

抑、ナポレオンの戰爭理念、戰爭思想なるものは、世間既知の如く、フランス革命以後現在に至るまで世界に輝いた理念であり、思想である。ナポレオンこそは、文字通り近世々界に於ける「戰の神」であつたのであつて、彼の國民戰爭の理念、その殲滅戰略の思想は、舊き封建時代の傭兵・職業軍隊による戰爭理念を打破し、また外交・政略の掛け引きのみを偏重し、これによつて勝敗を決せんとする舊い戰爭思想を驅逐して、殆んど例外なく世界各國の戰略・戰爭の根幹をなす指導原理として採用せられるに至つたものである。この事情をクラウゼウィツの言葉を借りて表現すれば、「戰爭はボナパルトの出現を機として、先づフランス側に於て、次いで列國側に於て、再び(註二)」

(註二) 註一は「クラウゼウィツが、既に再びといふのは、古代特に羅馬人の戰爭は國民就中老子をまで引き具し、大之に代つて、戰爭はナポレオンに傭兵などの職業軍によつて遂行せらるゝに到つた。然るにナポレオンの出現に及び再び……といふ意」

全國民の事業となる事によつて、全然その性質を一變するに至つた。といふよりは寧ろ、その本來の性質、その絶對的完成に著しく接近したと言ひ得よう。(註三) 用ひらるゝ所的手段には最早如何なる制限もない。そんなものは、政府及び國民の剛力と熱狂との中に消え失せてしまつた。……中略……。全軍事的動作は

専ら敵の倒滅を目標とすることとなり、一度戦端が開かれた以上は、敵が完全に起つ能はざるに到つた時でなければ、戦争の中止とか、媾和談判などといふことは、問題とならなくなつた。<sup>(註二)</sup>斯くして、國民戦争と殲滅戦略は、恰もそれが爾今永遠に亘る不變の鐵則でもあるかの如く、また更にいへばそれが戦争本來の性質に根ざすものであるとして、何等の疑惑も差し挿まれずに、最近までの世界を風靡し來つたのである。然るに、今やソヴェイトに於ては、ナポレオンのものには既に舊式のものであり、それに代るべき新時代の新しい戦略、戦争思想があるべき筈である。その新たなものを他に先んじて見出したものにのみ新時代に於ける輝かしい勝利が許される。かく觀じて之が発見創造に全力を傾注しつゝあるのである。その詳細は第三篇に於て説述せるが如くである。しかのみならず、この傾向は單にソヴェイトのみではなく、ドイツ兵學界の最近の情勢を見ても、瞭らかにそれを看取し得る。其の一例として、ルーデンドルフ將軍が一九三五年に著述せる、かの「Der totale Krieg」即ち「全體戦争」「國家總力戦」に就いて見やう。將軍は曰ふ。「クラウゼウイツの戦争論は既に過去の世界歴史の進展過程に屬するものであつて、今日では最早遙かに時代に取殘されてゐる。加之彼の戦争論の研究は今日では却つて頭の混亂を招く恐れさへある」と。<sup>(註三)</sup>

こゝにクラウゼウイツとは謂ふまでもなく、近世に於ける世界兵學界の一等星とまで謳はれて來たカール・フォン・クラウゼウイツ將軍 (Carl von Clausewitz 1780—1831) を指すのであつて、彼はナポレオン戦争を研究して、それを中世紀の各戦争とは截然として區別あるものと觀、而もそれが最もよく「彼の理想とする戦争の本質形態」たる「絶対概念の戦争」に近似しつゝありと唱へてゐるのである。即ち、ナポレオンを以て近代戦争の最高の實踐家と謂ふならば、クラウゼウイツはその最高なる理論的表現者と稱すべきである。

凡そ近世に於て兵を語り戦争を論ずるものにして、クラウゼウイツの名を見落すものはないであらう。この時代に於ける戦略・戦術の最高の指導原理は、悉く皆彼の「戦争論」の泉から汲みとられてゐる。如何に卓越せる近代兵學家と雖、畢竟するに、自己の理論の出發點をクラウゼウイツに求めるか、少くとも彼の戦争論に歸結するが如くその立論を進める以外の途は見出せなかつた。實際の戦争・作戦・戦闘指導は、何れも皆、彼の理論を最高の光明とし、彼を「守り本尊」として導かれて來たといふも過言ではあるまい。此の間の消息は左に掲げる數氏の言を以てするも、充分に明らかとなるであらう。

例へば、フランスの陸軍中將ピエロン (Pélissier) は、クラウゼウィッツを評して曰ふ。「ナポレ

オンが一八一二年以前に戦勝を得たる所以の原理、及び聯合軍が同年以降一八一五年に到る間に戦勝を得たる所以の原理は、皆簡單ではあるが、之より生じたる機變は千變萬化極りない。世人は空しく此の大戦の跡を見て此の原理を覺らなかつたが、クラウゼウィッツの慧眼遂によく之を看破するに到つた。」「嗚呼若し吾が國の將帥にして一八七〇年以前にクラウゼウィッツの説を一考して居たならば、かの當年に於ける戦略上の失敗を免れ得たであらう。吾人若し過去の非を覺り、將來の爲に準備せんとせば、クラウゼウィッツの書を読まねばならぬ」と。斯くの如き絶讃が、由來ドイツ人とは犬猿も言ならぬフランス人の言であり、獨軍のこと、し言へば故意にも嫌疑の情を以て對するフランス將帥の告白なのである。また、有名なる「國民皆兵論」を著した獨元帥・フォン・デル・ゴルト將軍は、その自序の中にクラウゼウィッツを讃へて、「クラウゼウィッツの後に兵書を著述せんとする人は、ゲーテの後にファウストを創り、シェークスピアの後にハムレットを作る詩人たらんとする危険を冒さうとするものである」と曰ひ、又その緒言の中に「シュリーフェンはモルトケの衣鉢を受けたもので、……中略……、モルトケはまたクラウゼウィッツの門弟である。クラウゼウィッツの遺著には、戦争の本質に就いて言ひ得べき總べ

ての事が網羅されてゐる。クラウゼウィッツは實に近代に於ける總ての軍事研究家の師となつてゐる」と稱して彼の功績を讃仰してゐる。

また、ドイツ元帥・侍從武官長・參謀總長シュリーフェン伯爵は、クラウゼウィッツの戦争論第五版に序して曰ふ。「クラウゼウィッツが熱心に強調してゐる事柄の中には、今日の我々から見れば、全然自明の事と思はれるものがある。然し——注意せよ——それが自明の事となつてゐるのは、根本的には彼の學説のお蔭なのだ。實際彼の學説の中の非常に多くのものが、今日の勤務規定の中に入り込んでゐる。今日の戦争に就いて講義してゐるものは、凡べて意識的にか無意識的にか、多かれ少なかれ密接にクラウゼウィッツに依據し、その滾々として盡きぬ思想の泉から多くのものを汲み出してゐる。……中略……。實際クラウゼウィッツが蒔いた種は一八六六年(註五)及び一八七〇——七一年(註六)の諸戦争に於て豊富なる果實を結すのであつた。それらの戦役に於て發揮された吾が軍の用兵術の優越は、根本的には全くこの戦争論の賜である。……云々……」

更に英陸軍少佐、ステワード・エル・マーレーはクラウゼウィッツを評し、且我が國軍との關係にまで言及して左の如く曰ふ。

「モルトケ元帥は『最も秀でたるクラウゼヴィッツの生徒』であつて、現在の狀勢にクラウゼヴィッツの教訓を採用した。——中略——

戦争の性質に關して重要なりと考へらるゝ一切の事柄は、かの偉大なる軍事上の天才が残した著作の中に見られる。……

モルトケは、クラウゼヴィッツの、最もすぐれた弟子であつたと同様に、戰略論を著はしたるブルーム、『國民皆兵論』及び『戦争の指揮』を著はし、且つギリシヤに對する一八九七年の戦役と、フアラシヤ戦役に際してトルコの參謀を調育したるフォン・デル・ゴルト等の現代獨逸陸軍に於ける最も優秀なる著作者、ボグスラウスキー將軍、應用戰術の父ヴェルデイー・ヴェルノフ將軍、『現代の戰術、戰略原理』の著者シュリヒティンク等より日本軍の參謀を養成したメックケル將軍に及ぶまで、皆モルトケの流派に育つたものであるから、これらは同時に、クラウゼヴィッツの流派と云ひうる。

我々は遼陽戰後大山元帥よりメックケル將軍に送つた電報を憶ひ起す。「我等は貴下が貴下の養成せられし後輩に誇りを有たれんことを切望す」

以前余が、英國陸軍の中心地區アルダーショットに於て、第二師團の士官へ、クラウゼヴィッツ

に關する講演を依頼せられた折に、丁度我々は皆驚異すべき日本の實力とその成功の原因を知らんと熱望してゐた故に、若し余がメックケル將軍から如何に彼がクラウゼヴィッツの教訓に影響をうけてゐたかに就いて、知らされてゐたとしたなら、實に興味あることに違ひないと、強く感じたことであつた。

余の友フォン・ドナート氏は、ケムメラー將軍に書簡を送つて、世に公けにして差支なき言明をメックケル將軍より得らるゝや否やを問ふ好意を與へてくれた。メックケル將軍の死に際しては日本及び獨逸は悲しみを共にしたのであるが、彼は親しく前記の乞に同意した。

余は今將軍の書簡の一部を引用することを非常に光榮に思つてゐる。曰く、「余は他の凡ての獨逸士官と同様に意識的にも亦無意識的にも、クラウゼヴィッツの精神に従つて教育した。クラウゼヴィッツは、ナポレオン戰役に依つて結果したる戦争の理論の創始者である。余は今日に於て、近代的意識を以つて、戰を指揮し又は戰ひをなす誰も、假令無意識にたりもと、クラウゼヴィッツの上に基礎を置いてゐると考へるものである」と。日本軍參謀への調育が日本の勝利に大いにあづかつて力あつたこのメックケル將軍の意見は、實に興味あるものである。クラウゼヴィッツの影響の大なることの證として、これより有力に又現代的な證明はない」と。(註七)

要するに、クラウゼヴィッツは近世世界の兵學・戰爭理論を指導して來た最高峯である。否、少くとも最高峯と考へられて來たものである。然るに今や澎湃として彼の理論の根本に對する疑惑の黒雲が捲き起りつゝある。近世の「戰の神」と仰がれて來たナポレオンが、今やその權威を喪失して、他の者によつて取つて替られやうとし、従つて同様にまた、最近までの兵學・戰爭理論の唯一にして最高なる指導原理たりしクラウゼヴィッツが、今やその指導性を喪失して、過去帳の中に收められ、骨董的存在の理論として、現實の世界からは遠のけられやうとしてゐるのである。

以上は、ソヴェート・ロシア並に新興ドイツの戰爭に關する新たなる見解に就いて、僅かにその例證の一端を拾つたに過ぎない。併し乍ら、それをその國全體の兵學の動きに照應してみるとき、またそれを全世界に亘る現在の戰爭理論の趨向に於て觀察するとき、それこそ全體の動向を正しく表現する一端であり、その内に將來生れ出すべき新しい戰爭學の方向を鋭く指摘してゐることを識るであらう。殊に、今矢繼早に連續して爆發しつゝある諸事變・諸戰亂の實際——例へば、スペインの國內戰、支那事變、獨逸事件、チッコ問題等——現實に於ける、戰爭・事變の實相に照らして觀るとき、斯くの如きナポレオンの戰爭思想の否定、クラウゼウ

イツ流戰略理念よりの超脱は、正に避くべからざる一つの勢として理解せらるゝであらう。否寧ろ勢と謂ふよりは、既にある事實として現はれてさへゐるのである。かゝる事變の内に明らかに從來の戰爭理論をその根柢から搖がし、既往の戰爭事實とはその根本に於て異るところの數々の事實が含まれてゐる。換言すれば、理論に於ても、事實そのものに就いて觀るも、戰爭は今正に劃期的なる變革を捲き起しつゝあり、飛躍的なる進化を遂げつゝあるのである。

勿論、この新らしい戰爭學の全貌とその内容、次代の戰爭事實の實體内容が、如何なるものであるかは、今尙判然とは意識せられてゐない。それは、今正に、全世界を驅つて並々ならぬ待望と一方ならぬ苦惱との二重奏を奏でしめつゝ、現實界に呱呱の聲を擧ぐべく胎動し續けてゐるといふ方が適切であらう。文字通りの甲論乙駁、必死なる暗中摸索、かゝる混沌と昏迷の中に、舊き理念・舊き形態から離れた自己を誕生育成せしむべく、之が母體に生みの悩みを與へ、その助産婦たちをして血眼なる活動を要求しつゝある。この世界を擧る生みの悩み、各國兵學者・戰爭理論家たちを擧げてのこの血眼の活動——これを経てのみ、新しい戰爭はその明確なる姿相を世人の前に現はすであらう。

註一 ア・ゲロイ、レオン・デュエン共著「赤軍と社會戰爭」、參謀本部譯本六頁。

註二 クラウゼウィッツ著・馬込健之助譯「戦争論」(岩波文庫版)、下巻、四七五—四七六頁。

Clauswitz: Vom Kriege 1835 Leipzig S. 592

註三 間野俊夫少佐譯・ルーデンドルフ「國家總力戰」、四—五頁。

註四 クラウゼウィッツ戦争論邦文譯者序言 岩波文庫版、二七頁。

註五 コルマル・フォン・デル・ゴルトツ元帥著、フリードリッヒ・フォン・デル・ゴルトツ大佐増補、日本陸軍大學校譯「國民皆兵論」緒言、一頁。

註六 邦譯クラウゼウィッツ戦争論岩波文庫上巻二二・二三頁。

註七 荒木武正譯・クラウゼウィッツ戦争要論、平書院。

"The Reality of War" by Major Stewart I. Murray 1914 London

## 第二節 新らしき世界秩序と新らしき戦争論 への動向——その實相把握の方法——

新秩序の確立が、いまや根強く、そして到るところに於て、欲求せられつゝある。

新しき世界秩序は新しき戦争によつてのみ生育の可能性を獲得する。それが既往の秩序の固い殻を破り、舊き世界の指導勢力が懸命に張り繞らす一切の阻止・妨害・抵抗を排除して、それ

自身の生育を可能ならしむるため、殊にそれが舊きものに代つてその主體性を獲得せんがためには、當然にも戦が必須であり、而もこの戦たるや、舊戦争そのまゝの形態・本質に滞まることは、許さるべくもないことである。それは過去の歴史が明確に我々に教へてゐる。要するに新しい秩序——新しい世界——近世紀との間に大いなる終止符を以て區劃せらるゝ次代の世紀——は、たゞそれに相應する新しい戦争！ 既往の戦争の質と形態から超脱して新たに生育せしめらるゝ新たな戦争によつてのみ、創造せられ確立・發展せしめらるゝであらう。

然らば斯かる戦争形態・戦争本質は如何にして把握せらるゝであらうか。この新戦争の發見は、既に前にも觸れたるが如く、遠き過去より現在に至る戦争變革の史實に鑑み、また、廣く洋の東西に亘る戦争變革の現實の實相を究明し、そこに歴史の必然、人爲の趨向を洞察遠見したるときに、始めて無難に完成せらるゝのではなからうか。勿論、フランス革命以後の近世紀に於ける戦争史・戦闘史を細かく研究することの無用を叫ぶのではない。かゝる一々のものにも、之を精細・的確に理解し把握する限りは、その内に必ず永遠の歴史の必然の方向が含まれてゐる。けれども、斯くの如き方法は、動もすれば因習に捉れ、情勢に支配され勝ちな人類の知性に於ては、甚しく危険でもあり、また頗る心許ない次第でもある。茲に於てか、長い中世

紀の舊き傳統を打ち破つて、近世紀の兵學・戰爭論の王座の地歩を獲得したクラウゼウッツの次の言が、特に今の時代の我々によき示唆を與へる。即ち、「あらゆる瑣末事を戦々競々として研究するのではなく、大局を鋭く把握することによつて各時代の特異性を看破せる者のみが、その時代の統帥を理解し評價することが出来るのである」と。<sup>(註一)</sup>又、「將帥たるものは博學な歴史家たるを要せず。……中略……凡そ、知識は科學的な公式や體系等の裝置によつて無理矢理に得らるべきものではない。……要約……それは事物の觀察に當り、丁度蜂が花より蜜を吸ひ採るやうに、人生の諸現象からその精髓だけを抽出す才能の活動によつてのみ得られる」と。<sup>(註二)</sup>此の時代の科學や理論や實踐は、餘りにも戦々競々として瑣末事の詮議立てに力を費して大局を忘れる、餘りにも細事の穿鑿、技術の末節に趨つて、ものゝ本源・精髓を見忘れ、ことの大用・大節を見失つてゐる。根柢に於てその文化に動搖なく、眞善美などの價值觀に於て何等の疑惑もない如き、謂はゞ發展の世紀・大平の時代に於ては、斯くても濟まされるかも知れない。だが、當面の時代は正に反對である。即ち、この時代に於てこそ特に事象の大局を把握し、事物の精髓を掴むことが必要であつて、之がため、單に近世のみならず遠く古き時代より今に至るまでの歴史の跡の綱を理解し、また單り事象の表面を知る實證的智識に止まらず、

その精髓を識りその本質理解にまで到る能力が要請せられねばならぬ。

尤も、惠まれたる我々日本民族は、その身近に、——更に精確に謂へばその生命の本流に——天地の公道としての「かんながら」の道を藏し、天理自然の眞理たる國體の精神を宿してゐる。従つて、この「かんながら」の道、この國體の精神にひたむきに隨順し、靈肉一如の生命をこゝに歸一しまつれば、自らに正しき戰爭理論、戰略・戰術の原理も體識體認せしめらるゝものである。これは筆者の確信するところ、また筆者たちが絶えず行すべき所である。純明なる日本精神の實現する所、即ち世界宇宙の眞理が開顯せらるゝといふことに就ては、既に前編迄に引續き論述して來たところであり、従つてこゝでは只これを指摘するにとゞめてこれが繰説を避ける。

次に、其の是非の論は別として、一應は非資本主義的なる社會を建設しつゝありと稱するソ聯の戰爭理論を一瞥し、文章への橋渡しとしやう。

かのソ聯に於ては、兎も角も、變つた社會にふさはしき異質の戰爭論を創りつゝあると認められる。それがクラウゼウッツ流より東洋流への發展、否畢竟するに日本的なるものへ歸一す



べき必然の動向にある事は、既に第三編に於て論じたるが如くである。而して、彼等が在來歐米流の戰爭論を超へんとして眞摯な努力を傾注してゐることは、幾多の例證を擧げることが出来る。例へば、

スウエチンは異人種の大衆を率ゐて戰爭を指導したる戰爭の天才成吉思汗から眞正なる戰略を學び得るものなりと稱し、之を推稱して居る。曰く

「十三世紀に於ては歐洲に於ける經濟狀態は、人民の生活をして甚だ困難ならしむるものがあつた。其の時亞細亞は世界的征服者、世界的將帥として有名なる成吉思汗の下に攻勢を開始し、歐亞の通商路の大部を遮斷した。之により歐洲は疲弊を來し、人民の日常生活は動搖を來すに至つた。之が爲め武裝的騷亂は各所に發生した。此時蒙古は戰爭指導に關し新らしい著想を有して居つたので、此結果は一層重大となつた。此の新思想の研究は殊に今日大に吾人の興味を惹くものである。」

蒙古戰略の基礎は、絶えず策源を擴張し作戰の進捗に伴ひ其の兵力を増加したことである。即ち寡弱なる防禦力は蒙古軍の損害を過少ならしめ、此損害よりは新征服地の人民の侵入軍に加入する數の方が常に遙かに大であつたのである。例へば成吉思汗の孫にして露西亞

の征服者たるバチーの軍に於ては、蒙古人の比率は甚だ小であつて、戰史の傳ふる所に依れば五%を超過せず、此の軍の大部は被征服地の人民の兵員からなつて居つたのである。以上が蒙古式戰爭指導方法の第一の特徴である。<sup>(註)</sup>

要するに、近世に續く次の時代の戰爭指導の理念、戰略、戰術思想なるものは最早ナポレオン乃至クラウゼウッツの流派に屬するものではなくて、成吉思汗の流れを汲むものである。古き亞細亞文化の中に——成吉思汗の戰爭指導理念の中に——新らしき時代の戰爭の指導理念を見出すことが出来る。而してその成吉思汗の戰爭の指導理念とは、一つには征服し了れる國土の住民の中から、自己の軍隊を編成し、敵國竝に敵國軍を化して自國側・自國軍隊に改變する。戦ふは只自分の國の軍隊だけではなくして、敵の獅子身中の蟲を操縦し、敵軍中に自己の軍隊を見出し、それを擴充して行く。それが新戰爭の指導原理である、と謂ふ。

註 スウエチン著「戰略」參謀部譯本・一三一—一四頁。

## 第四章 戦争原理・戦争形態の劃期的變革 と其の特質

### 第一節 戦争の質的變革

#### 一 挟ミ將棋的戦争より本將棋的戦争への進化

戰略竝に戦争の理論のかくの如き質的變革を理解するために、將棋に例を採つて觀察すれば甚だ明瞭に理解せらるゝであらう。即ちそれに就いて先づ結論から先に述べれば、ナポレオンが出で、クラウゼヴィッツの戦争論が現れて以來、發展に發展を續けた近世の戰術・戰略・戦争の理論は大體に於て「挟ミ將棋」の戰術・戰略・戦争の理論であり、之に對して、正に起りつゝある新たななる戰術・戰略・戦争思想は「本將棋」のそれであると謂ひ得る。尤も一概に近世の兵學・戦争理論と謂ふも、國によつてそれぞれ發達の段階を異にし、又時代の經過に伴つてその進歩の程度も異なるものではあるが、その發達、その進歩の程度なるものは、例へば「挟ミ將棋」といふ一つの埒内での發達進歩であつて、それを超え、それと質的に異なる他の形態に屬するものでは

なかつた。ところが、今正に新らしく世界に誕生し、勃興せんとしつゝあるものは、從來のその埒内での進歩發達ではなく、その質と形とに於てそれを超え、他の別種の形態・本質に屬するものであり、それは「挟ミ將棋」から「本將棋」への飛躍であると觀らるゝ節があるのである。と謂ふ所以のものは、誰もが知る如く「挟ミ將棋」は結局に於て、如何にして對手を殺し、如何にしてその局面から對手の駒の姿を没せしめるか、といふことを最上の目標とし、その目標の下に互に戰術・戰略の粹を盡すものである。然るに、本將棋なるものは、單に對手の駒を殺すにとゞまらず、一應殺した對手の駒を「持駒」として自分の側に味方として編入し、それを再び生かして對手の王の攻撃に使用する。對手側の駒をとつて味方のもものと化し、それを生かして對手の王を攻撃せしむる。それが「挟ミ將棋」と異なる「本將棋」の特質である。今までのナポレオン式戰略、換言すれば、クラウゼヴィッツ流の戰略・戦争理論なるものをとつて觀察すれば、それはまぎれもなく「挟ミ將棋」的のものであると謂ひ得るであらう。蓋し、彼等に於ては、戰闘・會戰・戦争のやり方を一應殲滅戰略と消耗戰略とに分けて考察するのであるが、先づ成し得る限りは、殲滅戰略を採るといふことが理想である。而してこの殲滅戰略とは、對手を撃滅し、殲滅し、窮極に於て對手を戰の局面から抹殺し、その姿を戦ひの場所から消滅せしむることを



せしむる。例へばレーニンは「一九二〇年戦に吾人が勝利を占めたのは吾人が一致團結し、敵國の兵卒をも味方としたからである」といひ、ソ聯の將來戦に對する對策は「我國兵力の第二の源泉は外國のプロレタリアである」との認識の下に、ブルジョアの戦線の「背後にも戦争」を起すやうに指導するに存すると教へる。<sup>(註一)</sup>それがソ聯の戰略思想の基本理念である。そしてそれは當然にも戦争手段の著るしき擴大をもたらし、それに關聯せる様々の問題が提出せられて居るのであるが、此は併し只ソ聯に獨特なるものであるとは言ひ得ない。否、一般的な傾向となりつゝあるのである。例へばシューマッヘル、フムメル(註二)の共著「平和裡の戦争」の如き極めて示唆的であり、後に稍、詳細に取扱ふであらうが、新時代に照應してそれこそ、正に「本將棋」の本質形態をもつ戰闘・會戰・戦争の思想であり、所謂「挟ミ將棋的」なるものとは、凡そ質を異にせるものである。

更に生々しい支那事變に於ける例證からも戦争のかくの如き變革を類推することが出来るのであるが、これに就いては、後章に述べ、こゝでは省略する。

註一 エル、エス、アマラゴフ、「將來戦の性質に就て」参照。

註二 Schumacher; Hummel: Vom Kriege zwischen den Kriegen.

## 二 唯物的・機械觀的戦争より、物心統合・生命觀的戦争への進展

ルーデンドルフも言へるが如く「元來技術と人間——否、人間と技術の二つが軍隊の力を作り上げるのではあるが、何れの場合にも人間が第一の問題であらう。人間は生命のない器材によつて運搬せられ、生命のない器材を敵に向つて送り、それに敵を殺傷する力を與へるのである。」<sup>(註)</sup>

註 ルーデンドルフ、國家總力戰、岡野俊夫譯一〇七頁。

如何程優秀なる飛行機も、又如何に精銳なる戦車や機關銃もそれを使ふのは人である。巨萬の爆弾も氷のやうに磨ぎ澄ませる白刃も、それを如何なる目標に向けて用ゆるかを決するのは、一に人の理智・感情・意志であり、人の心のうちなる思想情操に基づく意思に依るものである。従つて、今ここに適切なる方法を以て敵の思想や意思にメスを加へ、有效なる手段によつて敵の感情、情操に戀へるならば、彼等の攻撃すべき本來の目標を變換せしめて、他の目標へと

向はしむることも、必ずしも不可能事とはいひ得まい。戦争は事實に於てかゝる方向へと質的に變革しつゝあるのである。處が、今までの戦争はそれに比較すれば唯物的・機械觀的であつたとも謂ひ得るであらう。蓋し、從來の戦闘・會戰等に於ける彼我の最大關心事は、「如何にしてより多く敵の肉體を破壊するか」、「如何にして少したりとも數多き敵の戦車や火炮・機關銃を打ち壊すべきか」、是が重點であつたと謂ひ得るからである。然るに、今將に行はれんとし、又行はれつゝある戦闘の本質、更に將來それが展開されるであらうところの戦争のやり方は、單に敵の肉體、敵の火兵・陣地等、物質的・有形的武力への攻撃のみにとゞまらず、敵の心理・思想など精神的・無形的戦力への攻撃攻勢が重要視せらるゝに到つてゐる。かくの如く、物と共に心をも無視しない戦ひ、——心と物との一致する全體に對する攻防の戦ひ——戦争は將に斯くの如き方向にまで變革しようとしつゝあるのである。一般に認めらるるが如く、中世紀文化の特質を唯物的なる言葉を以て呼び、それに對して近世の世界文化を唯物的と名付くるならば、ルネッサンス以來の戦争——ナポレオン乃至はクラウゼウッツ以後の戦争も亦必然的に唯物的思想の基調から離れ得るものではないと考へられる。蓋し戦争も亦その時代その社會の基礎地盤から遊離して存在し得るものではなく、寧ろ時代文化の一環としての存在とも觀るべき

だからである。要するに、最近以後の戦争は、近世紀的なる唯物的基調から離れて、物心一如、物心統合の基調へと飛躍せんとしつゝあると觀るのが至當と考へらる。

### 三 功利的・小乘的戦争より道義的大乘的戦争への變革

更に觀點を換へて戦争の質的變革を他の方面から眺めるとき、從來の功利的・小乘的戦争から、今や道義的・大乘的戦争へと變革しつゝあるのが認めらるゝであらう。從來の歐米流の戦争は甚だしく功利的・打算的なる本質を以て貫かれてゐる。先づ之を一二の例證を擧げて説明しやう。

クラウゼウッツは、その戦争論に於て次の如く述べて居る。

「相戦ふ二者の行動は屢、商業取引に類似してゐる、即ち兩國は夫々その當面してゐるところの危険と期待し得べき利益とを評量し、それに應じて三萬乃至四萬の兵をいはゞ株券として投資し、此の投下資本以上の損失を受けないやうに、事を鹽梅するのである」<sup>(註一)</sup>

かゝる戦争論を鵜呑みにすれば、我々の屬する中隊も大隊も師團も軍も、共に戦争指導者達の投資する一種の株券に過ぎぬこととなる。

それに依つて指導者達が自己の利潤を追及する一つの手段としての株券——中隊・大隊・師團などといふものも彼の見地からは一種の株券であつて、或る戦ひに何箇中隊・何箇師團を使用するかは、一つに指導者達がそれを行使することによつて——それに投資することに依つて——得らるゝ利潤と、それに失敗した折に受くべき損失とを天秤にかけ量つて見て事を決する。例へば今こゝに五ヶ師團を用ひんと決心する場合に就いて考へんに、五箇師團の中たとへ三ヶ師團を失ふとも、その失へる三ヶ師團の價以上にその戦ひに於て儲け得る利潤の方が大なる場合は、敢然として投資、即ち「兵力の使用」を行ふ。若し然らずして、損益相償はざるときはそれを断念するといふ、これが戦争を指導する基本的思想であるといふのである。軍隊も斯かる根本動機と思想に於てのみ行使されるものとしたら、軍隊内部の統率や團結或ひは戦闘意志は如何なる影響を受けるであらうか。而かも以上の所論は單なる彼の片言ではない。それこそ正にクラウゼウッツの戦争論を貫く根本思想であつて、彼が屢々抽象的、概念的に用ふる政治目的、或ひは政治上の目標なるものは實はその實質・内容に於ては功利主義・打算主義そのものとも謂ふべきである。蓋し、近代の資本主義文化、自由主義・功利主義文化の本質に想到すれば、かく抽象的・概念的に述べられたる政治目的・政治目標とは抑、如何なる内容のものであるかが判然

とする筈である。即ちかゝる時代社會に於ては戦争を指導する實勢力はブルジョアジーであり、之がため結局は彼等が自己の利潤を追及することを主なる契機として戦争が勃發せしめられる。又ブルジョアジーたる獨占資本家が自己の獨占的利益を擁護し、それを擴充せんとして、遂にそれが戦争にまで發展するのであつて、この種の戦争は彼等がヴェールの裏から操る不可見の糸によつていとも巧妙に指導せられて行くものである。クラウゼウッツの戦争論は正に最もよく資本主義戦争、帝國主義戦争の實體を、抽象して體系的に理論づけたものとも觀得るのである。尤も事實に於て、近世紀以來の歐米流の戦争は賠償金を獲る、領土植民地を奪取する、市場や利権を獲得する、これが根本動機であり、これが窮極の目標・最後の解決條件であつたのであつて、それ以上に基本的なものとしての道義的動因は認められぬのである。イギリスは印度を戦ひとつてそれを自己の寶庫とした。寶庫とは遊んで居つてもそこからたふく利益が上つて來る寶の庫であり、英本國自身の利益以外に印度人の利益幸福を慮る寶庫などは考へられぬ。そこに寶庫の寶庫たる所以があるのではなからうか。亦反面に於て、かゝる寶庫・領土・植民地、利権を漁る戦争の反道徳性に就いて、從來餘りにも當然なるかの如く考へられて來たこと——それに就いて餘りにも疑惑を起さなかつたところ——に蔽ひ得ぬ近代戦争の功利性・唯

物的理念が明證せられるのではなからうか。クラウゼウッツも亦時代の子である。近世資本主義文化の發展期に生を享けた人であつて、従つてその思想も亦その基調から離れ得なかつたのは蓋し無理からぬことではあらう。

要するに、クラウゼウッツの戦争論の基本的思想は蔽ひ得ぬ一つの唯物的功利主義であり、打算的合理主義である。我々はそれに就いて更に他の一つの例證をその書の中から引抜くことが出来る。彼は曰ふ。

「吾々が敵より要求するところの犠牲が小なればなる程、敵の吾々に抗する力も小となると見てよい。所で敵の用ひる力が小であれば、それに應じて吾々の用ふべき力も小であつて差支へない。又吾々の政治上の目的が小であればある程、吾々が之を重要視する程度も亦小となり、必要なるときは之を放擲することも亦容易である。従つて此の點から見ても吾々の努力の程度も愈、小となるであらう。

是に由つて之を觀れば、戦争の元來の動機たる政治上の目的なるものは、吾々が軍事行動によつて達しようとする目標に對しても、それに必要なる力の發揮の程度に對しても、同様に尺度となるのである。」<sup>(註二)</sup>

註一 クラウゼウッツ「戦争論」岩波文庫版下巻四九八頁

Clausewitz: Vom Kriege 1935. Leipzig S. 603.

註二 同

上巻六三—六四頁

ebenda S. 42.

かゝるクラウゼウッツの理論を碎いて表現すれば次の如くにもなる。

「自國の政治上の目的——言葉を換へて云へば、敵國より要求するところの犠牲——更に露骨に言へば、自國が對手國より強奪しようとする獲物、利権——が、小になればなる程、敵の抵抗も少からうし、従つて我の用ふる力も小でよろしい。殊に敵國から、せしめ得る獲物や利権が甚だしく少いと判明したときには、強奪しようと考えた自己の意圖——政治目的——を放擲する場合もあり得る。要するに幾何の兵力を使用すべきかは、一つにそれに依つてあげ得る利潤権益と見較らべてから決定すべきである」と。

果してこの理論から、我が日本の戦争が理解できるであらうか。「天に代りて不義を討つ」と謂ふ戦争、「領土を求めず利権を奪はんとするに非ず、却つて帝國主義の桎梏や赤魔の跳梁から對手國の無辜の民を救出し、共榮の旗の下、永恒に彌榮える樂土たらしめんがための戦争」そ

して又「かゝる聖なる戦争のためには、數十數百億の巨額の戦費を失ふもたじろがず、數萬の尊き生靈を失ふも尙ほひるまざる」我が皇國の戦争に對する態度がクラウゼウィツの如何なる理論から理解できるであらうか。

かくの如き、打算的、功利的思想に支配せられてゐる戦争論なるが故に、戦争と道德、戦争と道義などといふ戦争哲學の根本問題、戦争論の據つて立つべき基礎的原理について、次の如き怖るべき告白をなし、文字通り自己の戦争論を非道義的・殺人戦争の理論であると裏付けて、敢へて疑はず、敢へて苦しませざるの理由も判明し、且つそれこそ却つて彼にとつては當然すぎる程當然であることも理解し得るであらう。即ち、曰く、

「戦争哲學の中へ博愛主義を持ち込もうなどとするのは、不條理も甚だしいといふべきである」  
(註)  
291

註 クラウゼウィツ「戦争論」、岩波文庫版上巻一五三頁。

Glausowitz: Vom Kriege 1935 Leipzig S. 361.

「所で博愛家は次の様に考へるかも知れぬ。曰く、敵に必要以上の損害を與へることもなく、巧妙に之に武裝解除させ、乃至は之を打ち破る工夫がある。そして實際戦争の技術は漸次此

の方向に向つて進んでゐる。と。此の説は如何にも尤もらしく見えるが、だが吾々はその誤謬を粉砕しなければならぬ。何故といふに、戦争は實に危険なる事業であつて、かやうな危険な事業にあつては宋襄の仁程恐るべき誤謬はないからである。蓋し、……中略……今相闘ふ二者の中、一者は何ものにも用捨せず、流血にもたじろぐことなく、此の暴力を使用するとし、他者にはかゝる斷乎たる決意が缺けてゐるとすれば、必ずや前者が優勢を占めるにちがひない。かくて後者も亦之に拮抗する暴力を用ひざるを得ず、その結果は暴力の行使には如何なる限界もないこととなる、若し限界ありとすれば、それは、兩者の間の力の均衡によつて與へられるに過ぎない。

これが事態の真相である。粗暴を厭ふの餘り、その本質を看過せんとするは、實に無用な努力であるばかりでなく、實に不合理なる努力でさへある。」と。  
(註)

註 同右書五二頁—五三頁。

ebenda S. 361.

クラウゼウィツの戦争論は、フランス革命が起り、ナポレオンが出で、近世資本主義文化が漸く大幅なる發展の歩みを開始せる折の戦争の理論である。中世紀の精神的、非功利主義的文



化が崩壊し、近世紀の唯物的、功利主義的文化の據頭する浪に乗つて現はれ出でたる戦争論に他ならぬ。更に言へば君主や封建諸侯の専制、僧侶や教會萬能の中世紀的強權主義、團體主義がその光を失つて、新たな近世紀的個人主義、自由主義が目覺ましく巢立ちつゝある際に生れ出でた戦争論である、而もこの戦争論こそは爾後今日に至るまでの、「自己の利潤追求を第一義とし」、「利益の前には道も道理もその影を没する」といふほどの唯物的、功利的、小乗的、反道義的なる資本主義時代—利益社會—に、現實の戦争の輝かしい指導原理として採り入れられて來た戦争論である。再言すれば、弱肉強食飽くことなき近世資本主義戦争、侵略主義戦争、帝國主義戦争の悉くが、その最高の指導原理として採用し、實現し來つたところの戦争論である。このことは敢へて、元帥シュリーフェン伯爵や、フランス陸軍中將ピエロン、英國の有名なる兵學者マレーなどの言に聴くまでもなく、餘りにも世間周知のことであらう。

而して以上の觀察からすれば、クラウゼウッツの戦争理論が如何に功利的、打算的であらうとも、また如何に反道義的、小乗的であらうとも驚くにも價しなければ、また彼クラウゼウッツのみを責めるのも當らないと思はれる。然し乍ら、茲で我々が看過すべからざることは、かかる理論がその根本に於て、如何に東洋本來の兵學と遠いか、特に日本独自の兵學原理と如何

程背馳して居るか、といふことである。このことは更に後節に於ても觸れるであらうが、序でに茲でも少しく觸れて置かう。孫子はクラウゼウッツの如くに「流血にもたじろぐことなく、暴力の限りを盡し」——「殲滅を以て至上の戦略」——なども主張せず、又「武士の博愛心能く敵の枯骨にまでも及ぶ」といふやうな深き人類愛が、戦争には「實に危険極まりなく」「恐るべき誤謬」であり、「無用の長物」となるなどは教へない。それとは反對に、先づその開卷劈頭に、「一曰道」と述べ、且つ續いてこの「道」の效用を強調し説明して、「道者、令民與上同意、可與之死、可與之生、而不畏危也」と曰ふ。戦争は一つに道義に即すべく、道義に即したる戦争にして始めて危きを畏れず、學國一體、上下一心、以て生命を捧げ、畢生必死の大勇猛心を發揮し、遂に輝ける戦勝をも獲得し得るに至る。「道」こそは戦をして勝たしむる根本前提であり、窮極最後のものであることを説いて居るのである。尤もこの「道」たるや、更に精細に觀察すれば、自國民の一致團結を主眼としたる道であり、従つて日本兵法の如く「道ハ途ニ敵ヲシテ我ト心ヲ同ジウセシメ、ソノ主ニ敵シテモ我ニ悦服スルニ到ラシムル」とは説かない。茲に尙孫子に於ける小乗性があり、従つて「兵ハ詭道ナリ」の他の重大立言がなされるに至るのである。然れどもクラウゼウッツに比較すれば、尙、そこには相當の隔たりがあると謂ひ得るであ

らう。殊に日本の戦争の原理を省みれば更にこの點を明らかにし得る。

先づ、日本兵學の源流として、明治天皇の御製を拜し、大御心の存する所を仰がう。

日露戦争の眞最中に、「仁」と題しまして

國のためあたなす仇はくだくとも

いつくしむべき事な忘れそ

四十二年同じく「仁」と題しまして、

いつくしみあまねかりせばもろこしの

野にふす虎もなつかざらめや

更に、我が日本兵學の巨星、山鹿素行は、宛もクラウゼウッツ流の「殺略戰陣、如何なる流血にもたじろぐことなく、粗暴の極を盡すのが、之戦争である」と觀るが如き、末流技術の説を戒めて曰ふ。

「今世兵を談するの士、技術の説を成し、權謀の略を假る。故に、學之を兇器不詳に陥しいるなり。噫、嗟嘆す可きなり矣」

「兵の源流を知らざれば、則ち、或は勇を好み衆を恃み、或は爭論利口にして、而も邪路に入るの端なり」

「兵の用を努めて、其の本を知らざれば、則ち、奇巧を深くし、利慾を好み、兵の源を索めてその流れを知らざれば、則ち虚遠に馳せて、下學を忘る。竝に微妙至善の要を知るべからず。故に説を作して後の君子を待つ矣」と。

これは素行先生がその兵學の秘傳極意とも謂ふべき「兵法奥義」の卷頭に自ら序せられた文の一節である。

近世西歐文化は、單に兵學のみに限らず、凡て微に入り細を穿つ技術の説に傾いて、兎角その據つて起る源流を知ること忘れてゐるやの感がある。このことのために、兵學に於ては徒らにそれを殺略不詳の末技に陥らしめ、而かも後にも説くが如く、「眞の勝利が何たるか、永續する勝利は如何にして得らるべきか」の根本問題を逸し、それがために今やその兵學の根柢よりの動搖、崩壊を必然ならしめてゐるのである。

要するに、歐米近世文化の本質は甚しく功利的、小乘的なる一面をもつものであつて、それは單に右の如き戦争の理論の上に現はれてゐるばかりではなく、戦争の事實の上に最もよく顯はれてゐるものである。我々が英國なり、或ひはその他の歐米諸國の戦争の史實に就いて觀る

時、近代戦争が如何に功利的なものであり、如何に小乘的見地に立つもつであるかは、事實そのものが最も雄辯にそれを物語つてゐる。言葉を変へて言へば、それらの中には、自己と對手との相対的立場を超えて、更に大乘的なる見地から出發せる戦争の例などは殆んど見出し得ぬと謂ふも過言ではなからう。所が、かゝる功利的、小乘的なる戦争の本質は今や將に百八十度の轉換を敢行せんとしつゝあるやに思はれる。これに關して、先づマルキシズムの戦争觀から順次觀察の歩を進めやう。

クラウゼウッツの戦争理論並にそれが現實への顯現たる近世歐米の戦争事實なるものは、既述の如く甚だしく小乘的なるものであるが、之に對して、近世文化を否定して奮起したマルキシズムの戦争なるものは、聊かその趣きを異にする。即ち彼等は謂ふ。「資本主義はその發展の最後の段階に達し、今や所謂獨占資本主義時代——金融資本主義の時代——を現出してゐる。この時代の戦争にあつては、獨占資本家、更にその實體から言へば、少數なる金融資本家なるものが、その社會の事實上のヘゲモニーを握つて、經濟は勿論のこと、政治も言論も文化も其他の一切をその支配下に置き、之が運営のキーポイントを掌握する。かゝる社會の戦争はその實際に於て、只彼等金融資本の利益・慾望を最高の目標・最高の力として指導せらるゝもので、

畢竟するに一部彼等の利益の爲めに、國全體を擧げて戦争の渦中に投ぜしむる。而してかゝる戦争に依つて得られる戦果は、自ら銃を執つて立ち戦の場にその××××たる大衆の利益や安寧ではなく、却つて蔭にかくれ後方の安全地帯におさまつて、背後から戦争を操つた金融資本、獨占資本の肥満であり、所謂戦争成金の氾濫である。大衆は×××し獨占資本が利益を拾ふ。これが資本主義の最後の發達段階たる帝國主義時代の戦争であると。」と凡そ斯くの如き種類の戦争が、國によつては、過去に於て存在もしたし、また將來も依然として存在するであらう。否、寧ろ英米佛の如き高度資本主義國家の戦争なるものは、その基本性格に於て悉くがこの種に屬するといふも過言ではあるまい。所が、かゝる戦争に較べれば、たとへその根本に於て謬れるものありとはいへ、マルクス主義戦争なるものはその本質に於て多大の相異があるやに見える。と言ふ所以のものは、少くともマルクス主義者の意圖し、高言するところによれば、彼等の戦争は單に自己の利益だけを目的とするものではなく、廣く世界のプロレタリアートを救出するにあるといふ。その數に於て人類の大多數を占めるプロレタリアを少數横暴なるブルジョア・獨占金融資本家の搾取から救ひ、また世界の被壓迫民族を少數強暴なる帝國主義國家の壓迫・迫害から解放するところにその戦争目的があると主張する。

ソヴェート・ロシアの前野外教令を見ると、その巻頭真先の綱領として、「赤軍の任務は其の存在の事實を以て世界の被壓迫労働大衆の解放を支援するにあり」と掲げて居る。この綱領から言へば、赤軍の敵とするのは敵國のプロレタリアートではなくして、却つてそのプロレタリアートの解放を支援し、彼等の味方たるが故にこそ戦ふのだといふことになる。「敵國の大衆よ！ 我々の敵はお前達ではない！ 却つて、お前達のために、お前達を搾取するものを倒し、お前達を壓迫しお前達を奴隷化するブルジョアジーを征つて、彼等の手からお前達を解放するのが我々の目的である」。かく呼びかけてゐるのである。かくの如く敵國の大衆を敵としないこと——こゝにソヴェートの戦争が、過去の凡ゆる戦争と異つて、劃期的なる質的變革を遂げやうとする傾向が窺はれてゐるのである。從來の高度資本主義、帝國主義戦争の本質に於て見らるゝ如き極めて小乗的なる戦争に比較すれば、如何程かは大乗的、幾分かは普適的性格をもつ戦争へと向ひつゝあることが認められるやにも見える。

而して、彼等の戦争の斯くの如き性格こそは、彼等自身がこれを以て他の如何なる精銳の武器にも優る自己の強味と自信し、自國側の勝ち味と自負しつゝあるところのものである。而も彼等のこの自信、この自負たるや、相手國の國情の如何によつては強<sup>あてが</sup>ちのなきに射る矢とも評

し去られぬ實效をもつ。即ち、相手國が、若しその現實に於て、近世歐米流の資本主義的帝國主義の實際から超脱しきらぬ場合——換言すれば、萬民悉くその處を得ず、經濟生活に於て、またその政治・社會・思想・軍事等々の各分野に亘つて、看過すべからざる階級の對立があり、有産者と無産者——資本家と労働者——大資本家と中小産業群——都市労働者と地方農民などの間に蔽ふべからざる矛盾があり、逐次に累加する搾取壓迫がよく克服清算せらるゝことなくして、放置せられあるが如き場合——かゝる場合には、マルクス主義戦争のかゝる性格は、漸時に大衆を魅惑し、遂には彼等を驅つて自國敗戦主義をまで高く掲げてその國內に蜂起せしむるに至る。斯くの如き事態の到來……否、その蘊釀と激化……こそ、是れソ聯並にマルクス主義者達の狙ひどころでもあり、待望し待期するところのものである。

尤も、茲に指摘したマルクス主義戦争の大乗性なるものは、極端なる一面觀からは斯くも見えるといふに過ぎぬものであつて、彼等の戦争を全體的に觀察すれば、それどころか却つて甚しく小乗的であり、反道義的性格をもつことは、敢へて多言を要せぬであらう。少くとも彼等が意圖するところ、それによつて導かれる結果とは全く相反するものであつて、プロレタリアートの解放の彼等の旗印が窮極の到達點は、前にも増したる一般大衆生活の抑壓とその陰慘